

會報

第十五號

培玉女子師範學校校友會
培玉女子師範學校校友會

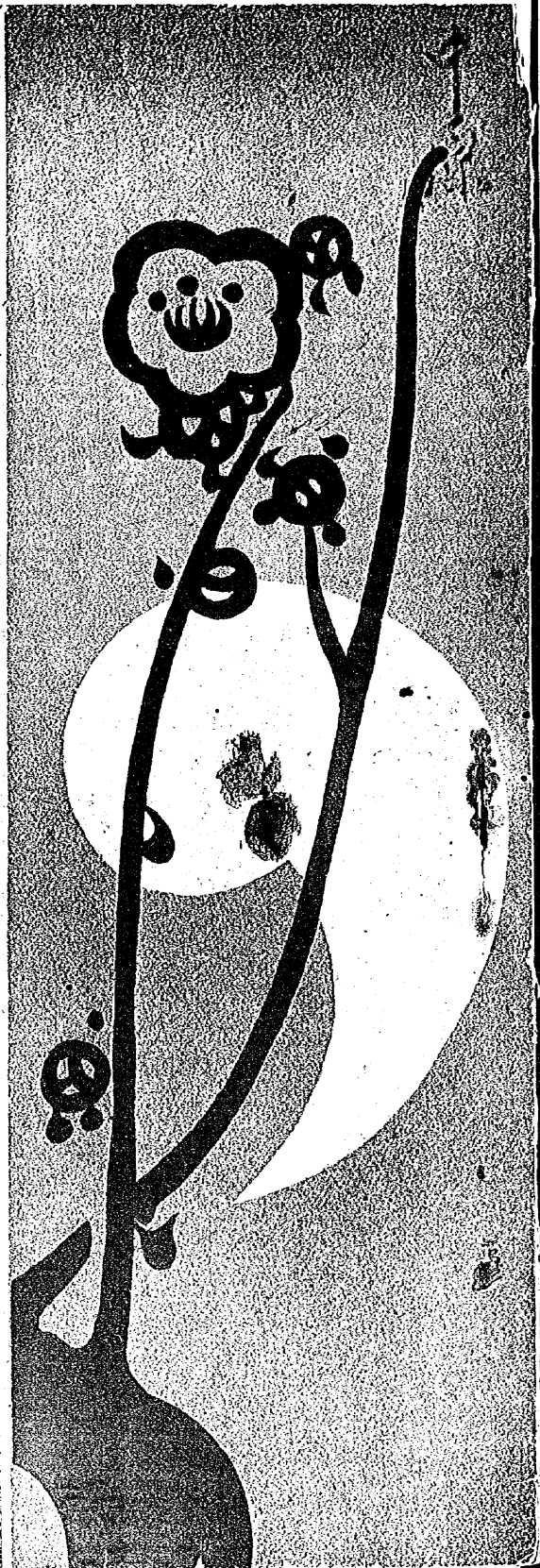
仲

七

頁

中

二



10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

會報第十五號目次

●口 繪

職員

台覽成績品その一
台覽成績品その二

●講 話

大正九年明治神宮鎮座遙拜式講話
十一月一日
女教師へ
女教師の本領及び其能率について
内から外へ
教育者としての普公

小島校長先生

堀内埼玉縣知事訓示

野田義夫先生

下田次郎先生

小島校長先生

●女教師會記事

第三回埼玉縣女教師會概況
帝國教育會主催全國女教員大會概況

●文 苑

母をしのびて以下六篇

●詞 藻

長詩 袖のほころび以下六篇

和歌 ゆく秋以下三十三首

●通 信

京都より(佐藤廣治先生)

●旅行記

關西旅行記

日光旅行記

稻毛旅行記

●學校記事

先生方の御移動

式さ會

旅行

音樂部報

校友會費決算並に豫算

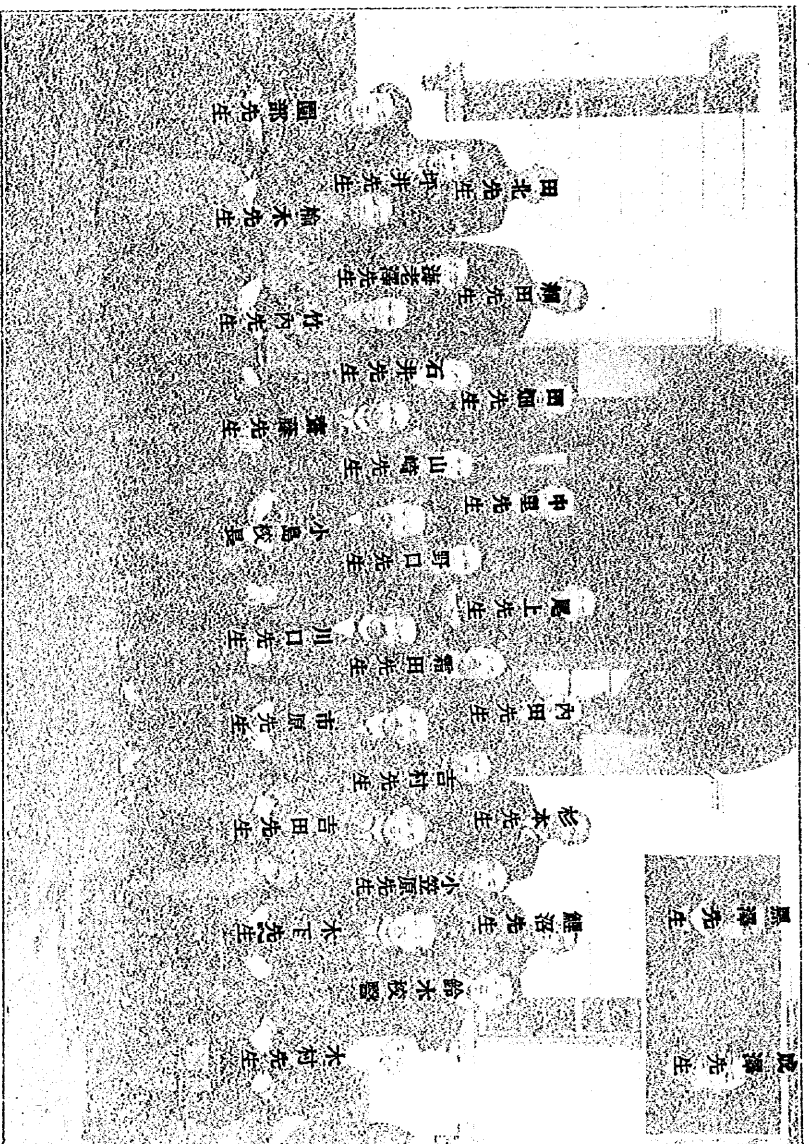
●同窓會記事

同窓會便り

大正八年度同窓會々計報告

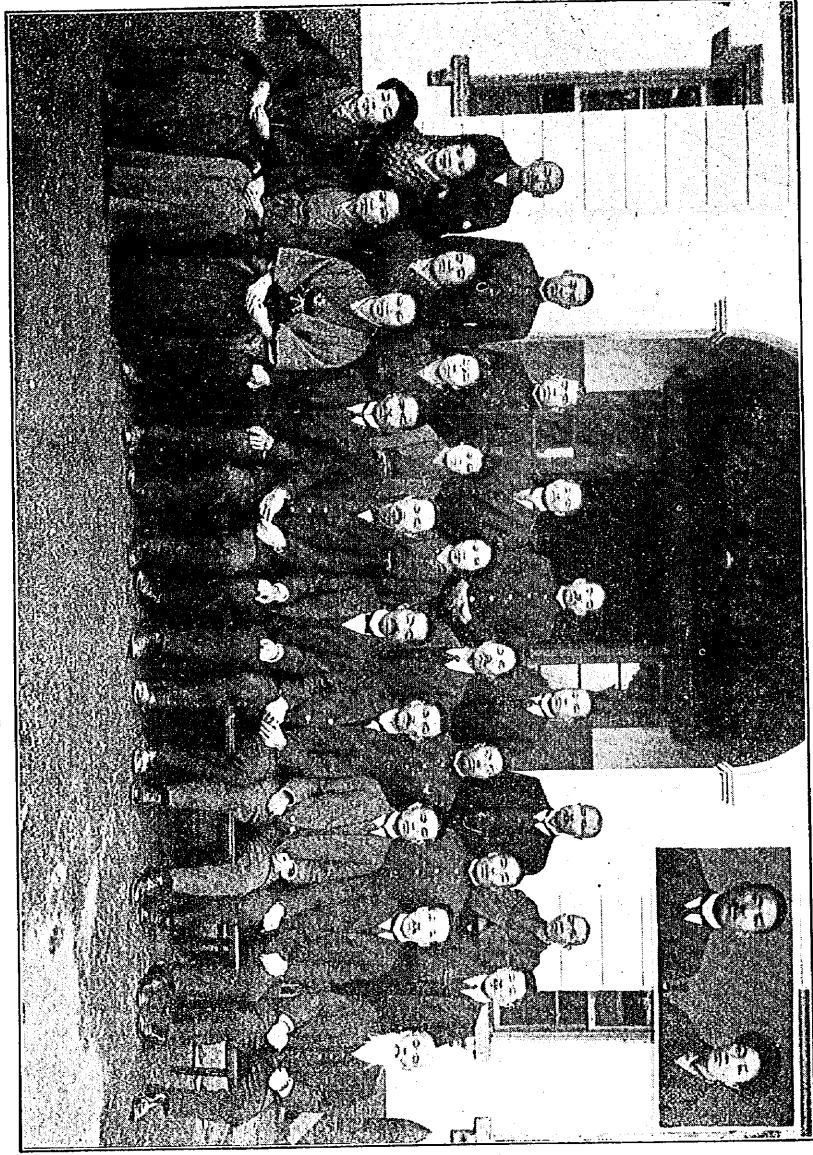
附 會員名簿

編輯餘録



職員表

員 職



黒 野 次 夫

須 野 次 夫

眞 路 次 夫

小 笠 原 次 夫

本 本 次 夫

吉 林 次 夫

内 田 次 夫

露 田 次 夫

眞 土 次 夫

裡 口 次 夫

中 里 次 夫

山 柳 次 夫

田 路 次 夫

石 井 次 夫

藤 田 次 夫

新 井 次 夫

田 井 次 夫

本 井 次 夫

園 雅 次 夫

藤 木 次 夫

竹 内 次 夫

渡 瀬 次 夫

小 島 茂 男

川 口 次 夫

市 川 次 夫

吉 田 次 夫

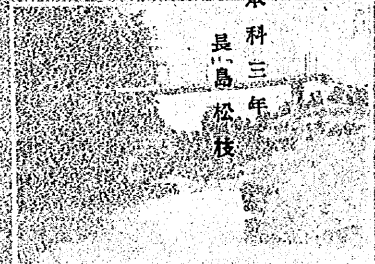
木 下 次 夫

木 村 次 夫

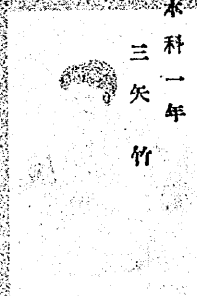
崎 本 對 馬

品 績 成 覽 台

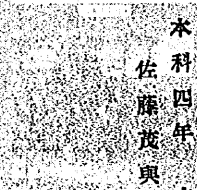
校學範師子女縣玉埼



本科三年
長島松枝



本科一年
三矢竹



本科四年
佐藤茂興



本科二年
小田島フミ



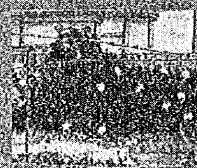
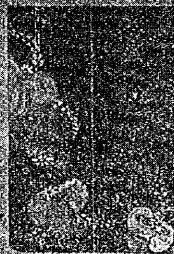
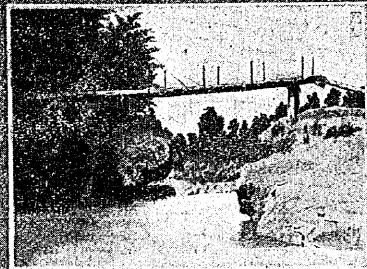
本科二部
田中千賀



本科四年
中村志津

品 績 成 覽 台

校學範師子女縣玉埤



本
杯
三
半
景
品
對
封

本
杯
一
半
三
犬
竹

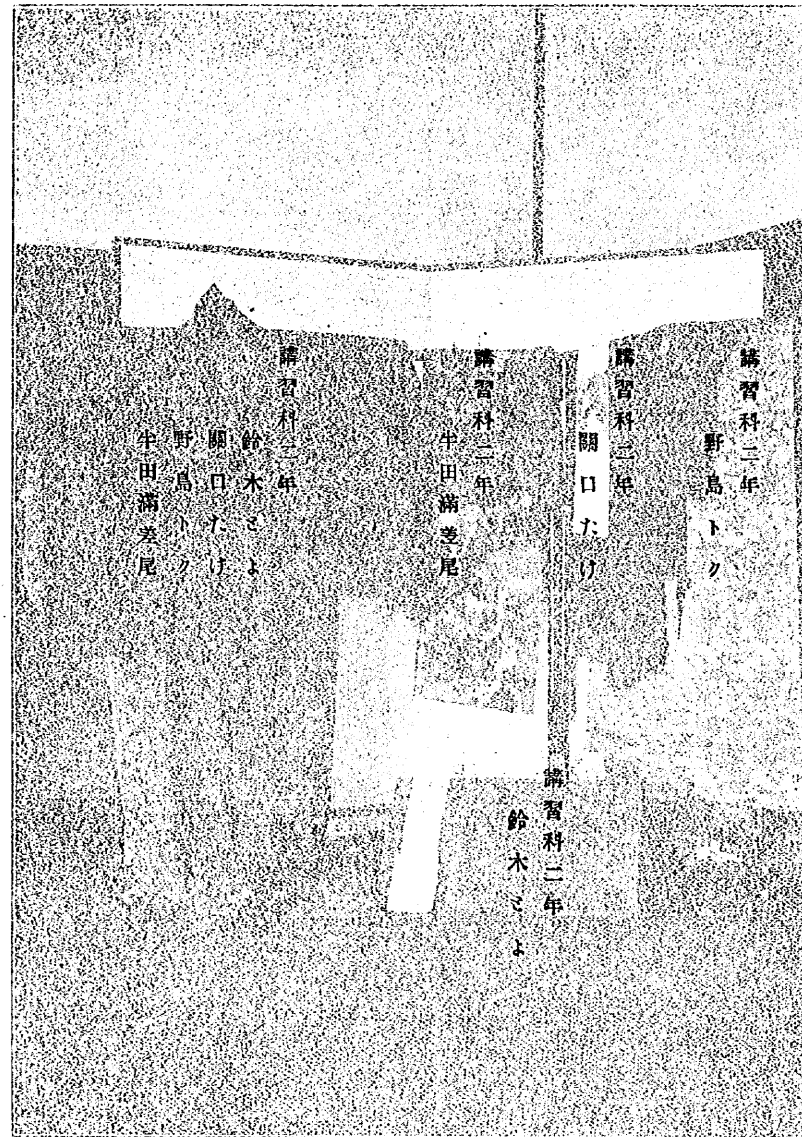
本
杯
二
半
田
品
泉
封

本
杯
二
半
田
中
千
覽

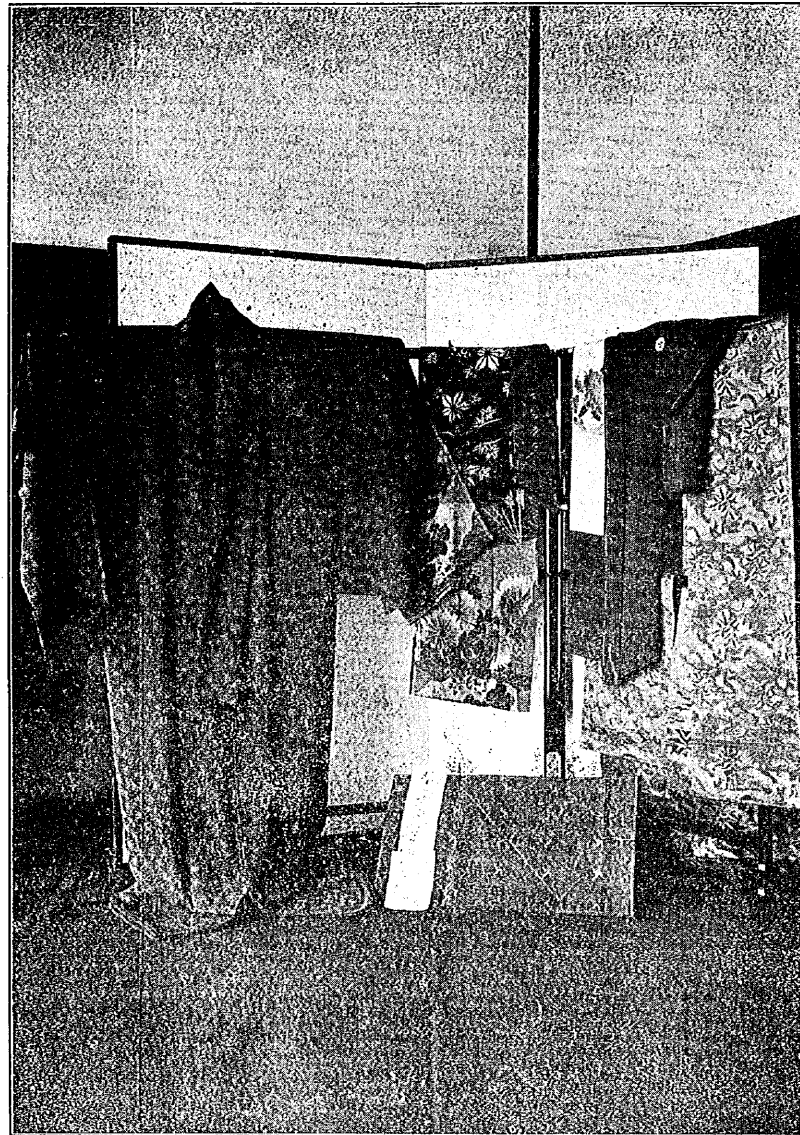
本
杯
四
半
中
林
志
將

本
杯
四
半
山
嶺
黃
興
小
田
品
三

品 績 成 覽 台



品 績 成 覧 台



半田 齋 彦
禮 昌 イ
關 口 イ
翁 木 イ
龍 賢 林 二 半

半田 齋 彦
龍 賢 林 二 半

關 口 イ
龍 賢 林 二 半

禮 昌 イ
龍 賢 林 二 半

翁 木 イ
龍 賢 林 二 半

講話



大正九年
十二月二日 明治神宮鎮座遙拜式講話

小島校長先生

今日は明治神宮の鎮座式を行はせられますに就て此に遙拜式を挙げたのであります。官衙學校皆休暇を賜はり、全國皆遙拜式を舉げます。東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木の神宮に於ては、本日 明治天皇 昭憲皇太后の御靈代を宮中より奉遷して此に鎮座しますので、神聖とも、崇高とも、森嚴とも尊いとも、ありがたいとも、神々しいとも申しやうのないことであります。東京市及び代々木の邊りは非常に賑ふことでありませう。いで神宮並に 明治天皇 昭憲皇太后に就て聊かお話致しませう。

抑々明治神宮は社格は官幣大社、祭神は明治天皇、昭憲皇太后にましまし、大正四年十月七日に地鎮祭を行はれ、直ちに御造營に着手し、大正八年七月十二日に上棟式を行ひ、此度落成して今日鎮座祭典を行はれるのであります。鎮座地總坪數二十一萬八千八百九十三坪、本殿玉垣内地積六千五百坪、社殿其他の建造物六百五十坪、御造營工事費五百二十一萬九千五百六十三圓といふことであります。用材は全部木曾及阿里山の檜で、約一萬九千三百尺を要したといふこと、石竹檜皮等の材料悉く全國の名産の物を集めました。大工や職工を全國から募集しました。さて其人々が孰れも忠實恪勤に働きましたが、其の中にこん

な美談もあります。岡山縣の内藤駒三郎といふ大工は、募集に應じて弟子をつれて遙々東上し早速造營局へ出て、私は皇恩の萬分の一に報する爲、無報酬で奉仕したいと申し上げましたが、無料奉仕を受けることは規則上出来ぬといふことで、直備として仕事をさせることに成りました。すると此人は約四ヶ月間仕事を致しまして、其頂戴した工賃をすぐに郵便局に預けて、其れが元利で二百七十七圓餘に成りましたのを其儘神社局長に宛て送金致しまして、費用の一部へといつて献納致しました。それに、賤が身も君と國とに盡さんと思ふ心は同じなりけり「吉備の番匠駒三郎」として一首の歌を添へてありました。又京都の深見重助といふ組紐の名人、これは明治天皇御料の神劍に附屬の唐組平緒の調製方の御用を勤めましたが、この唐紐といふのは全部手編で、現在全國に能く出来る人が無いのださうです、それで深見氏を探し出して御用命になると、深見氏は八十歳に近い老人ですが、非常な光榮とし感激しまして、早速自分の子を伊勢大神宮に代參させ、ごうか首尾よく御用を仕遂げるまで壽命のあります様に御守護を願ひたい、この事が出来ました後は、どんな苦患を受けましても壽命を徹さるゝとも厭ひませんと祈願させ、自分は精進潔齋して一心を籠めて御用品の調製に努力しました、大層見事に出来上りました、首尾能く造營局へ納めると、子供に助けられ乍ら、不自由な身を汽車に乗せて、大神宮へ御禮參に行つたさうです。それから又全國各地の青年團員が上京して、御造營工事を手傳申したものが六十三團體、三千八百人であつたさうで、この人たちが酷暑、酷寒を厭はず、明治天皇に對する感激の念が胸に燃えて我を忘れて働いた、規律も正しく能率も大きく、實に至誠奉公の精神の發露であつた、其れが又團員以外の職工人夫にも善い感化をも與へたといふ。北海道、府縣、朝鮮、臺灣、樺太、關東州等全國各地より献木の數も大層なもので、十一萬本とかいふ。其れが既に鬱蒼たる森林を成して、新に植ゑた許で無いやうにかうくしく茂つてゐる。あゝ昔高津宮の御造營に、人夫となり木石を献じて御作り申上げたといふことと、相並んで貴きことで、皇室の御爲とし云へば強い感激の下に身命をもさし出すといふのが日本魂であります。

偕、明治天皇の盛徳大業をたゞへ上げ奉ることは、到底時間が短くては出来ぬ。明治歴史の全部が即ち是で加之明治以前より申さねはならぬ、即ち日本歴史の全部に亘ることでありまして、明治天皇の偉大は實に申しも盡されませぬ。只其一端を申します。封建制度を改革し、王政維新をなされ、憲法を發布し、教育勅語を下賜し、數度の大戦をなされて捷を占め、臺灣、樺太、南滿、朝鮮をも御治下に就かしめ、極東小日本の地位を進めて世界の大日本とせられたこと、數へ来れば此の中ごの一つがあつても、大皇帝とたへまつるべきでありますのを、斯くばかり大業を幾つも成就なされたのであります。あゝ、明治大帝、世界に所謂大帝といふ帝又は王と比べて皆其以上であります。殊に世の大帝大王は大方征服者であります。力を以て壓服して政治さへ届かぬ。徳化教育などいふものに至つては、殆ど皆無い。アレキサンダー、シヤーレマン、彼得、蒙古の成吉思汗皆然りである。支那で理想的の君と仰ぐ聖主堯舜禹湯文武も比肩するに足らん、殊に禪讓放伐の君であります。

畏くも、明治大帝は御自身の徳行が高くあらせられ、人民に又外人にまで徳化を敷かれたこと、一つや二つでは無い。明徳教化恩澤慈仁の塊りであられせられます。徳治の塊りの大聖人にまします。世界古今獨歩であられる。御在世六十年、悉く是れ生きながらの神にまします、全治全能惟神惟聖にまします。今官幣太社明治神宮に御祀り申し、將來國民崇拜尊敬の的となること、恐くは伊勢大廟と並びての御事であらうと拜察される。

明治天皇乾剛の御徳に配して、坤徳高き、昭憲皇太后がいます。前に申した、明治天皇御治世の大業といふものは、實に皇太后の御内助に成つたものであります。

そして皇太后御自身、社會的事業に御力を盡されたことは數々申し盡すことは出来ません。先づ教育のこと、華族女學校、女子高等師範學校に創立以來御力を御添へ賜はり、屢々行啓ありて督勵を賜ひました。嘗て上野公園教育品展覽會に行啓遊ばされ、陳列品を御巡覽あらせられました時、御先導の千家東京府知

事より出品のいづれも同種にて御目を慰め奉るに足るものも無き旨の畏まりを啓し上げました所、陛下には畏くも種類は同一なりとも、製作者は各々異なることなれば、仔細に一覽すべしと宣ひ、猶此等を能く教へたる教師の心勞察するに餘ありと仰せられ、又多くの學校生徒の奉送迎したるを見をなはし給ひて、雨中まことに氣毒なりと宣はせられました。種類は同じでも製作者は皆異なる、其人めい／＼の苦心に御同情を給ひ、又教師の苦心をも思ひやり給ふ貴き有り難き大御心、誠に感佩の外は有りません。慈善事業に就ては、赤十字社を養護し給ひ、巨額の金を御下賜あらせ給ひ、毎年總會毎に行啓あらせ給ひ、風、水害、天災に賑恤の御下賜金あり、戦士の慰問、傷死者の慰藉、慈恵病院の患者に御下賜あり、愛國婦人會にも多大の御心添を賜はる杯、其他數々至らぬ限なき御仁慈を垂れさせ給ひました。殖産興業に就ても、其振興に御心を用ひ給ひ、宮中にて御手づから養蠶を遊ばされ、内國博覽會に行啓ありて斯道を御奨勵あらせ給ひました。

御資性御聰明にして、御學問の御造詣深くいらせられましたことは、御作り遊ばされた文章御歌などで拜察いたされます。「禁庭の野分」などいふ文を讀本に出で居るを拜讀したこともあらう。金剛石や十二徳の御歌、又年々御歌會始の御歌などを拜しても、其の御見事なこと、三萬餘首の御詠があつたと漏れ承るだけでも、歌人としても古今に卓絶して在らせらるゝと申上げられます。

皇太后の御學問の御堪能にましますに就て、其の偶然ならざる一條の美しき御昔語があります。其は、陛下が年久しく御仕へ申した某女官に、徒然の折親しく御物語あつたことであります。今から考へれば、父は子女の教育に深く心を盡されたものであらう。公卿の間にはそんな事をするものは無いと人に云はれるのまかはず、我が七歳の時から漢學の素讀を授けた。身は漢學が大嫌ひで、貫名(漢學の教師)が切に教へんとするを逃げ廻り、机に向ふ折は少く、男兒の如き遊びを好んで人々を困らせたとさうだ。翌年は八歳になつた。今年からは素讀ばかりで無く、講義も教へるといふ事だが、實は「子曰はく」など誠にさうで、

折角の講義も耳に止まらなかつた。或日暮參の歸りに道ばたの稻穂を抜きて、粒々實を結びたるを弄びながら、不圖其前に教へられた「苗而不秀、秀而不稔」といふ論語の句を思ひ出で子供心に深く浸み人若し稔らぬ稻の如く、葉莖徒らに長じて、只一生を徒らに終らば、甲斐なき事である。貫名が熱心に教へられるを、逃れよう逃れようとしたのは返す返すも悪かつた。今日から心を改めて勉強しようと思ひに誓つた。さて其日机に向つた我が姿が常に似ないのを、貫名が怪んで問うた。有りのまゝを話すと、貫名はお教へ申した事を自得なされて、よくも御奮勵の御心が起つたと涙を流して喜んでくれた。其の面影が今も猶ありありと目の前にあると、御話あつたといふ事でありませう。皇后として、天皇陛下に對し奉りての御徳はこれ亦至らぬ所なくおはしました。「禁庭の野分」なども、其の御心の至り深きを拜することが出来る。明治二十四年、主上御船で吳佐世保の鎮守府へ行幸の折。

日より待つ御ふねの中やいかならん

霧たち渡る荒うみの上に

又いつの折にか旅宿夢といふ題にて

大前にさふらふと見し夢のまは

旅にありとも思はさりけり

明治三十八年以後沼津に御避難あらせまし、折、御保養の爲でもあり、宮中を離れていただきますことなれば少しは御くつろぎもあらせ給ふことと、拜察するものもあらうが、決してさやうで無く、御寢所に入らせらるゝ際にも、東京宮城より、聖上只今御機嫌よく御寢との電話到達するまでは、夜更けても端然と御正坐あらせ給ふ。聖上の御寢は大抵十一時より十二時の間であらせられるが、天候の模様などで電話の遅着もあります、かくて御平安御寢の電話を聞召されて宮城を御遙拜あそばし、御寢に入らせ給ひしこの御事で御座います。

婦人として人の身の上を思ひやり、妻として夫につくす貞淑の道、これは日本婦人の美德で世界に冠絶する所であります。畏れながら、昭憲皇太后には婦人の模範をお示し給つたものであります。婦人の本領は愛にある。自己を没して他を愛する、天使の如き愛、愛の女神、これこそ婦人の修養すべき尤も根本の徳であります。

明治天皇崩後、昭憲皇太后には沼津に御静養遊ばされて、さびしく世を送り給ひましたが、身を行ふ規矩は厳正にして、御側仕の者には寛大であらせられ、御親らの身嗜は儉素であつて、臣民には御手厚くあらせられました。附近の人民に折々御賜物が有り、わけて高齢者に御賑恤がありました。野田さなどいふ百七歳の老婆などは分けて特別な拜謁優渥な御恩召を賜りました。沼津の大火愛鷹丸の沈没の際など罹災者及び遺族に御救恤あらせ給ひました。誠に畏多ききはみで御座います。謹んで兩陛下の御遺徳をしのび至誠以て御奉公申し上げたいと存じます。

明治天皇御製

照るにつけ曇るにつけて思ふ我民草の上はいかにぞ
世の中の人におくれを取りぬべしす、まむ時にすゝまざりせば
國の爲仇なす仇はくどくもいつくしむべき事な忘れて

昭憲皇太后御歌

四方の海みなはらから睦みなば世に波風は立たじぞ思ふ
眼に見えぬ神にむかひて恥ぢざるは人の心の誠なりけり
神風の伊勢の内外のみやばしらゆるさなき世をなほ祈るかな

女教師に望む

堀内埼玉縣知事訓示

今日此の會に出席しまして諸君にお目にかゝる事をうれしく存じます。殊に只今は勤続者の表彰式がありまして表彰を受けたる諸君に於かれましてはどうか教育に家庭の事情のゆるすかぎり更に御盡力あらん事を希望いたします。

御承知の通り日本が戦争によつて五大強國の列に入りましたこの事たるや、國力の増進の結果でありまして光榮の事であり、従つて大國の体面を恥しめざるやう知徳を完成するのが必要であります。そして我國民の義務として受ける教育は諸君の力に待つところが多いと云ふことは疑はないのであります。我國民教育は進歩したのでありますが、今後もう一段に進歩しなければなりません。どうぞ一段と御奮勵をねがひたく存じます。

扱いかにして教育の進歩を計るかといふと直接教育に従事せられる方が力を致さなければなりません。縣民の向學力、体力の増進をはかることは屢々申してあることでありますから諸君もお聞きのことと思ひます。それから詳しく申しませぬが男女を問はず縣民の体力増進を計る事を願つてやまないしで御座います。それには十分なる學力と知徳がなくは協ひません。さて皆さんが兒童を引受けて教授なさるにも生徒に徹底した知識を授けることは中々困難なる事と存じます。が十分の修養を積んで兒童をしてあくまで徹底したる知識を得られる様お願ひいたします。又各小學校を見るとその教職に居られる方は大抵男で婦人は少い。やゝもすると數の上に少ないせいでもあるが學校の大部分は男子によつてなされ、女子は男子に依頼して居る傾向がある様でありますが徒に男子に依頼してすることは遺憾な事と思ひます。さればといつて、或は校長の命に服せず男教員と争ふなどはいけなない事ではありますが教職に従事する上は十分に相助

けて十分に力を發揮せねばならない。そして盡すべきところを盡す本分を盡す即ち自己の能力を自信して一般教員と教育を共につとめねばならない。今更申すまでもなく社會は男女の協力によつて成立つてゆくわけでありまして兒童の教授にしましては男女各その長を以てすることゝを要とします。即ち人間は男女相もちで社會をなしてゆくものである。男は剛健の點をもつて、女子は優美な點をもつて教養しなければならぬと思ひます。社會に於て女子は家庭を作るとか、多くの子女を教養し主人をたすけ以て國家に盡す、いはゆる一家をあげて國家につくす、その覺悟は我國國家社會に必要であります。尙一言したいのは男子の青年會と相まちまして處女會を設立し發展さしたのであります。我國現今教育は足りない點が多くある知徳を修養する目的を以て盡力していただきたい。これは男子の教員にも同様で處女會の爲につくすのは目下の場合必要で御座いますからどうぞ皆さんも十分御盡力下さい、終りにのぞんで益々女子教育の爲にお盡し下されるやうお願い致します。(終) (第三回埼玉縣女教師會に於ける訓示)

昨日といひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり
明日ありと思ふ心のあだ櫻夜半にあらしの吹かぬものは
うき事のはは此上につもれかし限りある身の力ためさん
意らず行かば千里の外も見ん牛の歩みのよしおそくとも
未終に海なるべき山水もしばし木の葉の下くゝるなり
雨そく軒の下石くばみけりかたき樂きて思ひすてめや
わけのほる麓の通は多けれど同じ高根の月を見る哉
なりくは遊ぶ暇はある人の暇なしとて文よめ哉
今日今日と暮せる今日の今の間も再び來べき時ならなくに

春道列樹
親鸞上人
熊澤蕃山
徳川家康
伴蒿蹊
橋守部
道二翁
本居宣長
大隈言道

女教師の本領及び其能率について

文部省督學官

野田義天先生講演

今日この大會に一言申し上げる機會を得ましたのは光榮なことであります。私は本日女教師の本領及び其の能率といふ事に就いて申しあげたいと思ひます。

私は明治四十一年奈良女子高師に行く豫定で外國へ行きました。そして女教師の狀況は詳しく調べて大正元年に歸つて参りました。外國と日本との女教師を比較しまして間隔があまりに遠いので落膽し失望してしまひました。そして奈良に五ヶ年三ヶ月間奉職しまして其間各地で色々意見を發表して居ました。日本の女教師の面目はごににあるのか一体にその仕事がつてゐなかつたのです。女教師の能率といふものが我が國にては極めて低いので自分は度々この意見を發表しましたが又重ねて述べて見たいのであります。米國では御存じの通り女教師が多いのであります。男子の居らない學校がいくつもあります。十の内八割は女教師で二割が男教員の割合であります。英國がそれについて女教師と男教師との割合が四分六分の割合であります。佛蘭西や獨逸には女教師は少い。獨逸は日本と同じ位で二割五分から三割の間を往來して居ります。即ち日本の男教員と女教員とは獨逸と割合が同じです。けれど女教員の能率とを獨逸と比較すると遺憾の點が多いのであります。中等學校等にも女教員は多いのであります。女の學校即ち高等女學校、女子師範學校長はじめ皆女教員であります。日本とは大分、段が違つてゐるのであります。大正六年に文部省で女教員大會がはじめて開會されました。男子の出席が少數なので文部省から私と横山君とが参りまして拜見致しました。女教員の氣運の變化してゐるのに驚きました。女教員の思想を促す原因は世界大勢の變化であります。其の時下田歌子先生の講演がありました。それは大分前英國に行つて見ますとあちらでは女教員が色々男子に負けずにやつてゐる。日本はこれに比べて見ると何でも昔風に

男子の後にばかりついてゐるから自分が生きてゐるうちには到底あちらの様には行かない。夢だらうと思つてゐた所が現在かやうに進歩し覺醒してゐるに驚き又愉快を感じたと語られました。

最初の女教員大會が開かれてから各地方に女教員會が又開かれました。毎年／＼その面目を異にして参ります。本年四月九州聯合の大會がありまして第一日は男子、第二日は女子ばかり、第三日に男女合併といふやうに開かれました。男女對等の地位を以て會は開かれたのであります。會合の節には女教師の經驗談、意見發表がありました。女子と雖も少しも男子と變る所はありませんでした。少しこれから要點をあげて見たいと思ひます。

第一に女教師は如何なることを本領とするのか。諸君も御存じの通り各國男子の學校が早く女子の學校は遅くそして男子の事を女子の方は模したのであります。そして女子の男子と異なる點を考へて色々改良して今日の女子の學校となつて來たのであります。女子中學校といふのが栃木縣に出來ました。明治二十五六年頃、女權、男女同權の説が地方に盛んに唱へられました。又女教員と男教員とごんなに違ふか、それは極めて興味なのであります。女教員の方が貧弱で女教員は男教員の眞似をします、それが一番いゝ教師だとされました。そして男子に負けない様にする事位でその外更に進んで考へなかつたのであります。將來を考へて見ますと眞似のみでは足りない所があります。

一 体教育は親がすべきであります。學校は後から出來たのであつて學校のみでは教育は出來ません。段々と子供に教へることが多くなると同時に親の仕事も多くなつた爲にすることが困難となり出來なくなつて來ました。そこで別に人をおいて教へるのであります。學校がなければ當然親が教へるべきであります。ベスタロツチの言つた言葉に「父母は自然の教育者なり」と、それは父の感化、母の感化を必要とするのであります。父の感化、母の感化のどちらかを缺いたとしますと、例へば母が早く亡くなつて父のみにて育てれば男子らしい男子が出來るだらうと考へるかも知れませんが、それは然うではありません、母が居な

ければ女性の感化の缺乏は甚だしいのであります。又父が亡くなつて母の手のみにて育てられれば男性の感化は減じまして駄目なのであります。女が女に育てられたなら理想の女となると考へるかも知れないけれど女でも男性の感化が必要なのであります。女は柔かいのがよいと云ふのがあまり過ぎるのはいけないのであります。一方に偏してしまつてはいけないので緩和する必要があります。天の配劑として男子は母親に女子は父親によりて緩和され始めて女子は女子とし男子は男子として立派になるのであります。人間が出來て行くには兩方が必要なのであります。學校教育も家庭教育と同様であります。學校にても一方にかたよればやはり教育が一方に偏することになる米國のやうに女教員ばかりとなるとやはりかたよつてしまふのである。米國の教育の弱點は女教員が多いといふ事でありました。日本の帝國教育會でも男教員と女教員との數をいくらにしたら問題として居ります。大正三、四年頃の會は色々の意見があつたが私は半數説を唱へました。多數の人にも後にこの意見でありました。もつとも女教員が1/3でよいと云ふ人もありましたが私は半分づつでよいと思ひます。一軒の家にも父と母と二人居るのでありますからであります。女性の感化只今長官の御話中にも男子は剛健女子は優美と御座いましたけれどもよいと思ひます。これが各々の特色なのであります。女性の最も大切なのは母としての特性即ち母性について母性は何を中心としてゐるかど申しますと私は慈愛或は愛し導くと云へばよいと思ひます。子供を育てます親は慈愛を以て對して居ります。右左のわからない子を育てるには愛より外にありません、十露盤の考へ等で育て、行かれるものではありません。愛、無限の愛、絶對の愛であります、親が子を愛せる一例をあげて見ませう。鳩翁道話に或所に財産家がありました。その息子が道樂息子でお金を非常に使つて居りました。そして財産家も遂に勘當してしまひました。勘當されれば親類の顔にかゝるやうな事をしても親類は關係はないのであります。義絶するのであります。愈々義絶すると云ふので親類が集つて居りました。ところへ息子は

又金を貰はうと歸つて來て、此の様子を戸の隙から窺つて居ました。愈々印を押す段になつて母親が簞笥の中から印を出さうとしながらも息子をかばひかばひして居ます、その母親の恩愛に感動されて流石の息子もそこへ泣き伏してしまひました。その後息子はすつかり改心してよい息子となつたといふ話が御座います。こんな點に於て女性性は男性の及ばざるどころがあります。男親は理窟の方からどうかう言ひますが母親は愛の方からおしてゆきます。これは極端な例でありますがそれが女の長所として男の學び得ないところであります。子供を持つといかなる無情の者でもわかります。教師學者は學問に於ては父母に劣りません、そういう事には親に負けず眞實の愛は眞實の親が持つてゐます。女子の母性この天賦の性能これを發揮して行きますと男子になし得ないころをなし得ます、そして其の最も根本的で缺くべからざるものは慈愛といふ事であります。これがまた教育の上にもかくべからざるものであります。男子は剛健といふ意志で特色を示すならば女子は愛情を特色とします。教育上ことに訓練の上に女子の愛即やさしいといふ事は重要であります。

次に能率の事に就いて申し上げます。男子は男子らしい事を女子は女子らしい事をするといふ事を只良妻賢母の仕事としては家事裁縫のみにありとしますると女は智慧の點から男に劣ります。かく考へられたのは長い間の偏見であつて、女子は智に於て男子に劣るとは申されません。これについて根本的に研究が進んでゐます。最初に解剖學の上から女子の腦髓は男子より小さい。低脳兒に於てもよくわかりますが下等なものは、腦髓が小さいから女子の方が劣つてゐると。この事を根據にして英國の生物學者のローズイが説をたてました。その學説が最近破れました、のは体の大きさと腦髓の關係を知らなかつたからであります。全体の目方のみをはかつて体との比較をしないのであります。即ち今日女子の腦髓が軽いから智能がないと云ふのは舊説であります。其の他心理學上からも種々言はれて居りますが繁雜になりますからやめておきます。

男性である女性であることが智能の差で男子なら誰でも、智力があるかと云へば幾年たつても中學に入れない低能兒は女子より男子の方が多くあります。女子の方を見ますと随分専門家や立派な人がゐます。智能があるなしは男女の別でなくつて個性の違ひによるのであります。どういふわけで男の方が高くならなければならぬかは學術上證明が出來ます。即ち女の教育が進歩してゐないからであります。嘗て私は山梨縣へ出張しました。或る處をこは人家は二十四軒ほどで修學が免除されてゐましたが、明治三十一年講師を雇つたさうです。さういふところの人は智能の方から能率が極めて低くあります。その違ひは如何なることか原因でありませうか。それは教育の低度の違ひであります。文明人と野蠻人の違ひもそこにあります。昔は何人種に生れたから野蠻人といひましたこれを人種的偏見といひます。徳川時代に日本人は劣等人種に見られてゐました。デフテリア療法が極めて不完全でありましたが今日は血清注射がありますから必ずなほります。今の注射に對して人類一般が感謝して居ります、それは誰が發明したかといふと、それは御存知の北里博士とペーリング氏の二人であります。これによつてどの位人命が救はれてゐるか知れません、顔が黒いとか丈が低いとかは少しも關係はありません。その外日本人の發明は澤山あります。尙は廣い處で申しますと、米國の黒坊は慶應の頃奴隸は家畜と同じで少しも自由でなく殆ど自身の考へでやる事が出來なかつたのであります。今まで六十年も正義の道を稱へつゝある米國がこんな事をやつた事は不思議であります。リンカーンは田舎の人で作法も何にも知らなかつた、併し心はまつすぐで亞米利加廣しと雖もこの位まつすな人はないであらうといはれてゐました。この人が大統領になつてこの奴隸制を解放すべくはかつたのであります。問題が重大な問題でこの間に南北戦争が起り終に正義が勝利になつて奴隸は解放されました黒坊故に學術がないかといへばそうでもないのであります。併し米國の從來の偏見から大統領は出さないものであります。この様に劣等なものでも教育すれば出來ない事はありません故に、ゆくべき道を行かないで結果が劣るといふのは見る方が間違つてゐます。

以上は例が少し適切でないのですが、とにかく男子と女子について今日までは女子が十分に教育されなかつたのであります。従つて劣つて居ました、然し男子でも教育しなければ出来ないのであります。學術上から生れつき女子であるから低能兒であるといへません。歴史的に見ますと男子の學校が先づ先に出来てゐます。教育をうけたる分量であらばすら女の分量はすつと低く、あります、併し天然の差でなく教育をうけた分量が少いのであります、大學者大發明者は生れつきで男故みんな望めばなれるといふのでもない教育を同じにすれば男性女性が違ふものではありません、かりに女に良い教師をつけ男に劣れる教師をつけておくと女の方がすべてに於いてよいのであります、これは生れつき女の方がよいのでなく教育の方法がよいのであります、女故に成績が悪いのでなくて他に理由があります、従つて男教師と女教師とは同程度でなければなりません。智能の差は生れつきで女子故に低いといふ事は絶体にありません。一般にいふと現在に於ては劣つた點が多くありませう、それは今までの間違つた考へや教育の方法が間違つてゐたからであります。

何處の國でも能率に於て男女は異ならないのですが本領が異つてゐる故に男教員も女教員も共に必要なのであります、もし本領が異ならなかつたら女教員のみでもよいのであります。能率といふ立場からは變らないのであります、そこを男女でなければならぬといふのは女は母としてのやさしい心から、男は利智の富んだ頭で兒童を教育したいが爲めであります。(終) (第三回埼玉縣女教師會に於ける講演)

櫻咲く御園しらす百敷の千代田の宮に神ながらいま
久堅の天さしへにあらがれの土うるほひて菊開く國
大君のおほ御拜、今ならしひかりこなる北斗七星
國を思ふ心しなくば百千の書を讀むともかひなかるまし

正岡子規
同、尾上八郎
佐々木信綱

内 外

東京女子高等師範學校教授 下田次郎先生講演

三十年昔の本月本日、明治天皇教育に關する勅語を御下賜あそばされました。本日はこの學校でもその記念式を行ふのであります、私も許を得まして本校に参り、お話を致す事となりました。

申すも畏い事でありましたが、明治天皇は、英邁な君であらせられた。世界を通じてあのやうに、英邁な君は古今君主中さう澤山はないのであります。明治維新は非常な出来事で封建政治を昔の政治に歸した事は、並の君主の出来ない事でありまして。明治元年三月十四日、五箇條の御誓文をお下しになつた事は、勅語と共に皆さんもよく知る所でありまして、そしてその意を日頃奉體して居る事と思ひます。尙、陛下には朕身を以て衆に先んじ、萬民保全の道を定めんとす。と仰せられてあります。即ち常に衆に先んじ御實行なされた事は誠に恐れ多い事で御座います。明治の五十年に日本が進歩したのも、第一にさういふ偉い君をいたゞいて、人民が感激の下に働いたからであります。

扱て日本婦人は從來教育らしき教育を受けた事がなく、今日でもイロハより外にまるで知らない人があります、明治五年學制の發布より、苟くも婦人は學問をしなければならぬ事となつたのは、明治時代であればこそかうなつたのである。西洋では當時ナポレオン三世がナポレオン一世の夢を見て世界の覇たらんとし遂にドイツと衝突し大戦争となりまして、その結果は日本にも來ました。

明治初年はフランスの思想が入り、又亞米利加のベルリが來た關係によつて、米國思想も入つて來ました、私共小學の時の繪は西洋服を着てゐた。然し眞似にだけで其目標となる學科にも修身といふ科目がない。學制はかういふ風であるから、従つて修身齋家など思ひもよらず貧乏破産などが生じて來ました、これではいけないといふので何か腕に働を持つて、安全な生活をしなければならぬ。身を修めなければならぬ。

らぬ。貧乏のないやうに教育するのが必要となりました。

明治十二年頃はフランスの教育が入る。十三年頃は自由民権論が盛になる。明治天皇は元田永孚に教學の要は、本末を明にするにある、本末明になれば民の心定り、民心定まれば國家は安らくなる、それは幼學を先にするのが好い、汝よろしく一書を定めよと仰せられた。即ち幼學綱要が出来和本で七冊明治十五年に版になった、二十ヶ條の細目よりなり國家を本としてそれに儒教を加へた、仁義忠孝を主眼とした。孝行第一、忠節第二、和忠第三、友愛第四等となり、幼い者もわかる様になつてゐる。これが明治二十三年勅語を御出しになつた前提とも見られる。明治二十三年頃には生分りの自由を稱へる頃であつた。歐化主義が入り、舞踏などをし、學校では婦人も洋服を着老人もABCを習ふ様になり、盛に西洋風を眞似ました。生活を改良するのみならず離婚の事さへ云ひ出した、ところが一方ではそれではいけない、日本には日本の國定がある、國粹を保存せねばならないといふ、反動も起つた、英國の實利主義、佛國の功利主義等も入り、思想が動搖して來ました。さういふ事ではいけない。教育もちやんとし、日本には日本としての國体もある。その統一を計らねばならずとて下賜せられたのが三十年前の勅語であります、これによつて教育を忽にすべからざる事が定まつた。教育の主意によつてかういふ事に決定しそれより今日まで三十年、思ひ様によつては短いかも知れぬが長いものであります。修身とても勅語を本としてゐる。明治十五年軍人に賜ひし勅語がある、それは軍人についてのお諭しであつて五つの箇條より成る。一つ軍人は忠節を盡すを本とすべし。一つ軍人は禮儀を守るべし。一つ軍人は武勇を尊ぶべし。一つ軍人は信義を重んずべし。一つ軍人は質素を旨とすべし。その終に一つの眞心は五箇條の精神である。眞心ならざれば如何なる事をいふも皆うはへの飾で何の用にもならない。忠孝は親に對し君に對しての眞心である。それが友に對しては信、兄弟にては友となるのである。人間の生活は家庭にはじまり、父子はその本となる。孝をせいか、すなごかいはれるものではない。せざるべからざるものである。忠孝は頼まれてするものではない。發動的にやらなければいけないのであります。

大正の御即位の節東京に公民に濱離宮の拜觀を許されました。大勢立派な婦人等が見えましたが、中に若者が老婆を負つて拜觀して居つた。その老婆は母とも見えた。美しく飾りました中に、當日のみものは唯此の母を負へる若者であつたのである。頼まれて出來るものではない。精神がなくては、さういふ中に老人を負うて出られるものではない。眞心の發動である。日本は忠孝で立つてゐる一大家族であつて皇室は大本家、吾史は分家とも見られる親しさを持つてゐるのである。

西洋史を見るに一体に王家と人民との關係が後から出來たものが多く、古いものは、オーストリーのハプスブルグ家だけである。それも八百年餘りで歐には由緒正しい王家はない。萬世一系の皇位を戴くのはむしろ世界の奇蹟とも見られるのである。御勅語に億兆心を一にしとあるが、實際日本にだけあつてアメリカ等にはこれがない。或は國旗によつて民心を統一しようとした事もある。ドイツは聯邦で南獨逸と北獨逸とは人種もちがつて統一が出来ない、英國はアイルランド問題で統一がないアイルランドは獅子身中の虫で戦時中もドイツに通じ殺されたものもある。オーストリーも争ふ理である人種が異ふからであつて、國があれば億兆心を一にする事が出來ると思ふはまちがひである。日本は一つの投網のやうなものであつて皇室は其の中心である。網の元であつて人民はそれからすつと廣がつてゐる網である。

君と人民との感情の融け合つてゐるものは日本だけである。日本が戦争に勝てるのも偶然ではない。かういふ立派な理由があつたからである。其の時將校の命令を見ても何れも陛下の稜威で感激の外はないといふ感激の氣に出で居るのである。アメリカの兵は工場の人足に金をやつて兵士とするので傭兵であります、故に割が悪いと逃げ出すものが多い。日本が五十年間にかくまで進歩したのを西洋人は不思議に思つてゐるが五十年は日本の一小部分で、既に歴史は西洋より長いその二千有餘年の精神の發露である。即ち表面に現れたのは五十年であるが其の本は長く養はれて居たのである。又日本人は自尊心が強い、自分の

國はよいものは無いと思つて居る。これはよい事で自分が自分を捨てた時に國はすたるのである。自分で自分を見とめるのはよいことであるが實際の力を見とめないこと云ふ事もある、勝つて兜の緒を締めよである。其れが戦後に戊申詔書を御下賜になつた所以である、まあ考へて見ると古人も言へる如く五十年の過去を顧ればさても危く渡りつる哉といふ感がある。

大正になり今日の新聞と十年前の新聞を見ると昔は平和なものであつた。今日は英、佛、伊到る所に種々な騒動があり、それがすぐ日本に来るのである。實に難局にある、米國では排日をし今は支那シベリヤ到る所に其の問題が起つて居る。今までの日本は可愛い女の背中に角な物を負ひつゝお伽噺を見、可愛いものだ人形の様だとしたのが日本人はそうではない、針は小さくても飲めない。世界は白人の世界であると思つた所に日本が出たのであるから、それが又一因となつて日本を警戒するやうにならしめたのである。工場を開放せしも日本人には餘り見せない様になつた。日本は發明せねばならない。外のものはかりはとれない。日本は日本の文明がある。

米國大統領の候補者は何れも排日を口にして居る。そう云ふ難問題を一方にひかへて居る、一方には年々七十萬も人口がふえて行く。今までの日本はあまり順調であつて、つまり都合がよすぎたのである。之れからはそうはいかない逆境に處するもいゝだらう。歐洲は勝つた方も負けた方も死にもの狂ひだ。歐洲戦争の始つた時も日本はあまり氣にかけなかつた。けれど歐洲は本一ツない程戦争の巷となつたのである。戦争の話聞くに悲惨な話が澤山ある、大きな大砲を打つて突喚して見ると三四百人程輪になつて唄つてゐるものがある。これは皆敵兵で大砲の彈丸で、氣が狂つてしまつたのである。又獨逸の兵士が捕虜となつて逃げようと思ひ運動を許される時に牢からボツケツトに少しづつ砂を持ち出し段々穴を掘つてはゆき氣長に破牢を企てたが愈々といふ時に場所をかへられたといふ話もある。西洋の女の力は大きい飛行機を造り彈丸を造る。高等教育のおかげである。日本の婦人は日露戦争の時お湯を吞ましたりタオルをしは

つた位のものだ。其れだけの技術で今度の戦争に参加したならどうであらう、手も足も出まい。英國では女がごし／＼馬に乗る。上手な物もある、婦人が馬の調練をやるやうになつた實物競争だ。今度の戦争に婦人がなかつたら駄目だウイルソンは婦人にも選舉權を與へた、英國では婦人だけで六百萬人日本では全部でも其の半數に充たぬ。日本でも婦人參政權を唱へる、然しまづ頭をこしらへてからでなければならぬ。頭がなくして劍のみを與へる事は出来ぬ。従つて今後の問題は労働問題と婦人問題である家で妻となり母となる事は變らないけれど其の他の仕事が出来ぬ。昔のまゝにて夢見て居る様な婦人ではならぬ。扱て婦人の業として何がよいかといへば教職である。女には母性といふ美しい物が自然にある。本能である。暖かい情で教育することは極めてよい。人間が我を忘れた献身的の母の厚い情を受けて生育する其のひきつぎを學校にて受けるは極めてよい事である。一般の女は能力も男より低い、家庭の事の爲に忙がしいのは同情すべきである。今女教師は約五萬全体の三分の一弱である、アメリカは殆ど女である。女學校の校長も大抵女である。國民教育に従事なさる皆さんは十分な覺悟が必要である。今日の三十年の記念式に際して教育勅語の精神をよく奉體すればよい。日本人は責任感がない、やりつばなしだ、一例をあげると、女中等の責任感の薄いのが家庭の經濟に大なる影響を起すのである。之れまでの教育は遺憾ながらあまり徹底して居らぬ。英國の世界中に發展して居るのもロッキンの短いのを捨てないからだ。電氣がメートルでないからとてスイッチをひねらないなどといふ精神は亡國の精神である。日本人にはさういふ精神はどうか。女中も主家の利害になると言ふ事と給金の交換とで働くのは大なる異がある。三菱が現に建築するにアメリカより人足を連れて來たのに、八時間仕事をやらせるのと日本人足に十二時やらせるのではアメリカの人足のした仕事の方が多い。日本は負になる。忠實業に服するのではない。サボタージュは此の類はやる言葉であるが日本には古よりあるのだ。大事は小事より起る、國技館の大なる建物が一入の不注意の爲に焼けてしまつた。交換的にしてはならぬ。それは不親切だ、自分の物で愛する氣があるなら公の物

も愛さねばならぬ。東京の大實業家で辨當の飯粒一ツも残さぬといふ人がある。習慣である。英國の學生は辨當を食へ歸へる時に辨當のからは穴を堀つて埋めて行く。日本は景色のよい所に限り紙屑等がある。

皇太后のお葬儀の時私は一番後に歸つた女學校の後は流石にきれいであるが、學校に依つては葬場殿の青竹の中がちらかつて居るのがある。それでわかる、驚いたのは小學教師代表者の所である。一ツも屑がないと思ひの外一つばいだ。教へる人がさうでは困る。これも國民教育の不徹底である。これからの生活は内から外へが大事である。之れまでは外から課せられた、これは自分のだと思ふと愛する氣になる。仕事をするには自覺のある仕事をせねばならぬ。アメリカの職工がストライキを起し工場を退く時機械を磨く者は磨き後から来る者が困らない様にする。日本はさうであらう。ストライキはストライキ職業は職業である。退く時は後を濁さず、さうなければならぬ。

獨逸の捕虜がパンを貰ふに一々小さいのを切つて貰ふのより大きいのを一つ貰つて皆でいるだけ端から切ればすたらないから、さうして下さいと將校に願つたと云ふ事である、之は小さい時よりの習慣である。さうでなければならぬ。これからの教育は此の點に注意せねばならぬ親切を以てものにあらねばならぬ。國民全体が不親切で口で社會奉仕を唱へても何にもならぬ。人の物、公共物だからと浪費するやうな精神では國家を保つ事は出来ない。自分でやつた事は自分で始末をつける將來皆さんが教職につかれた時兒童に此の良習慣を養ふやうにつとめられたい。内から外に自覺生ぜざれば自治は行はれない。課せられた忠孝はいけない、内部より發生したものでなければならぬ、國民教育はこれを徹底的に教へなくてはならぬ。要するにこれは皆至誠である。誠を以て國家社會につくさねばならぬ。本日は勅語發布三十年記念の日である殊に師範學校は國民教育といふ重大な關係がある。私は外から内へ、内から外へといふこれが今日の御話の眼目である。どうぞ皆さんも内部より發動するといふ此の精神で、教育勅語を奉體して頂きたい。(終) (教育勅語頒發三十年記念式當日の講演)

教育者としての菅公

小島校長生先講演

段々お話しがありまして、私は教育といふ方の立場から菅公を見ることに致します。政治上の菅公は川口先生、文學上の菅公は大藪先生が話され、私は教育者としての側から極く重なることだけ述べます。

(一) 菅公は教育者の傳統

菅公は學者の家、教育者の家に生れ落ち、生ひ育つたのであります。祖父の清公といふ方が文章院を立てられました、これが菅家文章院であります。勿論大學は別にありましたが、それは官立で、文章院は私立の學校であります。大江家と相並んで學生を教育して居りましたが、兩家は學者の淵藪となり、人材は鬱然として多く其の門に出ました。

清公の子是善が箕裘を繼ぎまして、文章博士大學頭等に任せられ、參議に進みました。大學頭は今日の文部大臣の様な役であります。經學も文章も共に一世の宗師であり、貴紳學士の其門から出るものが多くありました。是善は即ち道真公の父であります。夫人大伴氏といふは史に傳はる所の事實が少いけれども、思ふに賢婦人であられたらしい。道真十五にして元服の時、母歌あり。

久方の月の桂も折るばかり

家の風をも吹かせてしかな

母君が其子の身を立て家學を繼ぐを祝したのでありませう。

菅公は實にかやうな家に生れました。菅公の教育家たる資格は既に先天的に獲得して居らるゝものといふて良い。

(二) 菅家書齋の有様

かくて菅公は十八才にして文章生となり、二十三才にして文章得業生となり、二十六才にして對策に及第して官途につきました。即さういふ父祖傳來の家に生れて、出で、は大學に教授し、入つては私塾に教育をしました。四十二歳にして讃岐守となつて任に就ても京都に於ける文章院においては依然として咄嗟の聲を絶ちません。四年にして讃岐から還て來られて、公職はちがつても私に育英に従事することは舊に異ならず。公四十九歳の時書齋記を作りました。書齋は公の住邸の一室で、山陰亭といひました。其文に云はく。

「左京の五條に一軒の家がある。家の西南に一つの廊があつて、廊の南づめに一つの離れがある。歩いて行くには身をそばめ、坐つて居るには膝を縮める。だが、此室からは、これ迄秀才進士の出たものが殆ど百人に近い。故に學者があだなして龍門と稱する。軒に一もどの梅があり、梅から數歩東に數本の竹があつて、花の時には情性を優暢し、風の便りには精神を長養する。余が秀才となつた時、父が教へて曰はるゝには此の室は名高いところである。これは汝の研鑽の本城とせよと。余は直に簾やしとねを移し書籍を運んだ。處が場所は狭いし、人情は輕薄である。この書齋に來る人には親しいものもあり、疎いものもある。心が合ふ程のよしみの無いものも来る。或はわからん所をしらべるというて妄に秘藏の書を開き、或は御目にかゝりたいというて急に休息の座へつき込んで來る。筆は字を寫す道具であり小刀は誤字を削る道具である。彼のものゝも此の小刀で机を削つたり、其筆を弄んで書物を汚したりする。又學問の道は書を讀んで抜き書きをするのが第一だが、余がぬき書をして置くと、闌入のものゝもが目に見えるものは巻いて懷に入れて持つて行つてしまふし、わけの分らぬものは破つて棄てゝしまふ。又友だちの中にも大事の人がある。適用のある人が訪ねて來て書齋に居ると、闌入のものが來て邪魔をする。凡そこれらは誠にうるさい。」

とあります。書齋の構造、庭砌梅竹の布置、宛然見るが如く、公が溫容玉の如く談笑款語、諸生朋友親疎

の人に接せられる様が、躍如として眼前に現はれるではありませんか。群山は泰山に朝し、衆星は北斗に向ふ。如何に公が世人の欽仰する所となつて居たかを見る事ができます。或は秘藏の書を開き或は抄出の稿本を損す。先づいへば菅公の己の書齋は一箇の圖書館である。今の學者教育者たる人自己の書齋を解放して圖書館として人々の自由出入に任す人があるでせうか？凡そ教育者に要するところは好んで人に接するところにあらうと思ひます。彼のソクラテスは道路に於て人に接し、我が菅公は己が書齋を圖書館として人に接しました。

ところがこゝにかういふ事があります。我が菅公の書齋の状態を見てかういふ人があります。菅公は器局偏小、苟も意に稱はざれば一々打撃を加へて假借する所なしと、かういつたのは樗牛であります。物は見方で果して菅公が狭量の人であるなら、書齋を閉ぢればよい。多くの人の出入を許すのが菅公の教育者たるところである。私の説に賛成ですか、樗牛の説に賛成ですか。自分の書齋をあげたなら勿論五月蠅いでせう。持つて行かれるものもあつて困るでせう。然し菅公はそれをありのまゝに打まけてあります。教育者として價值あるところではありませんか。況や此記の末文には

殊に恥かしい事には、家の外へ大きく集賢の堂を設けることが出來ないで、家の内の狭い處へ人の來るやうにしてある。恐れる事には燕雀のかゝる小さな網は張つておくけれども、鳳凰の様な大きな獲物は逃げて行つてしまふのでは無いか。慚愧慚愧

どうか書いてある。集賢の堂を大きく設けて、愈盛に育英の事に従はんと欲する、これが菅公の向上的理想であります。要するにこの記の文は公の徳を傷くるものにあらすして、却て公の教育家たる實況と抱負とを吾人に告ぐるものと信するのであります諸子は以て如何と爲す？

(三) 菅公教育の實績

菅公はかゝる生活で居られた。門人を教へたり、門人の對策及弟を賀したり、會飲したりした詩が澤山

見ゆる。實に和氣掬すべきものがある。

嘗て文室時實といふものがあつた。公の弟子である。公が讃岐に赴任の途中、時實が進士に及第した事を聞いて喜んで宿屋の壁に喜びの詩を書いた。後此の人が老母に拜辭して、わざわざ遠く讃岐まで菅公に御禮に來た。菅公は非常に喜ばれた。其詩に

西京老母知^レ猜^レ我^ヲ。南海閑人喜^ブ遇^フ君^ヲ。

この時一ヶ月程滞留して歸つた。菅公も名残を惜んで別れた。

藤原佐世は菅公が讃岐に行く時餞別をした。其時菅公の詩に

讃岐守となつて行くのは悲しい。悲みは貴方から詩や消息を私にくれるとなほ悲しい。さて私に贈つてくれるに何といつてくれれば一番良いかといふと、かういつて貰ひたい。『汝の父は嘗て我師であつた』とそれが一番嬉しい。

孤身筆々として天外に在る時、故郷の門人からの消息に私は貴方の家の出身でありますと云はれるのは最も嬉しい事でありませう。私は此の言葉は教育者たる味のある人でなければわからないと思ひます。教育者の眞の樂しみは俸給の高いでも、教子の數の多いでもそんな事ではない。出生した人が私はあなたの門人ですといふ。この樂しみは眞の教育者でなければ味へない。又三好清行が時平を諫めた言葉がありました。それは菅公貶謫の後で菅公の門人をみんな追ひちらさうとしました時、それはいけませんまいと諫めました。『外師は累代の儒家、其門人弟子は諸司に半す。若し皆遷謫せば恐くは善人を失はん』といった。是れが即ち菅公の教育の實績を見るに足るものであります。平安朝文學の盛なる世に天下の英才を過半其門より出して居るを見よ。菅公の大教育家であつたことが知れる。

(四) 公の性格

大藪先生も仰しやいました様に斷じて君を怨む様な事はありませんでした。又政治上學問上の敵に對し

て打撃を加へて許さなかつた彼の樗牛いはれましたが、さうならば左遷せられてから詩にでも人を恨みさうであるが、そんな事は少しもない。樗牛の菅公傳は矛盾の多い説があります。獨斷的の結論が多くあります。なほ樗牛は菅公はさう云ふ人でありませうから、友かないといつてゐます。然し私はそう思はない。一生涯三四人の友があつたなら十分である。人は死生を共にする友達がある事が非常に必要であります。皆さんは死友がありますか。なかつたら自分がわるいのであります。此の事は修養上心掛くべき點であります。樗牛は菅公に友のない事を非難しますが、文室某があります。公晩冬之を訪ひて遊んだ時の文に「夫れ故人未だ必しも親友ならず。親友未だ必しも故人ならず、之を兼ねるものは文郎中なり。詩家未だ必しも酒敵ならず、酒敵まだ必しも詩家ならず、之を兼ねるものは文郎中なり」とあります。

藤原滋實といふ人があります。公が讃岐より歸りたる年九月天子の御前に詩を作つた同僚でありました。其の人が陸奥守となつて陸奥へ行つて居るうち菅公が大宰府へ遷された時死にました。その時公がこの友を哭した詩がある。

君は僕の知己である。心の表裏共に知り合つて居る。君は直に過ぐるといふ失はあるが、曲を矯むる其の廉直には誰も君に比すべきものは無い。(中略)君の死は通常の死で無いと見える。あゝ君の靈は彼土に赴かれて復君を見ることは出來ぬ、君の骸骨は灰塵と成つて言葉を変ふる由も無い。あゝ悲しいかな。哭し罷んで又平生を想ふと、君の一言猶耳に在る、曰く「吾は君に陰德を受けた。死生汝に報いんとす」と君は常にいうた。其は兎に角、君の魂にして靈あらば舊知己を忘れ給ふな。僕は君に望む、君の本性を持して決して傾倚し給ふな。君は我が凶しき事を見たら我を撃つこと鬼神の如くし給へ。我が罪なきことを思ひ給はば我が爲に閻魔の廳に訴へ給へ。こんな事を言うて涙千行。余は今此の如き有様でこの世に在り、君の死を聞いて腸は九轉する云々

公は感情深い、涙脆い、人情に厚い人である。これが君にも忠、親に孝、子を慈しみ、弟子を愛し、朋友

に親みたる人である。

修飾せず、隠蔽せず、自ら欺かす人を欺かず、真情を流露して、直ちに人の肺肝に訴へる。廉直にして阿諛せず。權勢を貪る人にあらず、私意を挟みて威福を張るなどいふことは無い。只文學教育を以て終始せんとする人である。

事を執るには何事にも忠實で、突飛な改革をせず、寧ろ保守的であつたらしい。

見識が高い、検税使遣唐使の事は之を證する。

趣味に富んで居られた。梅、月、菊、花、柳、鶯などを愛したことが處々に見える。而して風雨霜露天地萬象悉く公の詩興の題となる、琴や酒を嗜まれたことも見ゆる。

(五) 公の徳望

さて公は貶謫され悲哀の裏に薨じた。(併しながら怨言を含まずに)そこで怨靈が現はれた。一度ならず清涼殿へ落雷が有つた。或時には公卿が震死した。宮殿に炎上があつた。時平黨の領袖は不思議に皆死んだ。そして神の託宣があつた。

さて、この事は妄誕無稽取るに足らぬことか。よくよく考へて見ると、これは公の盛徳の反映と見える。其の譯は、當時は迷信の深かつた時代である。生靈死靈が人にたゝるといふは一般に信ぜられてゐた。國家昇平年久しく、人心柔弱になり、因果應報の佛説の恐怖心を起さしめた。其れ故菅公は偉い人だ、善い人だ、菅公に氣毒な事をしたと一般が思ふと共に菅公反對黨には神經病を起さしめた。怨靈崇を爲す、反對者天死す、神の告ありといふは皆當時の人心が之を構成したものである。菅靈の所爲にあらずして當時の人心の反映である。この反映は即ち公の徳を傷くるに足らずして。適々以て其の徳望の盛なりしことを證するに足るものである。

(六) 後世の影響

さて天下の人心は貶謫及び薨去の當時は公を氣毒とおもふ同情になり、同情は時を経るに従つて崇敬心となつた。神として祀るに至つた。朝廷は左大臣にする、大政大臣正一位にする、勅ありて神殿を改造する、社へ行幸はある、二十二社に列する。人民は益々神として仰ぎ奉ること成る。

薨後凡そ百年大江匡衡の文に「天満自在天神は或は天下に鹽梅として一人を輔導し、或は天上に日月として萬民に照臨し給ふ。就中文道の大祖風月の本主なり。翰林の人尤も夙に勤勞すべし」とある。是れ即ち公が文學の神教育の神となつたのである。菅廟は全國に立てられ、凡そ學問の神として祀らぬ所は無い。維新前など皆天神様を祀つたものである。我縣出身の塙檢校の如き尤敬虔な菅公尊信者である。

凡そ人の仕事で最も大なるものは天下の人心に影響することである。永久後世に残る事である。菅公は當時の子弟を此の如く教育し、當時の人心に此の如く徳望あり、そして後世の人心に此の如く影響した。實に偉大なるものである。人は動もすれば軍人や政治家の仕事の人目赫々たるを見て、而も其れの一時に水の泡と消え去るを思はないものがある。文道の大祖風月の本主の其効の偉大にして永久なるを思はぬは愚の至である。

(七) 結 論

今日午後は大學から和田先生がいらして講演なさいます。私は盲目的に菅公をえらく思ふのではありません。教育者としての立場から信んずるのであります。教育者に要するところは情であります。人を愛する情、暖かみの情であります。この薄い厚いは人によつて異なりますが、それは修養して養はねばなりません。情に生きること又友達のある事が必要であります。これも修養すべき事柄であります。今日此の會は歴史上の教授時間ではありません、國漢の時間でもありません、何か修養上のものをつかまへねばなりません。ノートにいろいろの事を筆記して他日教授の參考の爲にしてもよいのであります。然し何らかの修養上に益したのであります。これが偉人講演會の中心の目的であります。(終) (菅公講演會)



第三回埼玉縣 女教師會概況

埼玉縣女子師範學校主催第三回埼玉縣女教師會は十月二日より四日迄三日間埼玉縣女子師範學校に於て開かる、出席せる女教員約四百、左記諸問題の討議及研究發表、講演等あり

○帝國教育會提出の四問題

第一問 全國女教員會を組織するの可否、可なり

とせば其組織及方法如何

第二問 女子を小學校長及府縣視學に任用すべき

例を開かれんことを其筋に建議しては如何

第三問 小學校女教員産前産後の休養は凡何週間

を適當とすべきか、且つ之が實行の方法如何

第四問 家事科教授を今一層有効ならしむる方法

如何

○縣下女教師提出の四問題

第一問 處女會の設置發展につき、女教師として

女教師相互が和衷親愛の實を擧げる

様各自の努力を望む、と述べる

二、帝國教育會提出問題の協議に入る、

イ、第一問 につき、岡、松岡、福田、田中四氏の

發表あり何れも、女子の自覺を促す爲め、社會上

の地位を高むる爲め又は男子の理會を得る爲めに

全國女教員一致の必要を説き、女教員會組織を急

務なりとし、これに對し宮原氏の組織に關する質

問あり、左記八名の委員に附託せらる、

岡 まさ氏 松岡よし氏 福田 ハナ氏

田中 たか氏 岸トナセ氏 關口 まち氏

宮原 しげ氏 竹内 不器氏

ロ、第二問 に就ては矢島、松岡、宮原、秋山、長

島氏等の意見發表あり、女子を知るものは女子な

り宜しく校長も視學にもなり得る様にしたしと希

望するあり、或は女子に同情するものなれば可なり、

女子として校長又は視學たらしむるに及ばず

と云ひ、又は時機尚早なり宜しく先づ女子自身の

向上を計るべしと説き意見區々なり、即左記六名

の委員に附託す、

第三回埼玉縣女教師會概況

の活動方法

第二問 女教師の服裝を如何にすべきか

第三問 女教師の待遇を高め、勤務上の不便を除

く方案

第四問 女教師に適切なる修養法

以下會議の概況を記さん

第一日 午後一時開會

一、小島校長 教育勸語を奉讀し、次いて開會の辭を述べらる、先づ本會の盛會を祝し、各講習部の援助に對する謝辭ありて後

本會は女教師自身自發的の會合である、御自分のものである、故に各自が十分に其の意見を吐露し利益ある會合たらしむる様努められたい。

現在世上に起つて居る女子の問題は種々あるが、何れも、女子自身が自覺して自ら改造すべきもので、女教師に對する問題も亦かくせねばならぬ、願はくば此會に於て女教員に關する各問題に對し十分なる研究を重ね

女子の叫聲を男子に聞かしめて理會を促し各自の自覺を促して、其生活の改善を計り

矢島 あい氏 福田 ハナ氏 秋山 むめ氏

増田 まつ氏 杉山 和香氏 長島 かれ氏

ハ、第三問 佐藤、馬場、宮原氏等の發表あり、其

期間につきて或は六週間を可とするといひ、或は八

週間は必要なりと叫び其の理由について詳細述ぶ

る處あり、其實行方法についても、女教員の數を

多くし、缺勤中は二部教授等を行ひて教授につい

て苦慮するの虞なからしめ、其の缺勤日數は賜暇

とすべし等具體的の意見あり、結局五名の委員に

附託せらる、委員氏名左の如し。

馬場 たか氏 黒澤 きち氏 白倉 はな氏

佐藤 なみ氏 稻垣 きく氏

ニ、第四問 中里、千葉、田村氏の發表の後委員附

託となる委員左の如し

中里 いち氏 米山 たみ氏 齋藤 八重氏

田町 糸氏 千葉 シゲ氏 織茂 ヤフ氏

第一日はこれにて閉會となり、委員は別室に會合し

て、數時に亘り研究協議をこらしたり、

第二日 午前八時開會

一、議長會議の續行を宣し縣下女教師提出問題の議に入る

イ、第一問 につき田中キン氏は現在實行せる事柄につきて其狀況を述べ、齋藤富美氏は先自己の修養の必要を説き、進んで處女會指導上の活動方面に及び、白石いく氏は指導者として女子の覺悟を述べ、處女と女教師との接觸役員選定、各種事業及其指導方法を説き、其他二三の發表ありたる後十一名の委員に附託せらる

齋藤 富美氏 白石 いく氏 久保田とし氏
坂本 郁子氏 町田 かく氏 松永 ひで氏
石川 シノブ氏 今井 てい氏 宮崎 あさ氏
針谷 茂野氏 粕谷 こよ氏

ロ、第三問 に入り、新藤なを氏は登壇しづかに女教師が男教師に劣れりとするは過去の偏見なり、宜しく指導を與へて活動を十分ならしめ、其眞價を發揮せしむべきなり、初任俸給の如きも男女同様となすべく、通勤の便を與へ、且住宅に苦しむの虞なからしむべしと述べ、金久保ツマ氏は待遇の向上を計らんと欲せば、先自進んで諸般の活動をなし且女教員の團結を固くし、力めて町村民と接觸して其力量を知らしむべし、之が爲めには師

範時代より十分の修養を要す、かくして卒業の曉は初任俸給を男女同様にするは勿論學校長も監督者も女子に對し十分なる理會を有すべしとし、勤務上について自宅より通學の便を與へ又は住宅を設置し且女教員の數を増して産前産後の休養に關係なからしむべし、これ一面勤務年限を長からしむるの法なりと述べ、久保田とし氏は女教師の修養と自覺の必要を説き、杉浦三江氏は精神的面及物質的方面より女教師を遇することの薄きを説き、諸般の希望あり、猶多數の意見あるが如くなりしも、一先發表を打切り、一層詳密なる調査をなささんが爲め左記九名の委員に附託す

新藤 なを氏 相良 きく氏 久保田とし氏
杉浦 繁氏 梅津 より氏 倉林 マサ氏
金久保ツマ氏 杉浦 三江氏 野口 すい氏

これにて一時協議を中止し
二、本校卒業生勤續者表彰式 を行ひ五年十年十五年の勤續者に對し同窓會より記念品を贈呈し
三、本縣知事告辭 あり
歐洲戰亂の結果五大強國の一に數へらるゝに至れ

る我國は學德共に具はれる國民を養成せざるべからず、而してこは一に教育者の活動に俟つべきなり、我縣は夙に縣民向學心の進歩と体力の増進とを必要と認め、常にこれに向つて努力しつゝあり、諸氏亦此意を体し、十分活動せらるべし。

現在に於ける女教員は數に於て男教員より少く、形に於ては萬事男教員によりて決せらるゝ有様なるも、諸氏は徒らに男教員に依頼すべからず、思ふに社會は男女の協力によりて成り立ち學校も亦然るを見る、各其長とする方面に十分の活動をなさるべからず。

家庭の主婦としては健全なる家庭を作り、範を社會に示すべく、處女會の設置及發達に關しても女教師として十分なる活動を希望す

と述べられ、次いて別項記載の如く

四、野田督學官の講演 ありて正午休憩す、

五、午後再開す前に引續きて協議に入る
イ、第四問 に於て筑井ひで氏は、個人としては讀書法瞑想法人格接觸等によりて其修養を圖り、團

體としては二三校又は郡内全部の女教師團結して、讀書談話會、實驗談話會、修養圖書購入、名士講演視察等をなすべしと説き、大越もん氏は朗讀的に女教師の學校及町村に於ける地位と待遇とを説き、進んで其修養の必要を述べ、讀書人格との接觸反省努力の四項を擧げられたる外尙二三の發表者ありて委員附託となる、委員左の如し、

長井 なか氏 大越もん氏 萩原 はな氏
田中 こう氏 川上 うめ氏 清水 ふさ氏
保泉 きく氏 村田 タマ氏 齋藤 八重氏
高野 さき氏

ロ、第二問 先づ町田つね氏自己の製作に係る改良服を着して登壇其改良服の長所を述べられ、志村せい氏は袂及身丈を短くし袖口を小さくし而も全体に美感を損せぬものを工夫したしと説き、小花鶴生氏も亦改良服を着用して登壇從來の服裝の欠點を擧げて自己製作の改良服につき其長短を述べられ左の委員に附託せらる

小花 鶴生氏 町田 つね氏 逸見よしな氏
橋本 きく氏 田島 なか氏 小野寺ひい氏

六、次いて帝國教育會提出問題につき、委員長の報

告及討議に入る、

イ、第一問 委員長岡まさ氏登壇調査意見を述べ、大体会女教員會の組織を可と認むるも、其組織方法に關して意見百出究まる所を知らず、更に熟慮の必要を認め、一時其決議を見合せ、

ロ、第二問 に入り委員長矢島あい氏調査の結果を報告す、

- 一、小學校長任用に就ては建議するの必要なしと認む理由 女子を小學校長に任用することを認めざるにあらず、且既に先例開かれてあればなり、
- 二、府縣視學に任用することについては速かに其例を開かんことを望む、

理由

1. 現時の如く女教員の數増加しつつある時に方つては女性の指導者を置くことを必要とす
 2. 勤務上の不便を救済する爲め
 3. 風紀の改善を計るため
 4. 女子の特性を向上せしむる爲め
 5. 女教員の教育力を發揮せしむる爲め
- 以上の理由により現状に満足する能はず、故に之を建議せんとす
- 希望 郡には適當の指導者を置かれんことを望む

日の調査案を修正して提出し、直ちに之を議に附し異議なく可決となる

第一問決議案

- 一、主張 組織するを可とす

二、理由 女教師の地位の向上を計る爲め共同團結の必要を認む

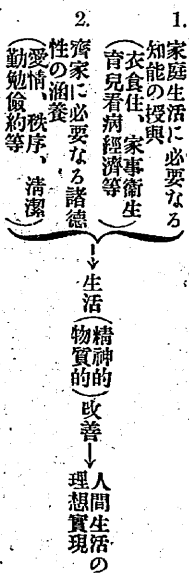
三、組織方法

1. 全國女教師會は各府縣女教師會を以て組織す
但朝鮮臺灣北海道等之に準ず
2. 全國女教師會組織の方法は帝國教育會主催の全國女教師會に於て協議すること

ロ、第四問 委員長中里いち氏調査の結果を報告し討議の結果異議なく左案の通り可決

第四問決議案

- 一、家事科の職能



- 二、現下の家事科教授上缺點と認むる諸方面
1. 教師の實力の不足

第三回埼玉縣女教師會概況

然るに之を建議するを尙早なりと論ずるものあり
採決の結果希望して述ぶることとし、建議せざる
こととなる

ハ、第三問 委員長馬場たか氏調査意見報告、討議の結果原案可決となる

第三問決議案

本問題は定産、早産、流産の場合に適用するものとす

- 一、期間 五十日

二、理由

1. 母体養護上
2. 生児保護上

三、實行方法

1. 法規改正

2. 職員配置(補充教員の配置)

四、希望

妊娠期間は勤務上多少の斟酌をなされたい事

此時學務課長より体力増進と妊娠出産時の注意につき希望あり午後四時閉會

第三日 午前八時開會

一、數名の自由研究發表ありたる後前日に引續き協議に入り、

イ、劈頭前日に於ける第一問委員長岡まさ氏より前

2. 教授に關する設備の不備

3. 教材の選擇排列上の不備

4. 教授方法研究不十分

5. 其他二三の方面

三、家事科の教授を今一層有効ならしむる方法

- (一) 缺點に鑑みての矯救方面

1. 教師の實力養成(人格修養)

イ、家事科教授に必要な知識技能徳性の鍊磨修養

ロ、家庭生活の意義理想を明確に自識すること

(附) 家事科教師の養成方法改善

2. 設備(附經濟)

イ、特別教室の設備

ロ、標本器具器械類の購入

ハ、實驗實習費の支辨

3. 教材の選擇

イ、基礎的代表的教材の精選

ロ、各地方實際生活に必須なる事項中兒童の現在及將來に於て遭遇するものを選択すること

教材の排列

イ、他の教科(特に理科)との連絡

ロ、季節との關係

4. 教授上

イ、成るべく多方向的取扱をする

他教科との交渉(殊に理科)

第三回埼玉縣女教師會概況

(三四)

ロ 順進的教材排列に對する注意
ハ 考察的創造的學習態度に導く

ニ 一層形式的陶冶の方面に力を注ぐ

5. 其の他、家庭との連絡、監督者及管理業者等の理解

(二) 新なる着眼點

1. 現行教科書の改正

イ、舊教材の整理

ロ、新教材の補充(性的教育、美的方面の材料等)

2. 家事科教授始期を早むること(尋四、五)一教材排列

3. 各科の教授を實際生活に應用し得る模範底を計ること(他教科教授の家事化)

二、女教師提出問題につき委員長の報告討議に入る

イ、第一問 委員長齋藤富美氏調査の結果を報告左記の通決議となる

第一問決議案

一、設置について

1. 農女會の趣旨を一般町村民に了解せしむる機努力すること

2. 特に會員の父兄には會の趣旨を十分徹底せしむること

3. 設置なき町村に於ては町村長、學校長等と協力して設置に盡力すること

二、發展について

1. 農女會をして樂しき會たらしむる機努力すること

2. 會合の期節時刻等は青年女子に適當なる場合を選ぶこと

止むること

二、俸給に就て

1. 理想として俸給の大部を國庫支辨にうつすこと

2. 男女の初任俸給に對し一級以上の差を設けざること(本科講習科共)

3. 俸給停年制を設け初任以後滿十ヶ年迄は滿二ヶ年毎に一級を増し滿十ヶ年以後は滿三ヶ年毎に同様(當分級はなるべくつけざること)

4. 退職の場合には勤続年限に應じて一級乃至三級を増俸するを例とする

三、諸給與に就て

1. 規定の旅費を給與せられたること

2. 毎週三十二時を超ゆるときは相當の手當を給すること

3. 平日以外(日曜、祝祭日、長期休暇等)の日直には日直料を給すること

乙、勤務上の不便を除く方案

1. 女教師の爲め住宅又は寄留する處の便利を與ふること

2. 女教師をして部落講演をなさしむるには夜間以外の時間を利用すべきこと

3. 公務上必要な場合には放課後二時間以上學校に止まらぬこと

4. 女教師に過多の時間を負擔せしめぬ様せられたること

5. 學校長は家事科裁縫科について一層の注意を拂はれたること

6. 女教員數の少き學校は男子にも適宜日直の任に當らしめられ

第三回埼玉縣女教師會概況

(三五)

3. 會合は質素簡易ならしむる様にすること

4. 會の事業として講習會講演會其の他の催ある場合には女教師自ら指導者となること、獨講師招聘の場合には盡力すること

5. 農女會の幹部として青年會と連絡を計ること

ハ、第二問 委員長小花鶴生氏より報告あり、委員

會はこゝに之が確定せる調査案を報告し得ざるを遺憾とす

と前提し現在の狀況は服裝の研究時代に於て十分の研究を

して、今直ちに之を一定するの困難なるものあれば、その決定を後日に保留し、小花町田雨氏等の

研究を基礎とし、更に各會員に於て十分の研究を重ね、後日再び之が調査を行はんことを申合すの

みに止めたしと希望を述べ、滿場異議なく

ハ、第三問 に入り委員長新藤なを氏より左記調査案につき詳細なる説明あり、滿場異議なく可決す

第三問決議案

一、精神的待遇に就て

1. 町村當局兒童の父兄一般社會は一層の敬意を拂ふこと

2. 壓迫を加ふるが如きことなかるべし

3. 女教師の意見を尊重せられたること

4. 酒を用ふる會合の準備をなし又は酒席に侍らしむることな

たこと

7. 身体の狀況により体操科時間の繰替をなす便宜を與ふこと

8. 産前産後に於て公務上必要な場合は隨時歸宅を許可すること

9. 男女教員數の權を失はざる範圍に於て女教員數を多くすること

10. 裁縫専科教員をして本科教員の代用をせしむるは不可なること

11. 夫の忌日を賜暇せられたること

12. 父母子女配偶者の重病の場合には看護の爲め缺勤を許可し其取扱は賜暇に準すべきこと

二、第四問 委員長井なか氏の報告ありて後討議に入り決案を可決す、決議案左の如し

第四問決議案

目的 女教師の品性を陶冶して徳性の涵養につとめ、學力並に体力の増進を計り圓滿なる人格を養成すること

方法(實行方法)

(一) 宏遠なる理想を懷き常に之に近づくこととして各自が高尙なる趣味と品性の向上を自己の肉的生活に求むること

1. 讀書趣味と習慣を養ふ

イ、各自が根據ある善良なる書物を期間を豫定して毎日必ず講讀すること

ロ、新刊圖書の共同購入をなし、廻覧によつて講讀をなすこと

第三回埼玉縣女教師會概況

(三六)

- ハ、權威ある新聞雜誌の記事に注意をなし時代文化の進運に伴ふこと
- ニ、休時間を利用して運動に立て又は遠足等をなし、体力の修養につとむること
- 三、園藝美術音楽其他各自の趣味に應じて夫々修養を怠らぬこと
- (二) 修養機關を設けて個人の修養に利便を與ふること
1. 女教師會(講習會)を開催し一致團結して研究心の向上發展及品性陶冶につとむること
- イ、名士の講演又は實地指導を乞ひ人格並に學力の修養に資す
- ロ、小部分に分れて教授研究の相互參觀をなすこと
- ハ、隔月一回研究會及懇談會を開催 意見經驗談研究發表をなすこと、又新刊圖書の購讀批判並に時事問題に就て討論をなす、會後懇談に入る
2. 女教師旅行團を組織して見學旅行又は他府縣郡視察參觀をなすこと(時期隨意、費用は毎月貯金による)
- (三) 常識の修養(第一第二中に含まるべきものなれど特に記せるなり)
1. 實社會、居住する地方の真相を解し世俗的談話に通ずること
- イ、敬老會、處女會、母姉會等の場合に古老の經驗談に傾聽すること

- ロ、家庭訪問により町村の事情を知ることを希望
- 一、授業時間を軽減すること
- 二、女教師の活動範圍を擴め、高學年の知的教材の擔任をもなすこと
- 三、婦人に關する圖書を購入すること
- 四、女教師の疑義を解くに足る機關を設置したきこと
- 三、これにて協議を終り再び會員の研究發表を行ふ本日の研究發表者及題目次の如し
1. 小學校兒童に本讀を讀み得るに至らしむる教授方法 北埼玉 成田小學校訓導 龍前 せい
2. 片假名教授所感 北埼玉 幸手小學校訓導 瀨山 靜子
3. 綴り方に就て 北埼玉 幸手小學校訓導 金久保 ツマ
4. 私の敬仰する人物 兒玉 大畝小學校訓導 武島 きよじ
5. 低學年の讀方教授 入間 南畑小學校訓導 高柳 ふさ
6. 女教師の覺醒 兒玉 金屋小學校訓導 倉林 三九
7. 裁縫科教授を有効ならしむる方法 北埼玉 大桑小學校訓導 矢島 あい
8. 下學年兒童に授くる應用問題の基礎觀念を如何に取扱ふべきか 大里熊谷女子小學校訓導 田村 糸
9. 女兒服改良の一端 南埼玉 岩槻小學校訓導 石井 しげ
- 10 童話について 足立大和田小學校訓導 内田 八重
- 此等の外希望者多かりしも時既に正午を過ぎたれ

は後の機會に譲りて發表を見合す又此等の研究中には參考たるべきもの多かりしも紙面の都合により掲載を見合せたり

四、以上終り小島校長立つて閉會の辭を述べ

この會、各種の協議をなしたるのみならず研究發表講演等ありて得る處頗る多く殊に督學官の講演により教育者の使命特質を知り前途に多大の光明を認め得たるを喜ぶ、現在の國情より考ふるに、今後の女教師は宜しく自己の力量を高めざるべからず、今回の舉亦此の趣旨によるものなるも、教育者の活動すべき事業は後にして、研究すべきもの猶甚だ多きを信ず、今後一層努力せられたきものなり

今回決議の事項中一方は縣の代表者によりて全國女教員大會の提出せらるべければ其狀況は追つて通知するの機會あるべく諸氏提出の希望事項は縣の方にも申出づべし、今後本會より通知の便を計り且女教員相互の連絡を圖らんが爲め各講習部に支部を設置されし是亦諸氏の盡力を望む處なり

第三回埼玉縣女教師會概況

(三七)

と、三日に亘れる女教師會も茲に全く終りを告ぐ、會員の熱心なるよく短時日の間に多數の問題を議了し、各自或る何物かを握り得て欣然として歸路に就くを見ては誠に快哉を叫ばざるを得ず、會議の方法に至りてはまだ多少の批難を免れずと雖も、堂々自らの所位を披瀝するの熱と勇とを認め得られしは近時稀に見るの會合なりと信じ、茲に女教師各位の健全を祈る、

~~~~~

大君は神にしまは天雲の雷の上に庵せすかも

柿 本 人 櫻

山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心我あらめやも

源 實 朝

數島の大和心を人さは、朝日に匂ふ山櫻はな

本 居 宣 長

幾そたびかきにごして澄みかへる水や御國の姿なるらん

八 田 知 紀

天皇は神にしますぞ天皇の勅さしいはかしこみまつれ

橘 曙 寛

一日生きた一日こゝろを天皇の御ために盡す我家の風

同



## 帝國教育會主催全 國女教員大會概況

別項埼玉縣女教師會終了後十月九日より二十三日迄五日間帝國教育會に於て全國女教員大會が開かれた、本縣よりは

北足立郡大宮尋常高等小學校訓導 秋山むめ氏  
入間郡川越尋常高等小學校訓導 宮原しげ氏  
の二氏縣下教師を代表して、出席された今其會議の成績を左に記さう

### ○文部省諮問案

處女會の指導上小學校女教員の特に盡力すべき事項並に其の方法如何

一、處女會の指導上小學校女教員の特に盡力すべき事項

1. 實際生活に必要な知識技能の補習
- イ、修身(女子の自分を知らしめて自覺ある女子たらしめる方面

イ、期日、地方の状況に依り力めて好機を利用し會合の度數を多からしむ

ロ、場所、學校、神社、寺院等

2. 教授は適當の教科書を用ひ又は印刷物を以てし、便宜通信教授をもなす

3. 雜誌、書籍を選択して回覽せしめ適宜之が指導をなす

4. 會員の家庭と連絡を圖る

5. 青年團及各種の婦人團體との提携に力む

### 第一號

全國小學校女教員會を組織するの可否及可なりとせば其の組織方法如何

一、全國小學校女教員會を組織するを可とす其の理由左の如し

1. 小學校教員特有の諸問題解決上の必要
2. 小學校女教員數の増加による共力團結の必要
3. 女子教育改善上の必要
4. 教育諸問題研究調査上の必要
5. 小學校女教員の能率昂進上の必要
6. 處女一般婦人指導上の必要

### 二、本會の組織

1. 目的、小學校教員の自覺を促し地位の向上を圖り教育上の研究調査をなし其の能率を昂進するを以て目的とす
2. 名稱、本會を全國小學校女教員會と稱す

帝國教育會主催全國女教員大會概況

ロ、作法

ハ、家事(經濟、衛生、育兒看護、料理等)

ニ、裁縫

ホ、手藝(袋物、編物、絞染等)

### 2. 体育獎勵

イ、運動會、登山。遠足、見學旅行の監督指導

ロ、衛生思想の向上普及(一般的及婦人衛生)

ハ、會員身体検査(醫師は協同して)

### 3. 處世上の指導

身の上に關する實際上の指導

### 4. 風紀の改善

イ、實質勤勉等美風の振興

ロ、方言の矯正

ハ、俚語の改善

ニ、共同生活の規約特に時刻の確守

### 5. 地方貢獻

イ、産業の補助

ロ、公益事業慈善事業の援助

### 6. 趣味の向上

音樂、園藝插花、點茶等の實習指導

### 二、其の方法

1. 講演會若しくは講習會を開催して講話をなし或は實習を指導す其の他品評會展覽會等をも開く。

3. 事務所 本會の事務所は帝國教育會内に置くものとす

4. 事業 會議の開催(總會は毎年一回東京に開催す)會議の發行(會員に頒つ)圖書の出版刊行、講演會講習會の開催教育の視察、婦人問題の研究指導、其他本會の目的を達するに必要な事項

5. 會員 小學校女教員、小學校女教員團體

6. 役員 會長帝國教育會を推薦す

副會長 貳名 會員中より互選す

幹事 貳名 會員中より互選す

顧問 若干名 會長より委嘱するものとす

評議員 貳拾名 會員中より互選す

任期副會長、幹事、評議員の任期は二年とし重任することを得

7. 會費 會費は團體と個人とを問はず一名につき一ヶ年壹圓を納入するものとす。但し各女教員團體に屬する會員は之を各一會員と見做す

附記 組織の期日は追て之を定む

### 三、方法

1. 第二回全國小學校女教員會に出席したる各會員が各自の地方女教員及び女教員團體に向つて本會の設立を報告し其の本會入會を極力勧誘し併せて各地方女教員團體を組織することに盡力すること

2. 帝國教育會より各地方當局、學校女教員團體等に照會して本

會の設立を報告し其の所屬女教員若しくは女教員團體の本會に對する入會勸誘並に其の地方女教員團體の組織に盡力せられんことを委嘱すること

3. 其の他本會の設立を宣傳するに必要なる手段を講ずること

## 第二號

女子を小學校長及府縣郡視學其他教育上樞要の地位に任用する様獎勵せられんことを其の筋に建議しては如何

女子を小學校長及府縣郡視學其他教育上樞要の地位に任用する様獎勵せられんことを其の筋に建議するを可とす

### 理由

1. 女教員の自覺を促す爲め
2. 小學校に於ける教材設備及兒童の訓練上女兒に適切なる方面の開却せられ居るを救ふ爲め
3. 女教員を理解して勤務上の便宜を計り其の活動を一層自發的ならしむる爲め
4. 女子の社會的活動範圍の發展擴張は即ち全國民の能率増進なること
5. 初等教育者としての長所を有する爲め

## 第三號

有夫女教師が主婦としての任務と女教師としての

事項と教材との連絡を計り自ら實行して之が指導の任に當り以て社會奉仕の念を徹底せしむること

## 三、兒童

### 4. 精神方面

- イ、自然物人工物に對する謝恩の念を強からしめ道德的經濟思想を養成すること
- ロ、一般の社會的事業を理解せしめて公衆の恩惠を感じしむること
- ハ、社會公共の爲めに必要と認めたる事項は進んで之に従ふの念を強からしむること
- ニ、女子の使命を自覺せしめ責任の感を強からしむること
- ホ、共同一致の偉大なることを自覺せしむること
- ヘ、法律命令を遵奉するの念を養成すること
- ト、自治の本質を知らしむること
- チ、博愛慈善の思想を涵養すること

## 四、實行方面

- イ、事物を経済的に使用すること
  - A 學用品の節約
  - B 水道電氣瓦斯の節約
  - ロ、社會的事業を見學せしむること
  - 孤兒院、慈善病院、養老院、電話交換局、印刷局、新聞社、盲啞學校
  - ハ、兒童に相應せる社會的事業を行はしむること
- 帝國教育會主催女教員大會概況

任務を如何に調和せしむべきか

### 一、自覺

1. 職務に對する自覺
2. 境遇に對する自覺

### 二、要求

1. 學校に對して
- (一) 有夫女教員をして本領を發揮すべき地位に立たしむること
- イ、受持學年につきて
- ロ、受持教科につきて
- ハ、擔任事務につきて
- (二) 學校長及職員の相互理解を必要とす
- イ、妊娠中及産後に對して
- ロ、授乳につきて
2. 家庭に對して、家庭の理解
3. 社會に對して、社會の理解

## 第四號

女子に社會奉仕の念を一層深からしむる爲め小學校の教育上特に注意すべき點如何

一、社會奉仕の根本精神 我國體の精華を説くに當り忠孝と共に個人に對する仁社會に對する義に及ばし忠孝仁義を圓滿に發達せしむるにあり。

二、教師 教師は常に社會的事項を注意研究して該

衛生週間、儉約週間、同情週間、安全週間、農村に於ける害虫の驅除、植林

ニ、時間と經濟との觀念を深からしめて規律的生活になさしむること

- A 時間を正確に守ること
- B 日常の仕事に時間的にすること
- C 仕事を秩序的にすること
- ホ、共同作業は進んで爲すの習慣を養ふこと
- 各種當番の實地的作業
- ヘ、規約を實行せしむること
- A 道路公園の規則を實行せしむること
- B 學校の規則を實行せしむること
- ニ、自治の習慣を養ふこと
- A 學校及學校に自治制を布き自治の實驗をなす

## 第五號

女教員の産前産後の休養は何週間を適當とすべきや之れが實行方法如何

一、産前産後を通じて凡そ八週間を適當とす

### 右理由

本案に對して求めたる醫師の意見と多くの経験者の實際狀態に徴したるものなり

### 二、實行方法

1. 左の件を文部當局に建議すること

小學校女教員の産前産後に關する服務規程を設けて左記の要件を制定せられたこと

イ、産前産後を通じて休養期間を八週間とし賜暇の取扱をなすこと

ロ、前項の期間後身体恢復状況により尙二週間以内は其の勤務時間を軽減し得べきこと

但し醫師の診断書を添へて本人の申出ありたる場合に限る

ハ、産前産後の休養期間俸給は全額を支給すること

2. 監督官廳に對する希望

イ、産前産後の休養期間中は必ず相當補充員を置かれたこと

ロ、年度始めに於て前項に要する豫算を計上し置かれたこと

## 第六號

公立學校正教員中獨身の男女教員及有夫の女教員在職十五ヶ年以上にして死亡したるとき在職年數に應じ一時扶助金を其の遺族に支給せらるゝ様取計はれんことを其の筋へ建議するの議

一、決議案建議するを可とす

二、處理案 遺族とは官吏遺族扶助料法第十一條中の遺族に寡夫二等親以内の血族の一項を加ふること

三、參照文 官吏遺族扶助料法第一條

第十一條 扶助料を受くべき寡婦孤兒又は父母祖父

合に附帶して行はしむ其の他實習的教材は教師或は兒童代表者の實驗的實習に依りて了解せしむ

三、家事教授と兒童家庭生活との聯絡

教材撰擇及排列による聯絡、教授上に於ける聯絡帳簿による聯絡、會合による聯絡、家庭訪問による聯絡

四、家事科と社會との聯絡

五、家事と他教科との聯絡

六、家事科と尋常科との聯絡

七、家事教授に關する設備

家事教室及教具を完備せしむること

右に關し當局者の理解を求め一日も早く其の實現を見んことを望む

八、教師

イ、本科を擔當する教師と家庭生活の趣味を解し圓満なる心情を涵養して常に兒童の模範となるべきこと

ロ、常に進歩的研究態度を以て教材の内容を研究し教授方法に向

上進歩を計るべきなり 研究會をも含む

ハ、郷土を指導するに足るべき實教の修養に努むべきこと

其の方法として

○家事に關し根本原理を研究するに足る書物新刊書籍及雜誌類

帝國教育會主催女教員大會概況

母なくして死去したる者は籍内にある二十才未満

又は廢疾若しくは不具にして産業を営むこと能は

ざる兄弟姉妹ありて之を給養するものなき時は寡

婦に相當する扶助料一ヶ年分より少からず五ヶ年

分より多からざる金額を人員に拘らず一時限り其

兄弟姉妹に給することを得

## 第七號

家事科の教授を一層有効ならしむる方法如何

一、教材撰擇の標準

イ、兒童心身の發達に適合し且つ學習に興味を感じしむるに足るもの

ロ、郷土の生活狀態を標準として實用的なるべく家庭生活の改善進歩を促すに足るもの

ハ、基本的代表的にして形式陶冶に價值あるもの

ニ、家事的趣味の向上を計るに足るもの

ホ、他教科にて當然教授すべき教材と重複せざるもの

二、實習の程度及方法

兒童の實習は理法の實證技術の基礎を作り且形式方面に留意し更に進んで研究し得る能力と趣味の養成をなすに止む割烹洗濯看護の實習は各兒童に行はしめ家具の手入等は以上三つの實習をなす場

を購讀すること

○講習會に出席して識者の講演を聴き知識を博め或は技術の上達を計ること

○弊害なき限り社交に移り社會の事情に通すること

○休暇を利用して旅行し學校工場展覽會等を參觀して見聞を廣くすること

二、家事科を受持 師は該級の級擔任を以て最も適當なりとす之に加ふるに理科をも併せ受持つを可とす

橘 曙 覽

たのしみは家内五人五人が風たにひかでありあへる時

たのしみはめづらしき書人に借りはじめ一ひらひるけたる時

たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましとこいひて食ふ時

たのしみは紙をひるけてる筆の思の外によく書けし時

たのしみは朝起き出で、昨日までなかりし花の咲けるを見る時

たのしみは或夷よろこぶ世の中に皇國忘れぬ人を見る時

たのしみは小豆の飯の冷たるを茶漬てふ物になつて食ふ時

たのしみは百廿ひねれど成らぬ歌のふき面白く出ぬき時

たのしみは草のいほりの庭しきひさり心をしづめ居る時

たのしみはそゆる讀みゆく書の中に我さひさしき人を見し時



## 文苑

文以氣爲主  
以誠爲主

### 母をしのびて

本四 矢崎梅子

ふと目が醒めると枕邊で私の母は明朝の仕度をし  
て下さつてゐる。楽しい冬休みが終つて明日は愈々  
歸校といふ前の夜である。身に迫るやうな静寂の内  
に一心に針を運んでゐる母の斜に見える面やつれ。  
皆んな私共の心配をして下さるので一年／＼やつ  
れなさるのだと思つたら其れがたまらなく淋しく物  
悲しく思つた。「母さん(あいよ)」まだ起きてゐら  
つしやるの明朝の仕度はちやんと出来て居りますか  
ら早く休んで早く起きて下さい、それでないと疲れ  
ますもの。「あゝいゝとも明日は早く起きて停車場  
まで送つて行つてあげるよ、お前の方の仕度は出来

(四四)  
てゐるやうだが、これから浦和の方へ行くど雪ば  
つかり降つて寒いから一枚も綿の入つた物を餘計に  
持つて居る方がいゝだらう。それで前から母さんが  
心掛けて揃へて置いたが、やつぱり手がないので縫  
はないでしまつて此のやうに、まぎはになつて、騒  
がして可憐さうだが今少しで出来上がるから。明朝は  
きつと寒い。襦袢の上にでも之を着て長い道中風を  
引かないやうに氣をつけておいで、今出来上ると着  
物を揃へて置いてすぐ寝るから御前は早く休んで早  
く起きなさい」。

母は言ひながらも一心に縫ひ續けてゐる。今の母  
の言葉が何となくおぼろになつて行くので私は悲し  
くなつて思はず涙を夜具でぬぐつた。

今まではこんなに悲しくなかつたがどうして今度  
はこんなに悲しくつらいのだらうか、明日の別れが  
思はれて私はつく／＼母の横顔を見つめて居つた。  
涙は知らぬ間に冷たい頬を傳つてゐるのである。

「母さん(あいよ)」まだお前起きてゐるの早く  
お休み。「えゝこれから休みますの母さん随分寒い  
風が吹いてゐるのね。」「寒いのかい。では今一枚が

様子があり／＼浮ぶ。

歸省後間もなく悲しい報に私は一月二十八日の夜  
行で浦和を立つて家に向つたのである。私の大好き  
な私を可愛がつて下さる母様の許にかけつけた。運  
の悪いのか、天命か、神様に願かけたのも水泡とな  
つてどう／＼あの悲しい／＼母は二月十日の午前四  
時十分過ぎに私共兄弟を残して行かれたのである。  
野邊の見送を済して歸校の途についた前の夜は母の  
姿は枕邊に見ることも出来ず、佛壇の上に繪姿とな  
り變つて針を持たれず、口を開いて下さらばこそ  
あのやさしい先日の御顔をただ私を見守つて下さる  
ばかりであつた。

ほんとうに過去の母様が思ひ出されて何時も袖をし  
ばる。

### 日誌の中より

二部 大野はな

こんもりと繁つた裏の檜へ、さあつと風があつた  
と思ふ間もなく、ぱら／＼と針金の様な雨が降つ  
て来る。其の内にまばゆい太陽がにやうつと顔を出

文苑

(四五)

すと、針金のやうな雨は絹金程になつたが、今度は目をうけて白金の針のやうになつて落ちて来る。私はふと滑稽な過去の失敗を思ひ出して、忍へきれず獨り苦笑をもらした。それは國語の試験に「をばる」といふ問題が出たのを、一圖に簞笥と早合點し、試験後大藪先生をお笑はせ申した事である。其の日照雨を目前見せつけられてゐるのでたまらない。又櫂の揺ぐ音がするので、仰いで空を見ると、東南の強風と共に黒煙の様な雲は、もくもくと寄せて来て忽ち太陽を被うてしまふ。天候は照たり雲つたり一日こんな有様を反復してゐた。

楽しい休暇の一日私は何をしたらうか、さうだ／＼今日は一日殆どお裁縫で暮してしまつたんだつて。丁寧に重ねておいた布たとうから、友禪、白、肉色のめりんすや、日かなきん等を抜き出して、單衣と袴と各々一組づゝの襦袢の袖を造へた。縫ひ上げて見たら表と裏の袖口の配合がよいので、一層引立つて美しく見えた。一寸手に通して、「高ちやんほらいいでせう」といつて、側に私の爲に雑布さしをしてゐる高ちやんに見せたけれど、うなづひたばかりで

餘念なく針を運ばしてゐる愛らしさ。私も道行きを縫ひ始めた、而し之は高等二年の春求めた物だから鉤裂きやら、焼こがしやらで、大部布がいたんでゐる。そして其布を當て、黒い絹糸を一重にほこして針目細かく補綴した。夜になつて縁側から天を見上げると、丁度晝間の様に星が見えたり消えたりしてゐる。まあ何んて奇麗なんだろう、「夜は眠の爲に造られたるものにあらす」あゝほんとだほんとだ、夢中になつて眺めてゐると「わあつ」と急に聲がしたので、驚いてふり返つて見ると、もう高ちやんは私と並んで縁に腰を掛けてゐた。「姉ちゃん去年の歌をうたひませう」「ごんなのでしたつて」「あらいやな姉ちゃんねえはら一番星見附けたと、もう一つは羽衣のよ」「おうさう／＼よく覚えてゐたわねえでは一所に歌ひませう」二人は聲高く合唱した。折しも／＼と恐しい物音をたて、襲つて来た強風にも、優しい心が有るのであらうか、二人の傍へ来ると極めて音をやはらげて、羽衣の調に合せてかなでる様に響いた。

涼しさに聲高らかに歌ふ宵

嵐も之に合せけるかな

## 星の夜

本科一年 吉 田 静

聖母のかざしの様な星は慈愛深い光を輝かしてゐる。そして此の物憂い人間界に何かを見つけた時にあの廣い空で囁き合つては何度か深い吐息をもらしてゐるあの清い何の心配もない澄みきつた空に活々とそして安らかに星の輝いてゐるのを仰いだ時には全く心から崇高な感じに打たれる、私はまるで神の御前に蹲つて訓誡を與へられてゐる時の様に全身がきつとひきしまつた遂にはチツと見上てゐる事も出来なく身動きさへもならなかつた、今はさしもの廣い校舎も静まりかへつて物淋しい程しんとして音一つしない、

すべての生物無生物は皆清い慈光に感じて黙つて見つめてゐる様である。只一つ物淋しさうに秋の閑けるに従つて次第々々に細りゆく哀な虫の音がする寒さが自分の体に迄食ひこんで行くのを歎くやうに息も絶え／＼にリリーリリーと

あゝ何と云ふ静けさであらうか、何時迄も／＼此の神々しい静けさを續けた。破りたくない門の電燈は今宵は一入感したと云ふ様に星の氣高さを羨ましさうに仰ぎ見てゐる。おゝ、星夜の崇高さよ。

## 秋

本一 石田 ひさよ

朝風は肌に沁み入る様に吹く。樂しき夢路を曉の舍中に響き渡る鐘の音に破られた。顔を洗ひ室にかへりて窓に佇む、東天一帶の曙光は夜の暗黒を破り、遠い山、近い野いづれにも曙の光が輝いて居る。白、黄、紫、淡紅色となり其他名状すべからざる幾多の色彩を呈しつゝ、次第に昇る太陽、學びの道に勵まんとする人は此の好時節を忘れてはならぬ今日は日曜なればとて友と郊外へ出た。郊外の一家屋に垣根より高く咲き亂れた淡紅や、白のコスモスが今を盛りと誇らしげに咲いてゐる、野山を見れば木々は紅葉の綿を織らうとしてゐる、暫く行くと思ひがけなくも右側に廣い沼が現れたあちらこちらを散歩しつゝ武蔵野の秋を思ふ存分味つた。

かく散歩しつゝ寫生しつゝして居る間に時は過ぎ菊の香高き秋の空も早や暮れ夕陽まさに没せんとする時山の端に立ちこめたる晚靄は或は濃く或は淡く千種萬別の色に染めなして又曉の空と變つた趣があるやがて宵の明星がひかりだした。

### 小雨降る夜

本一眞 木 桂 子

いと物しづかなる秋の夕まぐれ秋雨が銀糸のごとく細く静に栲葉の上に注ぐ。栲葉の香が深く鼻をつく。秋臭いとても云ふのであらう。木々はすでに落葉して、ただ赤い楓と青桐が晩秋の名残りをとどめて居るばかり、雜草も全く枯死して、草かげに鳴いた虫も今はあの枯草の中に葬られたのかばつたりやんでいとも淋しい。秋雨は一しほしぐれて降る。彼方の溝かち嘴の赤はいそしてからだの青いやうな小鳥が寂しくたつた。どこへ行くのだらう見て居る内に遠くの小川の方へとんで行つた。

田家の晩秋は實にさびしい。暮れがちの秋の日は

### 晩の秋夜

講一杉 山 静

「あゝあ、一寸も書けないでほんとに悲觀してしもうわ」そうつぶやきながら襟をかき合せてつと立つた。晩秋の冷たい空氣は待もうけたかの様にさつと一時に押し寄せて來て思はずぶる／＼と身振ひした。「おゝ寒い。」と小さく叫んで窓の方へ足を向けた。何時もはさほど感じない疊のつめたさがいやに足に沁みる。まだ十月と云ふに馬鹿に寒い、十一月末あたりの様である。突然あたりの空氣をつき破つていつもの大工の浪花節の聲が聞えた。それに和して又茶碗をたゞいて居るのだらうカン／＼と云ふ音が聞えた。私はいつか窓のそばに來て居た。そつと頬を硝子につけて黒く更けた外に目をやつた。硝子の冷たさが／＼と頬につきいつたが、やがては何の感覺もなくなつて私はいつまでも浪花節を聞いてゐた、目には只は一つと大工の家の軒燈の光がうつつて居た。

大工は二十四五の中肉中脊で顔は青黒く一寸見る

時雨のために尙更早く暮れた。つめたい風がどこから吹いて來る。暮れるにしたがつて次第／＼にさびしくなつた。夕餉の席に一家團欒して一時家の中は仲々賑かになつた、がそれも暫時の間でやがて皆寢につく、父母はお仕事にはげまれる、私は少し勉強しなければならぬと思つて、机は出したもの、あまりもの静かなのでうつとひとりでしてしまつた。雨は降つて居るのか居ないのかそれすらわからないやうに静で夢のやうに眠つた静かな世界に時計のセコンドの音のみ聞えて來る。時に鼠が天井を走る音が聞えるその外は何の音もしない。町ならば車馬の往來もありて賑やかであらうに田家の夜は實にしづかだ。

何もしないのにもはや十時を報じた十時にもなれば此邊は夜中のやうになつてしまつて、通る人はほんたうにまれである。今宵のさびしさは一通りではない父母にもう「お休みなさいよ」といはれたのに氣がついて床へ入つた。

と情け大工で同盟罷業でもしそうなといった様子をしてゐる。全く彼は情け者である。大工とは名ばかりでろくに仕事もしない。好なのはお酒と浪花節とよか／＼の歌ふ歌である。云ふ。いつも酒を飲むと茹草魚の様な赤い顔をして、腐敗した様な光澤のないごろんとした目をして、活きた章魚を火の上へ乗せた様な勢でよか／＼の歌ふ歌を酒樽を叩きながら歌つたり、茶碗のはじをたゞて浪花節を歌つたりする。飲まない時は世の荒波にもまれ／＼て疲れはてたでも云ふ様な様子をして淋しそうにぼかんとしてゐる。たゞ彼の挨拶はそうした彼の貧弱な風態を裏切つて、實に元氣にみち／＼た聲である。それがかへつて彼を淋しくあはれつぽく見せてゐる。彼の父は東光寺の墓の穴掘である。そして彼の不勤愼なその態度を見て、心配もし悲しんでもある。母も老体を働かせながら其々に心配してゐる。彼は少し前に私の家の前に越して來たのだ。まだ一人の彼は妻を得ようど此處へ越して來たのだぞうだ。そして疊を取換へたり軒燈を付けたり障子を張換へたりした。彼の様子を知つた近所の人には「あの軒燈はもう

むき取られてしようよ」と話して居る。こんな寒い夜には冷たい蒲團の中で彼の両親は彼の不勤慎を語つて枕をぬらして居る事だらう。

はつと電燈が消えた様に歌はやんだ。後は何の音もしない。そつと右手をさんにかけて硝子戸を開けた。さつと風が吹き込んで心の底まで氷る様。ふと空を見ると無数の星が冷たく輝いて細い月が中天に銀色に光つて居る。突然後から「お静や早く書いて早くおやすみよ」と云ふ母様の聲がして「エ」軽く答へて戸を締めた。ほつとよみがへつた様にぬくみを感じたおくれ毛をかきあげながら元の机の前に座つた。作文の本がなかば明いてゐて帖面には何も書いてない。あゝ早く書かなければ。

どこからか、細く／＼消えいる様なこころぎの聲がした。

降りつゝこの五月雨に故さの父のおくつき音やむすらん

一つもて君をいはば一つもて親をいはばん二もさある松

落合直文

同



詞藻

みどりなる一つ草を春は見し

秋はいろ／＼の花にぞありける

□袖のほころび

本四 石坂艶子

此の袖口のほころびは  
まがきにたよる白菊を  
手折りしをりの思ひ出よ  
破れたる袖の悲しけれ  
さはれ秘めたる秋の歌  
をさめ心のいとせめて  
このほろびはそのまゝに

□葉末の露

芦の葉の露が散る  
ホロ／＼と散る

袖がふれても

黒髪そのひとすぢがふれても

ホロ／＼と散る

葉末の露の美しさ

袖にうけたら

眞珠となつて残るだら

□ごんぼ

本三 佐藤嘉代

もくせいかわる

テニスコートを

赤いごんぼが

秋晴れの

今日もまた

飛んでゐる

天上の花に

甘いかわりに

赤いごんぼは

酔はされて

酔はされて

ヒイラヒラ

しど／＼降る

もくせいの花が

赤いごんぼの

秋雨に

散つたどて

しのびなき

詞藻

□子守唄

本一 吉田 静

さくら咲く

やさしい音律

情緒を持つた

口吟みつゝ

偲ばれる

東の國の子守唄

やはらかな

其の唄を

私は遠い昔が

私は何時も

暮れゆく

小さき鳥を

ヂツと眠るが

たそがれの

空にかへりゆく

見やりつゝ

常だつた

昔なつかしの

かいどに立つて

ふるへる様な

子守唄

子守等の

其の聲を

(五一)

聞いた時には 昔がなつかしい  
私はいつそ

□夕

講一 杉山 静

あばね、あばよ  
土藏のかげで、まっごと遊び  
餘念なかつた子供たち  
楽しい家へ、人形だいて、とつととかへる  
鳥のちいも、お寺の屋根へ  
カアと一聲、残して行つた  
後は淋しく、土藏のかべに  
赤い夕日が、カッと照る

□かくれんぼ

蝙蝠と鳥のかくれんぼ  
暗い空をさがせと居ない  
鳥小山でたいくつまざれ  
カアと歌へば夜があけて  
東の空に日が上る

□四季

本三 長谷川 雪

遠山の雪こそ消えね浅芽生の青づく色よ春は立つめ  
わだのはら沖つ白浪よるとみし雲井の外に立てる我  
はも  
行きくれてとばとばたざるその路にふとしのびけ  
りさすらひの子を(以上二首登山の折)  
百舌鳥なきて秋たけにけり山村の小家の柿は赤く熟  
しぬ  
さらでだに故郷こふる秋の夜の闇路はるかに赤き灯  
の見ゆ  
木枯しの寒夜の町を巡り行く柏子木うつ子なれも人  
の子  
逝きませる君なげくかや冬の夜の闇にむせびてみぞ  
れそぼふる  
まどかなる夢さめはてし冬の夜の枕邊近く小雨音す  
る

和歌



いつはりのたぐみないふな誠だに

さぐれば歌はやすからんもの

橘曙覧

□ゆく秋

本四 石坂 艶子

露しげき野邊の小路にたゞすめる我獨りおきて秋は  
逝きける  
武さしのや野末の尾花うらがれて名知らぬ塚に秋風  
の吹く

□長き夜

本四 矢崎 梅子

一人居る巷の宿の夜深く汽笛の響いと身にしむ  
母病みていきぐるしくもうめくごときとて長夜をひ  
どめざめし

□寮の秋

二部 井上 てる

音たてゝ寮の窓うつ桐一葉さびしや秋のはやたちそ  
めし

ふる里の夕べ戀しうなりにけり秋去る虫の聲細うし  
て

我が心うつろと知りつそのうつろもとめんとして我  
はもたゆる

我が心足らぬと知りて何故に足らざるを迷ふ我は悲  
しき

□渡部先生をしのびて

本二 立石 利宇

逝きませし吾が師のみたま宿るらんみ空に淋しまた  
づける星

鈴蘭の咲くみくにへと旅たちし師の面影の今日も亦  
見ゆ

師の君の書き残されし黒板の字のあと見えぬが淋し  
かりけり

教へ子の爲に其の身を失ひし尊きみたま今はいづこ  
に

□秋

講二 荻野 たか

青く細く木の間漏れ来る月影に友を誘ふやこほろぎ  
の啼く

○秋思

本一 吉田 静

力なくバサリとおつる桐の葉に首さへちむ蛙のさ  
びし  
萩の葉の風もさそはではらくとはかなく散りし秋  
の夕暮

□春より秋へ

本一 黒須 静江

惜しめどもせんすべもなし行く春の葉櫻かげに姿消  
し行く  
おちこちに獲物きそへる潮干狩白帆も遠き初夏の  
濱  
さわりよき單衣に替へしうれしさにそと立ちて見し  
柱鏡よ  
降る雨は夢と過せし一とせをなげくがごとく落葉打  
つかな

□初秋の夕

講一 前川 貞與

きのふ伐りし林の杉のきりくちに霧もたつべし初秋  
の夕



通信

饅頭は食つたと雁に言傳てよ 漱石

京都より

佐藤 廣治 先生

心にもない御無沙汰申上げて居りました。今日御  
手紙を頂戴して嬉しいと同時に、誠に相濟まぬ心地  
がいたしました。御宅奥様始め御子様方も御一同御  
無事の由殊に本年四月には御目出度い事も御座いま  
した相で、遅ればせながら御祝詞申上げます。皆様  
定めて御成人の事だらうと想像して居ます。私宅で  
も一同無事暮して居ります。子供は長男敬治が九才、  
長女禮子が七才、二女苑子が五才、二男漸が三才、  
といふ等差級數で來て居るのです。もう其の次の番  
が來て居るのですけれども、今度は留守だったので  
助かりました。四人の子供には實に閉口の至です。  
無頓着に子供ばかり殖して了つて今更弱つて居ま  
す。

□土

講一 杉山 静

足に入る土のつめたきなつかしみつまどり歩む朝の  
田舎路  
青き本つと手に取れば嬉しさの胸にみちみつ長き秋  
の夜  
話聲いつかどぎれて淋しさの胸にしみ入る大雨の  
夜  
なにものか胸におどるをおぼわつゝ一人さまよふ朝  
の庭園  
大太鼓ハタとどだへてコロコロと細き小歌のひびく  
淋しさ

野村 望 東

うきながら今年も果になりにけり又こむ年はいかんまらまじ  
道遠くゆきてかへりて今朝のこ思へば冬も日長かりけり  
川の瀬にあらふ蕪の流れ菜を追ひあらそひてゆくあひる哉  
朝がほの花よりもるきみながらにこむ年さかむ種をまきつゝ  
物乞ひの乞ふ聲悲し夕雨にしくしくぬれて門にたつらし

私は去る八月卅日に歸朝しましたつひ御通知もせ  
ずに居つたかと思ひます。過日一寸用事があつて出  
京した時餘程参上したかつたのですけれども、當方  
學校を休んで行つたので残念ながらそのまゝ歸りま  
した次第でした。それでも大久保先生に丈けは御目  
にかゝりました。然しそれも文部省からの歸途あの  
學校の前を通り先生の居られる事を思ひ出して立ち  
寄り折りよく御目にかゝれたのでした。

貴地學校の御様子詳細に御示し下され十年昔の事  
が、あり／＼と目に浮ぶ心地がいたしました。實に  
感慨無量です。小島先生の御不幸は誠にお氣の毒の  
至りです。私も何時までも、まごついて居るわけに  
も参らず近く田舎の高校へでも行く考です。今は當  
地の佛教大學と武道専門學校とで働いて居ますが、  
どうも働きながらでは、あぶ蜂とらずになり相です  
から、友人等はもうしても京都を離れずに居る様に  
とすゝめて呉れますけれども。……………

支那は非常に私の氣に入つた地で何とかしてもう  
一度行き度いと考へて居ます。出來るなら墳墓の地  
にしてもよいと考へて居ります。先日その話が出

たら、湖南先生から支那へ歸化してはどうかつて云はれました。其の實先生も老後は支那で暮し度いと云つて居られます。旅行はあの時西安へ行く考であつた處が土匪の爲めに瀘關から引き返しました。そして鄭州で同行者と別れ一人旅となつて開封へ行き更に徐州に行き、それから津浦線で滁州へ行き醉翁亭、瑯琊寺、豐樂亭などに遊び、それから、南京へ行きました。南京は北京に次いで氣に入つた地で毎日地圖と案内記と讀史方輿記要とを手にしつゝ遊び廻りました。南京から鎮江、揚州を訪ひ常州、蘇州に遊び、崑山より三十里の田舎で顧亭林の墓を弔しその遺族に會ひ、上海に入り、次ぎに杭州に到つて西湖に遊び、それより舟で紹興へ渡り同地で會稽に上り禹穴を探り、餘姚に到つて黃梨州の廟を拜し、陽明の生地を尋ね、寧波に出で、海上普陀山の靈地を訪ひ更に海路上海に歸り揚子江を溯つて九江に到り、潯陽江頭に昔を偲び、廬山上り白鹿書院趾を訪ひ、南昌に到つて滕王閣に登り、更に船にて漢口に行き、武昌、漢陽の邊をさまよひ、長洲に到つて途、屈原を弔し岳陽樓を望み君山に舜妃の傳説を偲

び長沙にては、岳麓書院趾を尋ね、賈誼故宅を訪ひ洛陽賈生年十八で頗る愉快な氣分に相成、漢口、信陽を経て歸燕、此之旅行費す處の日子、八十余日、全く獨り旅にて、あはれにも又興深く、久し振りにて日本人に會へる時など誠に涙のこぼれる程のうれしさでした。今でも折々かの地にありし日の夢など見て居ます。今ならば支那内地大抵の處は一人で旅行してあるける自信は得ました。旅行の日記など詳細に書きつけては來ましたが例の不精でまだまごめる事もせずに居ます。どうも生來の不精が支那へ行つてから一層増長した様で閉口して居ます。奥様によろしく、家族一同からよろしくと申出てます。

當地の秋も追々よろしい様ですが如何にしても狭くるしいので、それに雨が多くて閉口です。

あまりだら／＼書きましたから失禮します。

十一月十七日

弟 廣

川口様

待 史



## 旅行記

汽車道に低く雁さぶ月夜哉 千 規

### 關西旅行記

(本科四年、二部)

▼五月十二日—十三日 第二日(浦和—琵琶湖畔—京都)

七日間の旅行、眼前に開かれたこの旅、過去何年か待ちわびてゐた旅行である。山は紫に水は清く、光華ある古き史蹟を仰し雋永な由緒を含んでゐる京の探勝にこれから出發するのである。希望に燃えたこの旅。市原先生、霜田先生、竹内先生を始め、一行四十餘名は午後五時四十二分に浦和を後にした。誰も彼もあのやさしい京に憧れて少しも落ちつきがない。上野の驛を出るゝ案外の雨降りその上風さへ交つて容赦もない。可成りに澤山入つてゐる荷物をかゝへて徒歩で萬世橋まで。旅の第一日から濡れ風同様さは、七日の旅が思ひやられた。七時十五分高架電車で雨の夜の東都を眺めて東京驛に向ふ。驛内は何時もなく雑踏してゐる。まだ發車にも間があるので三等待合室にて休む。此の春御別れした寺尾先生と野口さん、関根さんとはこの雨の中をわざ／＼御見送り下さいまして色々さ光明を與へて下さつた。午後八時二十分愈々東京の地を立つ

て一行の乗つた車は西へ／＼と進む。品川で御見送り下さつた方々を暫くの御別れをした。この一車は私共の世界、希望に満ちて私共は子供の様に、それは／＼賑やかである。北山になつたお腹を作るさもうそろ／＼寝る用意をする人もあるし、一方には勢が出て歌を唄ふやら、なか／＼騒々しい。又一人で考へて胸に藏して置くことが出来ないで楽しい旅行談に打ち興じて居る方もある。寢よう／＼と努めたがあまりにはげしいこの車の揺れ方に中々寝られない。外はまだ雨が傾りに降つてゐるらしい。暗の中を汽車は西へ／＼進む。「アレヨ／＼」といふ聲、ハツと目を覺まして窓の外を眺むれば暗黒世界、その中に電燈の輝くのが見える。そう／＼あれがお話に何つた富士紡績であつた。それが過ぎれば又もその眞の暗、暗の中をゆられ／＼と更に西に。濱松々々淡い電燈の下を驛夫が呼びながら通る、まだ真夜中であるのに大部分の人は起きてコッ／＼何か用意してゐる。窮屈さうな様子をして寝てゐる人もある。濱名湖!!濱名湖!!車中は總立ちになつた。左手は洋々たる大海原、漫々たる水を湛へた濱名湖は右手に座つてゐる。遠い向ふの山の端から曙の光が見えそめて夜のさびりがだん／＼とく／＼と行／＼と濱名湖!!この大自然に對して何の言葉が出よう。何時までも／＼とあせる私共の心を知らないのか汽車は更に進む。名古屋へ着いた頃はすつかり夜は明けはなれてやがて活動に移らうとしてゐる。驛を發車してからは皆窓から首を出して鮎の所在を求めてゐる。「アッ見え」た。列車は容赦なく走る鮎は直ちに雲の向ふさなつてしまつた。汽車は濃美の大平野をひた走り走り行く。関ヶ原に到りて所謂天下

分目の戦ありし當時を偲び不破の關趾を過ぎて近江の海に沿ひて進む。

午前十一時頃石山驛に下車す。「そこに見えるのは三上山」の聲にすゝ左を望めば田原藤太秀郷の、松退治に名を得たる山が美しく紫に染えてある。こゝより電車にゆられて石山寺下に着く。右手は樹木生ひ茂れる崖。左手は悠々たる勢田の流。疲れた足も思ひの外運ばれて石山寺に参拜す。堂宇は遠く奈良時代の僧良辨の開基で現に存在せる堂塔は慶長年間豊臣秀頼の建築に係る。山門を入れば先づアツき目を驚かす。敷石の兩側には深紅に染えたつゝじ翠色濃き紅葉が竝んで居る。その前には青竹にて垣をめぐらし一定の律によつて雪洞を立てる。この人工的の美を何に例へたらよいのだらう。本堂の左には紫式部の源氏の間あり。式部此處にて明石の巻の筆を取りしと云ひ傳へられてある。多寶堂觀月亭も見る。夏の夕月夜等はこんなであらうかなと、偲ばれた。石段を下れば本堂の前に、奇岩が立つてある。石山寺の名はこの石から得たのだと云ふ事である。汽船にて三井寺下に向ふ。瀬田川丸といつて中々大きな汽船である。瀬田の唐橋栗津の松原の名の美しいこと、全く想像を裏切られてしまつた。鳴の海の大きなのに比してはいづれも唯小さく思はれた。長等山、比叡山は軸に當つて聳えて居る。恰も一行を迎へようとするかの様に。

三井寺に参拜し所謂御井ののどく。三井は御井の轉化とか、觀音堂に上れば近江の海は眼界に擴げられ青々として鏡の様な面を白帆がスーとすべつて行く。

眼下には古の滋賀の郡が擴げられてある。

人も知らない人もは、笑みながら會釋して過ぐる御陵道に歩を移せば人皆緊張し感に打たれて言葉を發する者もない、道も盡きて御陵前に到る。

清水に口を注ぎ、手を洗ひ襟を正して御陵に向つて伏し拜む、三重の御垣の内に寶璽を拜し奉る松栢翁鬱として森嚴なる氣分に充ちてゐる、神聖な御靈として崇高極りなく明治大帝の洪大無邊な御神徳を仰がん、参拜者引きもきらず東方や、低い所に昭憲皇太后の御陵を拜し奉る、御仁慈深き皇太后の神靈は永へに此處に眠りま

す。

森になく蟬の聲を後にして乃木神社に詣つ愛馬の銅像は將軍のみ靈を守護してある。左方に旅順包圍當時將軍の事務を取りもさいふ茅屋がある。此の様な賤しい部屋から彼の大露西亞を打ちこらす謀の生れた事は真に奇である、靜子夫人を祭れる静魂神社にも参拜す檀原御陵にやれば寂々として物音さしては何も聞えない、此の附近の人でもあらうか、陵前にぬがついて祈願に餘念なく私共一同が参拜するも知らないやうに。平安京を開かれし檀原帝の御陵と思へばなつかしき一入に増す。

七條にて電車を降り七條通りを三十三間堂に向ふ目の前に聳えてゐるのは阿彌陀が坐す豐太閤の廟所である、三十三間堂は後白河法皇の御建築で正しくは天台宗蓮華玉院といふ、棟の長さは六十六間、觀音様は普通三萬三千三十三体といふが事實は一千一十一体といふ、個々の觀音は皆後白河法皇の御身長により五尺八寸にしたが、堂裏で通し矢の説明を聞く修業者の心算も察せらる。次に京都帝室博物館内に入る、本邦古美術の稀有なるものを蒐集してある北野天神緣起

小波や滋賀の都のあれにしか  
昔ながらの山櫻花

と薩摩の守忠教の詠むた歌が浮んだ。

七景は霧にかくれて三井の鐘

(芭蕉集)

三井の晩鐘を聞く事が出来ないのは少なからず心残りがある。あきない眺めに名残りを惜しみながら札の辻より京津電車で京都に着き、三條小橋の美登利館に投宿。

五月十四日 第二日 (桃山御陵参拜—京都見物)

京！京！憧れの京の都の人となり、京氣分に浸されてゐる。朝早く軒下を歩く大原女の姿珍らしく私共の感興を引く。先づ東本願寺に到る、山門勅使門の壯大なること又本堂の莊嚴なること實に佛の力の威大なるに驚いた。眞宗大谷派の本山で創立は慶長七年、開祖は教知上人である。本堂に上つて第一に驚いたのは御柱があまり大きい事であつた。バタ／＼歩く私共の足下では老若男女すべて祈願をこめるのに餘念がない本堂の棟上げの際用ひた、繩は新潟の信者が各自の頭髪を献納しそれから出来たものさか。

先帝の御宸筆「見眞の勅額を拜す。

此處を去つて西本願寺に來れば形式は略東本願寺と違はない。只前のは圓柱で後ののは角柱であつた、堂内は參觀する事は出来ない、で直ぐに裏に廻つて有名な唐門を仰げば左甚五郎の雌雄の猫が昔ながらに存してゐる。

七條大宮通りから七條停車場に向ふ。眼前にはあの優しい東山一帯の地が縁に座つてゐる。

桃山驛で汽車を捨て構内を出ればあれ嬉しい浦和高女の生徒知る

の繪巻物或は佛涅槃の圖の如きは明らかに目前に浮ぶ。現世に生きてゐる私共は遠く昔にある様な感じがした、是より方廣寺に行く鐘樓に行つて國家安康の鐘を見る之れから徳川氏と紛議起り脆くも葉末の露に消えた豊臣氏、あゝ何て哀れなのだらう餘韻をささひやく中に深い／＼恨みがこもつてゐる。爪先き上りの細道も、この途の盡きる所にはさ希望に満ちてゐる爲に喘ぎ／＼上りながら喜びがあつた「こゝか新高尾」成程新緑の楓が限りがない、清水の舞臺はすぐ上に仰ぎ見ることが出来る。

「音羽の瀧はこれですよ。」

「何處にあるの何處に」

「そら此處に」

「あらこれは寛の水ぢやないの」

「え、寛が三本並んでゐるだけなの音羽の瀧位私達の家にだつて

作る事出来るは」

「わさ／＼、作らなくても澤山雨が降れば此處のより氣のきいたの

が自然に出来てよ」

音羽の瀧は散々に攻撃された。

百段餘りの石段も難なく上りつめた。舞臺からは京の町が二目に見え東西の本願寺、東寺の五重の塔は一きは立つて目につく。

美しく並んだ瀬戸物店を兩側に見ながら三年坂を下りて圓山公園に行く、あの名高い枝垂櫻を他目に見て直ぐに浄土宗の總本山智恵院に向ふ本寺は圓光大師開基の靈場である、本堂に上ればすぐ屋根裏は左甚五郎の傘といふのがある、甚五郎が仕事に熱心のあまり此の所に忘れたさか金網で周りを張つてゐる。名を得た猿張り廊下で

は我も／＼と興がつて盛に踏む。

驚の音を耳にしながら本堂の後の青葉若葉に埋れた華頂山を望んで、は驚する言葉も知らない。此の地を立つて平安神宮に行く。官幣大社で畏くも桓武天皇を奉祀す、勅門を懸天門といひ入れれば龍尾壇あり。正面に大極殿あり左右に蒼龍樓白虎樓あつて鳳凰堂と同一造りである。東西の兩神苑があつて比叡山を背景とした大自然の庭園池の水の面は夕陽にきらめいてゐる。その中の白紫の菖蒲は誇かに又私共を迎へ顔に咲いてゐる。本社は明治二十八年一千百年祭の折に創立したものである。武徳殿記念動物園を他に見て疏水インクラインを見る。船が岡の上を「トラム」作用によつて昇降し船運に便しその効果は偉大なものであるとして又奇観である。これから嵐山の夕景夜景を眺めよう。私共は歩を嵐山に向けた四條大宮から嵐山行の電車に乗りホブラの風は靡くその中を走つて嵐山に着いた頃はもう夕の霽が下りて来てあたりはシーンとしてゐた。西北の龜山小倉山に相對し大堰の清流は其の麓を繞り滿山櫻楓樹多く山水の景四季の眺この大自然の美しさは私共が何と表せるだらうか。渡月橋は大堰の流れにかゝり長さは百間餘か近所の小督の局の塚を拜す有名な櫻園子には何れも舌つゝみを打つ。元氣のある有志の者は夜の天龍寺を見た。禪宗五山の二で夢窓國師の開基である。境内は廣く老松古杉鬱蒼として頗る幽靜である。人の顔も見分け難い頃種ひかれる思ひを無理に夢の嵐山に残して三條の宿へ歸つた。

▼五月十五日 第三日 (京都)

午前八時。私共は宿を出て葵の祭を見る爲に御所に行きました。秋利をひきつめた廣い御苑をザク／＼と音も氣持ちよく行列の通る

棚のある名住亭があります。こは御水尾天皇の御臨幸なされし處さか聞きしにまさる處でありました。境内をぬけ京都の市街へ出ました。そして四時頃、こゝに開會中の全國勸業博覽會を見ました。忙しの旅の観望は十分の餘裕を與へませんでした。一時間餘りこゝを出て商品陳列館へ入りました。あれやこれやと買ひ求めた數々を携へて再び三條の宿へ歸つたのは午後六時頃でした。西都の夜も今宵さりと華やかな通りへ或は鴨川の隅へと皆出て行きました。

▼五月十六日 第四日 (京都・大阪・神戸・須磨・奈良)

京都の名残を惜みつゝ、六時十五分發の京阪電車に乗つて大阪へ着きました。日曜日の爲でもありません。停留所の混雑は一方ならずでありました。重い荷物を下げて大阪城前を見に参りました。嗚呼大阪城！此の城跡を見ました時、私共は英雄豊太閤の偉大な事業、彼が人物を思はざるを得ませんでした。今は第四師團司令部となつて居ります。今日はさういふ故か、城内を見る事を禁じてありました。此處より餘り心地よくない處を歩いて神戸行の電車に乗る爲停留場へ着きました。先生方のおはからひで、重い荷物を或る寺の内に預け、お辨當のみになつて九時電車に乗りました。来る電車も来る電車もそれは非常なこみあひでした。二組に分れて漸く乗つた私共は、約二時間の後神戸へ着きました。見馴れぬ西澤館の聲えたる中を歩みます。西洋人、支那人に到るゝところで會ひます。神戸市に如何に多くの外人が住んで居るか、何はれまう炎熱焼くやうなことも言ひたい程の日中は私共は諏訪山へ登りました。山の上から見渡せる、神戸の港、灣内の汽船軍艦は數限りなく黒い煙を青空にたてゝゐました。川崎の造船所、大倉山、縣廳、四國の島、メリケン埠

御所の前に着いた時はもう大變な群集で、やつと一列に並び得た私共は首を長くして待つて居りました。やがて靜かに傳はる「來られやす」の京聲にのび上つて見るに遙に行列は見え初めました。葵をかざして都大路を靜にのび行く御所車花傘勅使の機は遠く私共を背に誘ひました見終つたのは約三十分の後でした。それから私共は御所の周圍を歩きました。先づ東より建春門、宣秋門と殿めしい古風に雅びた門を拜觀して中山家の館跡の中に先帝の御産湯に用ひ給はれた祐の井を拜して西側の蛤御門を傍に見て十時に御所を出で、間もなく和氣清隆を祀れる別格官幣社護王神社に参拝致しました。それより電車で北野神社に着きました。祭神はいさけなき幼児もその名を知つて居る、彼の菅公であります。現在の社殿は慶長年間に豊臣秀頼の造られたもので、桃山時代の八棟造りであります。境内には公の世にいました時、愛でられた梅の樹を多く植ゑてあります。少し前には母君伴氏の社もございました。此れより徒歩で今木の神。久度の神、古開神、比賣神の四神を奉祀してある平野神社を拜してこれより金閣寺へ向ひました。途中三條天皇の御陵を遙に拜し正午頃つきました。足利義満閑居の跡で正しくは鹿苑寺といひます。境内の樹蔭に晝食をすませて案内人によつて寺を見ます。名人の筆を染めた畫幅珍らしい骨董品に埋まつて居ます。そこを出て小さい木戸を通つて庭園の中にある三層の金閣の中へ入りました。中には木像の義満公の坐像もありました。三階より戻つて庭園に出ます。衣笠を背景に三層の金閣池に望み美しいところでした。新緑の頃、紅葉の頃、義満は此處に歡樂を恣にした事でせう。龍門の瀧銀下水崖下の水と案内に従つて行きます。世に名高い南天の床柱萩の違

頭、さ先生の御指さしなされる御手の動く方にみな目をキョト／＼させて處定かならぬ方々を見渡しました。丁度正午でしたので、山蔭に腰をおろしてお辨當をつかひました。午後一時、こゝを立つて湊川神社に参拝したのは一時半でありました。嗚呼忠臣楠子之墓と光圀卿の御執筆された碑もあります。絶えぬ参拜の人々の面にはみな忠臣無二の楠公を偲ぶ色が見えて居ります。此處を去つて二時電車で行きました。電車を捨て、須磨寺へ着いたのは三時十分でありました。一谷の戦に破られた平家の公達に哀れな憐ない最後を遂げましたでも平家の滅亡は麗しいものであります。そしてこゝより須磨の浦へ向ひました。本に話に須磨はほんさうに詩的なところと思ひました。然し事實はそれほど美しいところでもありません。人情風俗も思ひやられます。「一寸お待ちなさい」などいふ人目をひく立札などもありました。これも私共の想像を破る一つでした。線路を横ざる間もなく砂地へ出ました。青々とした海原の、空と交る遙の彼方、白帆をはらませた船でも、日中の浦わはそれ程の深い印象を私共へ與へませんでした。曙が昏黄だつたらもつとさなごといふ感を起すにはあられませんか。四時去つて四時二十分の電車です。再び神戸へ戻りました。時間があるならもつとゆつくりして明石の方までもと思ひました。阪神電車で大阪へ着いた時は七時半、もう市街はまばゆい電燈の町でした。眞暗なお寺の中から預けた荷物を出して間もなく奈良行の電車に乗りました。今度ばかりは皆ゆつくり腰を下す事が出来ました。暗を縫うて行く電車の窓に見える輝いた大阪の市街は全く晝間歩いたあの醜い處は被はれて美しい處に感ぜられました。京都から大阪、神戸、須磨、私共はかゝる遠くま

で見且つ味ふ事の出来る事を喜びます。一日乗り通じ、且つ車中立ち通しのみばかり疲れ果てました。電車は二里もあるといふ生駒トンネルも通りました。電車のトンネルでは日本一長いトンネルです。隣の人は教へてくれました。かうして九時に奈良へ着きました。奈良―奈良停車場を出て静かな町を通つて暗やみの猿澤の湖畔を歩きました。神秘的な云ひ知れぬおかしさを覚えるのでした。吉田屋は此の湖畔でした。宿屋の厚き待遇に静なこの處で疲れた身を休めました。

▼五月十七日 第五日 (奈良―山田)

「皆さん六時です。起きなさい。」眠い目を開くと竹内先生はもう髪を御結ひになつた後でした。宿の庭には、可愛い小鹿が見馴れぬ旅人に驚いて居る様子です。仕度を済ませて七時十分に宿を出ました。眠つて居る様な湖畔から興福寺へ行きました。南圓堂まで八角寶珠形の建物を見ました。誰にでも一つの願ひをかなへさせますとか。芝生の中には昔の寺院の跡の土台石ばかりが隆盛であつた藤原氏の名残を留めて居ます。境内を出て春日神社へ向ひました。聞きしに勝る長い境内を鹿と戯れながら朝日に輝く神樹の間を歩きました。

左は春日野右は浅茅原といひます。数限りなく立並ぶ燈籠にはほんとうに驚きました。總て一の鳥居、二の鳥居を過ぎて縁邊き中に朱塗の若宮が見えました。ここに詣で、嫩草山、三笠山を後に八時二十分、手向山八幡へ向ひました。参拜終つて程なく東大寺に着きました。

蟲干しや甥の僧と東大寺

(無村)

先づ法華堂を見ました。一名三月堂といひます。本尊は不空羅

素觀音で天平五年聖武天皇の御創立せられたものであります。堂内では丁度讀經が始まつて居りました。親切な僧侶の案内で私共は心よく見終へました。さうして三月堂によつて見下す眼界一面に開けて古の三條四條又大佛殿の屋根の雫も見えました。傍に若狹井があります。三月の十二日には此の井戸の水を汲んで二月堂へ供へます行事がございませうか。こゝから大佛殿に着きました。大佛殿の高さ五丈三尺五寸、小學校時代の國語讀本を思ひ出しつゝ、今日は目の前に見るうれしさ、またその偉大なものに唯あれさ感歎するばかりでした。時間に追はれつゝ、さうしてより正倉院の外門を見て南大門に向ひました。有名な運慶、湛慶の作つた仁王が左右にあります。こゝから奈良驛へ行く途すがら奈良博物館、八重櫻を見ました。奈良師範学校の校庭にあります。

古の奈良の都の八重櫻

今日九重に匂ひぬるかな

(伊勢大輔)

開化天皇の御陵も街の通りより遙拜致しました。奈良驛は十時二十分發で法隆寺へ向ひました。車中に忙しうお辨當を使ひ十二時法隆寺驛へ着きました。こゝに荷物を預けて再び熱い日中を田舎道として法隆寺へ着きました。歴史に美術に有名な法隆寺先づ中門を見ます。その柱はギリシヤ建築の二様エンタシス式を示して居ります。案内人によつて、先づ金堂を見ました。名高き釋迦三尊藥師三尊四天王玉虫の厨子等安置して在ります。周圍の壁には國寶の彼の蠡の筆になれる壁畫があります。丁度今は白布に閉ざされてあります。ほんさうに残念でありました。こゝより飛鳥時代の名残を留むる寶物を拜觀して庭に出て、彼の五重塔を眺めました。前に歴

史で伺ひました山背大兄王の御一族が入鹿の爲に弑せられました事は、私共の胸に再び鮮やかな記憶を起させました。又其の外觀の美しい事は、我國建築の美の上で第一に數へられる事によつても圖り知れます。次に夢殿を見ました。佛教の隆盛、信仰の一念はこの様な宏大な伽藍をも産みました。中門五重塔みな推古朝のものであります。昔ながらのこの建築物は私共にとつて無限の感興を與へました。こゝを出て零時五分發で山田へ向ひました。竹内先生は奈良は母校の地でありました故御喜びの程察せられます。御知合の方々は、みな停車場へ御送りして居りました。汽車は木津川に沿つて走つて行きます。青葉がくれに行在所の跡を拜しました。當時後醍醐天皇の御心はさんでございました事でせう。拜察するのにも畏れ多い事でありました。龜山驛で山田行に乗りかへまして山田に着いたのは午後六時五分でありました。

▼五月十八日 第六日 (山田―名古屋)

サ……さよする波の音南國の海はやさしい音を立て、我等の旅情をなぐさめた。旅の淡い夢から目さめた私等に此の音はいかになつかしく響いたであらう。

午前四時頃二見の町は未だ明けきらぬ。二見に宿つた旅人は海邊へくく集る。行くく宿から出て加はる人其數百人の人は目的は同じ夫婦岩へさ急ぐのであつた。音無山の海にせまつて踏の盡きた所、その海岸を少しはなれて大小二つの島居がある。二つの岩の間には、注連縄がかかり、大なる岩には鳥井が立つて居る。これが夫婦岩である。海岸に集つた人々は、日の出をいまかゝる平和な海の彼方を見つめる、やがて海上はるかに真紅の太陽は昇りバツと空に

輝いた金箔其の二刹那の光景は實に壯麗であつた。嚴肅であつた。靈光に打たれ靈氣はひし／＼と身にせまつた。海上には金波銀波が流れて美しい極みである。船頭はしきりに船をすゝめる。群青色にすむ伊勢灣はてはなく、沖の漁船は白帆が、かめめの様にひらめく遠くかすみの中に渾美半島を望む此の美しい、景を眼前にしては、誰しもが沖合はるかに漕ぎ出て見たいと希望するのであつた。宿にかへり朝食をなし出發までの數時間或は海邊或は土産をさののへに費しつゝ、午前八時最後の宿に別を惜しんで二見を發した。伊勢の海は段々遠ざかつて、波の音も聞えなくなり、二見名物の夏蜜柑や生薑糖も見えなくなつた。

電車停車場から宇治行の電車にのり、一時間後宇治に下車し驛前の茶店に荷をあげ身仕度をさののへて内宮参拜へ向つた。宇治橋を渡るさ左右に日露戦争記念の大砲がある。このあたり、一面に清い砂が敷つて、前面に清い五十鈴川の流がある。倭姫の傳説がある此五十鈴川に口漱いで身を清める水はよく澄んで居て低の眞砂子も一つ／＼數へられさうである。魚の群は怖れ氣もなく、背を光らせて集つて来る。一歩進む毎に段々薄暗くなつて来る杉の太木は鬱々として苦むした石がある。太古の静な氣分の中にひたつた私等は、神秘的な何物かひし／＼と胸に迫るを覺えた。玉垣御門の前で参拜し中を拜し奉る。宮の作りは外宮と同じく、只内宮は千木が内切である。宮の傍に二十年毎に改築し奉る御敷地や又神米を蔵する所などがある。暫く休息して神樂殿で大々神樂を見る。衣冠正しい俗人が左右に並んで居る。赤い緋の袴をはいた巫女は俗人の吹き鳴らす神樂歌に合せて足取輕く額にさす飾りの花はゆら／＼と舞ふ

優美な舞神らしい管絃のしらべに私等は遠く太古へ誘はれた神樂をおさめて後御札などうけて神境を出た。

十一時半荷物を取り宇治から電車で山田へ行く。山田發十二時五十五分の列車にのり、車中で晝食をなす。松阪や阿漕に晝食の伊勢灣の眺を窓にして龜山に着いたのが午後三時。三時四十五分龜山發の列車に乗り掛斐川や木曾川を渡つて午後五時四十五分名古屋に着いた。驛前の旅館で夕食をなした。商店の装窓に美しい時計や七寶焼が飾られてゐる。電燈の光は隅なく人通りは絶えない。さすがに中京の夜は繁華であつた。

名古屋發九時十分最後の地に名残を惜んで東海道線の列車にのりうつた。名古屋の灯は段々に遠ざかり列車は暗黒の世をひた走る。数日の旅につかれた私等は。心地よい列車のひびきに誘はれて楽しい夢に数日の旅をくりかへした。時々鐵橋の轟々たる音驛夫の呼ぶ聲。それ等に現かへるのみであつた。

▼五月十九日 第七日 晴 (浦和)

夢覺めて見ると汽車は箱根山を通過して居る。朝霧は山の頂をこめて居る。有名相模灣の明媚な風光に元氣は忽ち回復された。横濱で朝食をすませ数多の驛をすぎ、午前七時東京驛に着いた。舊都の木造の大建築に驚いた目又は丸の内石道建築に驚かされた。電車で上野驛に行き十時上野驛發の列車でなつかしい浦和に向つた。見なれた川、森、車窓にうつる眺めは一つとして喜ぶのたれならぬばない。感極まつて歌ひ、或は舞ひ或は笑ふ。此の車中は私等の喜びの情にみだされて居た。わざわざお出迎へ下された諸先生在校の方々を見た一瞬間その時は此の旅行中の最も嬉しい時であつた嗚呼樂し

根川「まあいいこと、あ、美しい」「何て壯大な景色でせう」「夢のやうだ等々車内に一聲に感歎の聲が放たれてゐる中に汽車は遂に大利根の鐵橋を渡つてしまつた。古河間を田を過ぎる頃には道端の山林には赤いつゞじが点々と咲き亂れて田畠の間を抜けて來た眼に變つた趣をあたへた。

お伽話の材料でも澤山秘めて居さうな雀の宮を過ぎ宇都宮に着く此の驛では汽車が元の道へ引き返し初めたので先生のお話を思ひ出したけれどどうしても日光方面に行くやうには思へなかつた。次第に進む中に小高い山からちらほら見え出した。鹿沼驛は鹿沼の集落地だけに野州麻が積んであつた。このあたりから左手に杉並木が立並んで薄暗い老杉の一つ／＼に松平正綱の魂がびそんでゐる様な感かし

日光日光とせはしく驛夫が呼んで居る。荷物をかゝへて下りる用意をした時には是からあゝがれて居た日光の風光に接するのと思ふと形容の出來ぬ一種の緊張を覺えた。下車するとすぐに電車馬返し行に乗り日光の町を眺めた土産等を賣る店が端から端まで言ひたいた程軒を並べ居た。東照宮の傍まで來る大谷川の流が目の下に望まれたので嬉しさの餘り兩手に釣皮を握りしめて二三度振つてしまつた。馬返し途中で大谷川の工事をしてゐたので其處で電車を下り川邊に沿つて馬返しまで歩いた。岸に狂ひ岩に碎けて居る浪は見る人の心もさるく程を降る雨の中にたけりたつてゐた。手拭の腰籠の家中に釣つてゐる鳶で晝食を食へた時には「山海の珍味だつてこの一飯に及ぶまい」と思つた。

一時間あまりで風呂敷包みを背負つて合羽を着た一行はいよ／＼

かつた一週間の旅行。私等の腦裏に鮮に残る西の都のなつかしき印象すべてが幸福であつた旅行を祝して筆を擱きませう。

## 日光旅行記

(本科三年、二年) (講習二年)

五月十三日 第一日 (浦和—中禪寺)

氣おくれのするやうな小雨が音もなく落ちて居る。身じまひを氣にしてくれる母に別れて學校に急いだ。

程もなく校庭に集合し人員検査を終へ停車場へ。やがてホームに出る小島校長先生、齋藤先生、大藪先生、辻村先生、山崎先生のおさしづで車中の人となつた。ゆるやかに動く車窓から半身出してお見送りの先生方や皆様に御挨拶をした時は午前五時四十分。ほつと一息つく頃には汽車は雨に煙る朝の武藏野をひた走りに西北へ向つて居た。

大宮で五六人の學友をあはせると喜に落ちつかぬ胸を抱いて車窓から移り行く自然の平野を眺めたりさては親しき友達と笑ひ興じたり仲々の樂しさ賑はさである。

久喜を過ぎてやゝ進むと向側の線路とこちらの線路とが交つて彼の線路は頭上を通過して居る。之がかれて聞いてゐた東武線の交叉點だなあさうなづかれた。

「ほら栗橋です、靜御前の墓といふのが見えますよほら／＼あそこよ」と先生。「お、見えました／＼」あちよく見えなかつたはれ／＼等と口々に言つてゐる中に構内に入つてしまつた、此處を出ると猪苗代湖水力電氣會社の大電柱がはるかあなたに望まれた。間もなく利

山登を初めた。中禪寺の旅館米屋の迎ひの人に案内されて靜々若葉の間を登つて行く。幸橋を渡つて大谷川の浪を右に見て行くうちに川を横ざる土橋に出た。兩側は岩山が峨々として立つてゐる。嬉しいやうな恐ろしいやうな感に胸を衝かれつゝ一歩々々足は川の中頃に近づく。美しい水色が盛に躍り狂つて絶えず岩に當つてさあつと砕ける。あゝ其の浪の純白さ。こんな純白の美は他に又も見られようか、だん／＼行つて中腹頃にほつと息を吐いて今更ながら下の山々を眺めた。夢か疑はれるばかりに美しく青葉に霞んだ山々の間を紅のつゞじが点綴して居る大谷川の流は長く白く其の間をうねつてゐる。方等般若の兩瀧が高い崖の上から落ちて居た。大きなものではなすが其のスタイルがすう／＼と美しかつた。「もう何もうらない身も荷物になつた」など言つて大分疲れが出て來た時にはあたりには白樺の木が續いてゐる大平に出て居た。

大平の茶屋に荷物を置き何處かの小學校の生徒が立つてゐる間を抜けて華嚴の瀧へ行つた。五郎兵衛の道はでこ／＼の段々が雨にぬれてつる／＼してゐるので實際命がけであつた、ものすごい様な白雲の瀧のそばを通過つてやつとこの事で華嚴の瀧の瀧見茶屋まで來た。ひよいと前を見る生れて始めて見る大自然が展開されてゐた。

壯大な事とは豫期してゐたけれどこんなに雄大な壯美だらうとは思つてゐなかつた。我を忘れて見入つてゐて氣がついた時身体は雨のしぶきでしつ／＼とぬれてゐた。無論瀧のしぶきも交つてゐた。もうこれで事がきまつてしまつた様な氣分になつてでこ／＼道を上つて以前の茶屋の所へ戻つて來た。此處で三十分程休んで中禪寺へ向ふ。

華嚴の瀧の落ち口に差しかけた時留守居の茶目さんから「天氣を視す」の祝電をいたゞき一行の勇氣が百倍した。

瀧を上から眺めて小野湖山の華嚴の瀧の碑を見て間もなく中禪寺湖畔に出た。こゝへ来るまで先づ平和といふ感をあたへられた。

湖上は平に周囲は丸く山にかこまれ麓には旅館等が軒を並べておて殊に向ふ側には男体山がなだらかな体をうつしり落ちつかせて自然と人間の平和な共同生活を守護してある様な気がしたのでつた。朱塗りの橋を渡つて湖畔の並木を行くとき五六町で私達を待つ米屋があつた。やれうれしやと思ふ間もなく再び荷物を置いて中禪寺参拜に出かけた。参拜を終へる湖の波さたはむれる人もあり宿の白犬にからかふ人もある。傍の燈籠を見るに鬼がさも重氣に石燈籠をかついである彫刻がしてあつたので大笑ひした。此處を出て二荒山神社へ向つた。

この時ははや日は男体山の彼方に沈みかけたので嶺の雪やたなびく雲は餘光にかすかに光つてある一旦止んだ雨はまたしてもしづやかに降り出した。神社に参拜して宿る。

賑かな夕飯が終るまで手紙を書く者もあり暮れかゝる湖の景色を眺める者もある。緑側の隙子をさりとて明けて出ようとする者「あゝ消えそうだ」その後の方で言ふ。ふと振り向くミランがまたゝいてゐる。なんざなく山里らしく思はずは、笑んだ。

高欄にもたれて湖上を見入つた水面はぼうとして其の向ふに男体山が黒くおぼるに見える。麓に軒を連れた家々のさとしびか波にうつつてきら／＼と美しい。ゆらめく燈火をじつと見つめてゐるさ流いでも見たいやうな笑つても見たいやうな歌つても見たいやうな様

走つて歩いた。

昨日見たあのなだらかな山が左に見える。大谷の流れが白蛇の様に現れて来た。あの赤い瀧がやつぱり的確さとして咲いてゐる。まはりまはつて下るのか面倒なので近道をする者が多かつた。美しいあたりの景色を眺める暇もなく／＼と下つて昨日休んだ馬返の葛屋まで来た名物の力餅をこゝで求めてすつかり疲れをもどし又此處を出發した。出發の時山で取つた瀧廻り紅葉は見つけられる。さがめられるさいふのでせつかくお土産に思つて若しい思ひをして取つたのをこゝに置いてしまつたのは今思つても口惜しい。いくらか歩くさ今下つて来た山が雲の中に立つてゐる。大谷の流れが狂つたやうに岩にあたつて碎ける。さうして此の勢をいとも／＼續けて居る事が出来るのかさ自然の力の餘りに偉大なのに今更驚かされた十五六町行くさ電車が待つてゐた。

疲れてしまつたので嬉しくつて大急ぎで乗つた。ギシ／＼といつぱい人をつめこんだ電車はそれでも下りだから昨日よりも急な走り方であつた。吊皮につかまつて足は一步もふみ出せない。車の中では目を外の景色に投ずるより他は何もなかつた。勝れた景を常にいたゞいてゐる土地の家としては餘りに物足りない店の前を通つたりして愈々日光ホテルの前で電車を捨てた。老杉の鬱蒼としてトンネルをなす間を二行はやつさゆつたりした氣分で歩いた。でも随分足はくたびれてゐた。

黒い程茂つた老杉は神秘と言ふ無形の存在をかりに此の色であらばしたやうな何とも云ひ得ない美しさを持つてゐた。其の神秘に包まれた幾多の諸廟、それは徳川時代の美術の縮圖である。古當時の

々な感情が一ぱいになる。一日の疲れを風呂に流し縮をつけたやうに並べられた床に入つて何時までも友を語つてゐた。シャシャツと寄せる浪音を聞きながら何時か楽しい夢を結んだ。」

五月十四日 第二日 (中禪寺—日光—浦和)

お天氣だ／＼といふ聲に目が覺めた。時計はちやうど四時二十五分。嚴かに湖が鳴る。障子を明けて縁に出れば黒髪山が湖を被ふ様に目の前に迫つて居る。朝日の光が山の間から流れ出て水の面が金色に光る。遠い白根山はまだ眠つてゐるらしい。思ひがけない此の晴天に一同はこんなに喜んだらう。昨夜のあの風さうでなくさも旅の悲しさはあるものを、皆口には出されど心のどこかにわびしさを感じたであらう。目覺めて見れば此の晴天、天の助けが、嬉しさに胸がなぐる。凍るやうな冷たい中禪寺湖から取つた水で顔を洗つた時、昨夜の疲れはすつかり去つた。朝飯までにはまだ時間あつたので散歩がてら買物に出る者座敷で火鉢を圍んでお話を花を咲かせる者、旅のあしたの楽しさにざはし。

あれ／＼舟が出た。湖を七八人の學生をのせて小舟が走る。繪のやうな湖上の景。あの舟はこゝまで行くのだらう。六時に朝食をする。刻一刻と此の地を去る時が近づく。もう一度前を眺めた。やつぱり山は聳えてゐる。湖は鳴いてゐる。さうして山の麓の白樺の木は寒さうに立つてゐる。午前七時一行は米屋の前に整列した。旅の第二日目が始まるのである。

美しい土地を去る残りをさの裏にもやがて目の前に開かれる偉大な日光諸廟の想像に足は自然と進むのであつた昨日登つた。山を今日ば／＼／＼下るのである。登るのに比べて割合に樂なのでみんな

我國の代表地であるかも知れない其の昔徳川十五代の太平の基を定めた家康公が此處に張り建物に天下の一藝二術に傑出した名臣が心血をこらしてその上天下の財産の傾けて出来たものそれは單に「威力に供した犠牲を見るに過ぎない」といへばそれまでの事だがよくもこれ程までになした徳川氏の威力は又威大なものではないだらうか、同じく天下を左右した英傑でありながらあの鎌倉の苦むす朝頼の奥津城と比べて二人の死後の運命のあまりに隔たりの大なるに感じたでも日光廟が華麗であればある程、私は家康公が俗びてゐる方のやうに思はれて仕方がない。

第一に輪王寺を見る。前の芝生の緑の上に八重櫻が散つてゐる、今まではあの嚴しい杉の色なごばかり目にしてゐた私等は今此のやはらかい感じのする櫻の花びらを見た時ほんさうになつたかしく嬉しかつた。傍に金剛櫻と書いた立札があつた。説明者の早いものには開口してしまふ。舊稱は三佛堂、一百有餘年の古刹で天海僧正を中興の祖とする。承應二年後水尾天皇第二の皇子一品守澄法親王の座主となられてから代々親王が繼承選ばされ、天台二宗を管領し給ひ門跡と稱せられるさか、左に行けば、後水尾天皇御宸筆なる東照大権現さいふ額がかゝつてゐる。元和三年黒田長政の寄進されたものそれから五重塔仁王門を見て御殿に至る長押の上に松に猿猴三態の彫刻がある。飛簾の匠の作ださか。妙技神に入る。東照宮の建物二十三悉く色彩を施してゐる中に只是のみが素木造りである。次に南蠻鐵の燈籠や飛越の獅子に興を催しつゝ、愈彼の陽明門である。實に壯絶美絶！正面に後陽成天皇の宸筆金字の扁額を掲ぐ。陽明門を唱へるの内裏の門名であるのを特に朝廷から此の名を賜つたさか

天井の昇龍降龍の墨繪は探幽の筆に係る實に生物活躍の妙只驚くばかりである。前面の兩側には隨身を配し裏面の兩側には金色の狛狗を据ゑ天井には天人が畫かれてある。左右の廻廊には獅子鳳凰孔雀金鷄等の鳥獸花卉奇を盡し巧を極め彩華眩耀、金碧映射輪奐の美を極めて居る日暮し門の名の起るのも無理のない事である。それからいよ／＼東照宮を拜す。いふまでもなく家康公が祀られてある。

元和二年二代將軍秀忠公が父家康公の廟を此處に遷し工事は元和二年十月より同三年三月に至つて竣成したところが寛永元年になつて豪華を好む家光公が之を改造し同十三年に至つて落成したのか今の廟宇である。あゝその華かさ、正面の大廣間は拜殿で其の右が將軍着席の間で左は輪王寺宮御着席の間である。天井には天人と雲とが畫かれ襖にはいろ／＼な繪畫がある。欄間には三十六歌仙の額が掲げられてある、あまり華やかなので何が何やらさつぱり分ちなかつた奥の院に詣る、途中廻廊の潜り門にある有名な左甚五郎の作の眠り猫がある。あまり小さい小さいいはれてゐたので今日の前に見た時は左程小さいと思はれなかつた。

坂下門を出て奥の院に行く、此の時にもう足は疲れるしお腹はすくしあへ／＼やつと二百七もある石段を昇つた、石段の脇の石欄は悉く彫り抜きになつてゐる。よくこんな大きな石を持つて來たものだと思ふもの皆感心する。

脇を見ても上を見ても老杉が天を被うてゐて夏はどんなに涼しいだらうと思はれた。石段の半頃まで來て草臥れた餘り「こんな思をして家康の墓など見るのは口惜しい」など、不平を言ひ出した者もあつたがやつぱり傘を杖にして昇つて來る。二百七の石段をやつと

を只恨めしく思はせた。諸廟を拜し終つた時はもう何が何やらさつぱり分からなく只緑の杉と赤く青い建築の色それのみであつた。

日光諸廟は神祕の器に入つた寶物である。其の中には何の不安もない。徳川時代の泰平そのものが含まれてゐる。休息所で晝食をすませてからは自由に町へ出て、豫定の時間に停車場に着くやうにこのお話があつた。「さらば日光の風物も永久に平和なれ」

三時三十五分の日光發に乗つて我等一同は楽しい、二日の旅の歸途に着いたのである。日光の山々はだん／＼遠くなつて行く。あれ／＼虹が出た。藤紫の雲の間に、車中に電燈の着いたもの知らないでみんな歌ふ。いたづらをばじめる宇都宮、古河を経て汽車は利根川の鐵橋へかゝつた。赫々たる夕陽が洋々たる坂東太郎の面に照つてゐる様何といつてよいから分らない。

緑の波の上を車は走る／＼冷い氣特よい風が車中に流れわたつて栗橋に着いた時は時分はもう皆すつかり元氣づいてしまつた。苗代の稻が一分程のびてゐる。夢の上を緑色の風が吹く魚取に行つたらしい子供が眞黒い足して家路に歸へる。老人が日も照らす雨も降らないのに傘をさして畦路を通る紅、紫に咲く蓮華の畑がすつ／＼と目をかすめる。

向ふの森はもう夜のさばりに蔽はれて茫々眠つてゐる、近くの畑は夕日に照らされて金色にきら／＼と光つてゐる。青桐の花が咲いてゐるので、床しい香がほのかに匂ふ。

夢の様に楽しい二日の旅を終へた一同は酔つた様になつて車に揺られてゐる中なつかしい浦和へ着いてしまつた。お優しい先生方行かなかつた同級生一年の方々に迎へられてプラットホームに立つた時

の思ひで昇り終るそこそこ唐金の鳥居がある。此の傍に銅の倉があつて此の中へは家康公のお召物を入れて置くのださうである。二百八十二年以來一度も改築しないさか。奥院の寶塔は金か三分で銅が七分で出來てゐて、元和三年久能山からこゝへ移したのだと説明してゐた。

それから又くたびれ足を引づり／＼藥師堂に行く、こゝでまた有名な鳴龍を見た長さが八間二尺で巾が三間の大龍の頭の下で手を打つと鈴のやうな音がコロ／＼とする、此の處にもつと長く居たかつたが時間に迫られて急いでこゝを去り、東に東照宮の社殿が高く輝き道の兩側は老杉が鬱然として實に幽邃な道を二町ばかり行つて二荒山神社を拜す。大同三年勝道上人の請勸によつて大己貴命が祀られた。明治維新以來二荒山神社と號し、國幣神社である。此處の康門の傍に氣味悪い名の「化燈籠」がある。何者の所爲であるか幾つかの刀痕が歴々として殘つてゐる。その昔武士が夜更けてこゝを通るさ此の石燈籠が恰も化物の様に見えるので斬りつけたのださういふ。今でも此の燈籠に斬掛る様が目に浮んで何だか怪談でも聞かやうであつた。

今度は大猷院を拜す。三代將軍家光公が祀られてゐる。殿内は疊敷が六十三、中央に金鍍金の天蓋を吊る、その左には朝鮮から獻じたといふ瑛瑁の釣燈籠及び樂器などがある。小殿の内外は各部押箔で金碧燦然全く目のまばゆいやうであつた。皇嘉門は外目は一丈見たりきであつた。龍宮造りで支那風の建築、今まで見た建築物を考へて見てこれは何となくおどやかな品のある建物だと思つた。

日光諸廟の美それは美術に對して情ない程見る目をもたない自分

何といつてよい涙が出てしまつた。嗚呼樂し／＼二日の旅は我等の永久に忘れ得ぬ、印象となつたのである。此の大なる印象の中には、知識も道徳も宗教も審美もその他あらゆるものが入つてゐるだらう。

是等のものよ願はくば永久に私等の指導者なり慰安者となつて下さい。

## 稻毛旅行記

講一 前川 貞子

汽笛一聲汽車は動き出しぬ。御見送り下さる川口先生及び小笠原先生の御姿が次第に見えずなりぬ。研學旅行といふ希望に燃ゆる心を抱いて本科一年講習一年は吉田先生、野口先生、吉村先生、園部先生に引率せられて稻毛にさ向へり。しばし揺られ行く程にうれしや太陽は雲を破りて顔を出しぬ皆々大聲をあげ車中歡喜みなぎりぬ旅行といふうれしさにこれ程早く出立せし我等にも増して如に鐵取る農人の元氣よき私はかくして朝早くより夕遅くまでを働き暮す人達を今汽車の窓より見たるなりあゝ貴きはかくして生れいつる穀類にはあらざるか。

やがて汽車は川口を過ぎたり渡せる鐵橋の間より荒川を眺むれば青き水は輝きて小舟五六艘浮べり。田畑の景色のよかなるにうつゝりさせる間に汽車は赤羽を過ぎゆけりこの時です／＼空は晴れ渡りの。王子停車場につきたるに愛らしき小學生の今しも旅行の途にのぼらんさせるらしく皆々お辨當を背負ひたるに遇ふ。かひ／＼しき出立に一入愛らし。

汽車は田端を過ぎ日暮里を通りてついに上野驛に着す。電車自動車の走る音がまびすしその間を通りぬけつゝ、兩國へさ道なをいそがり。流れる汗を拭ひつゝ、隅田川にかゝれる美しき橋にさしかゝりぬこれぞ川開きして名高き兩國橋にてありき。

橋の左側を歩みつゝ、眺むるに清きゆく小舟遠近に見ゆ。おだやかにゆらぐ小波あなたに見ゆる家々を配合して心ゆくばかり美し、音もなく吹きくるそよ風うつさるる我が頬をなでゆけり橋を渡りてかへり見れば一線の黒煙を出せる蒸気船サツサ波をけたてゝ橋の下をくゞり行けり。しばらく歩む程に兩國停車場に來りぬ待つ間程なく汽車は我等が目の前に止れり、我等は一勢にこの高架鐵道に乗りうつりぬ。窓の前にあらはれる家々の屋根手帳取り出して筆記をつゝくるに汽車は錦糸町を過ぎて天神もて名高き龜井戸をうしろにす。窓を通して見ゆる中川の景見る物事にたゞ胸のみおどる。平井を過ぎし汽車は右に青々せざる、沼をみせて小岩をすぎ市川を過ぐ。所々に梨畑ありて白き花今を盛りと咲く。

船橋停車場を過ぎたるにやがて無線電信局は見えたり、高く立てる主塔一本それを取りかこめる十八本の副塔皆々窓より望み見て車中動揺す、その騒ぎの間に汽車は容赦なく進みて騎兵旅團ありさきく津田沼を過ぐ、一の兵營見ゆ兵士今しも營庭に体操せりいさめづらし。

「海見ゆ」と叫ぶ聲に一度静まりたる車中又も動揺す、木の葉の茂みより隠見せる梅白き帆影夢の間に汽車は暮張を過ぎたり稻毛々々さいふ驛夫の聲に先を争ひて汽車を下り停車場前に集合直に海岸へその間凡そ十町いひ知れぬ喜びの心を抱いて……やがて白き帆影

見えたり。

休憩所にて書簡をすまし足袋にて海に入る。サク／＼と黒き砂を踏みてあちらを掘りまたこちらを掘る、蛤蜊、蛤蜊夢中にて掘りたり一心になつて掘り續くる我が前をちよろ／＼と蟹の逃げゆく様も面白く又愛らし。海のあなたを眺むるに潮干て帆影は遠く動かんともせず、小學校の生徒らしく先生々々といひつゝ、掘りし貝を持ち來りてはほこりげに女先生に見せ居たるも愛らしかりき。青袴紫の袴等様々の色入り交りて歸り行くも美し。疲れをおぼゆる程に休憩所にゆきて憩へり、三十分程休みたるに皆々歸路の仕度に取りかゝれり、休憩所前に集合名残惜しくも先頭は歩み出しぬ。刻々寄せくる潮潮我等を送るが如く覺ゆ。

おたり落つる雫オヤ雨が、雨に氣を取られたる暇に停車場前に來りき、二十分ばかり待ちて車中の人となる。雨は次第に收め歸路なれども少しも元氣失はれたる様子見えす寫生帳に向ひて鉛筆動かす人あり、手帳に鉛筆走らす人あり。汽車の走りも早き様な氣して兩國停車場には着きたり。掘りきたりし貝を重さうにかゝえて上野まで徒歩、上野驛にて流れし汗を拭ひ間もなく汽車に乗り移りぬ。夕陽西に没して早や電燈さへつきたり、鶯谷に咲く白き花風にゆらぐ様いづれも我等を送るが如く覺ゆ、六時十六分浦和着上級の方の御迎へをうけて學校へ歸りたり、あゝかくして我等の最も樂しき最もうれしき研學旅行も此處に芽出度終りをづけぬ。

三日月の光一つを光にて武蔵野の原の日は暮れにけり

佐々木信綱



## 學校記事

### 先生方の御移動

關田貢先生 御親切に御指導下さいましたが、この三月秋田高等女學校へ御轉任なされました。

高田六郎先生 先生には四月上旬浦和高等女學校へ御榮轉なされました。御轉任とはいへ同じ浦和のうちで御座いますから時々御目にもかゝり又色々御指導を願はれる事とせめてもの心慰みにて居ります。

寺尾きく先生 此四月女子高等師範學校へ御榮轉遊ばされました。先生の益々御清福ならん事を御祈りいたします。

中原英壽先生 この四月附屬小學校から校長先生となられて、南埼玉郡岩槻小學校へ御榮轉遊ばされました。

學校記事

渡部スゲ先生 この四月裁縫の先生として御迎へ

たし親切な先生としておなつかしみ申したのに九月一日御病氣の爲に御逝去なされました。御やさしい御姿が今も目について悲しう御座います。

辻村みちよ先生 數學を御受持ち下さいましたが、この九月に北海道大學へ御うつりなさいました。大藪虎亮先生 國語漢文を御担任なされて懇に御教へ下つた先生には、この八月金澤第四高等學校教授に御榮轉遊ばされました。

木下ふさを先生 國語漢文を御受持ちなされて御親切に御教へ下さつたおやさしい先生には此の九月東京帝國大學文科に聴講生として御入學遊ばされました。

霜田利平先生 圖書手工を御懇に御教へ下さいました先生にはこの十二月御退職なされました東京へ御出でなさるやうに承りました先生の御清福を御祈りいたします。

市原正三先生 高田先生の御後任としてこの四月御出で下され數學物理化學を御教へ下さいます。

吉村勝敏先生 この四月御出で下さいまして博物地

理を御教へ下さいます。

小笠原文次郎先生 關田先生の御後任としてこの四月お迎へいたしました御熱心に體操を御教へ下さいます。

細田正平先生 この四月附屬小學校の先生となられ可愛らしい兒童を御導き下さいます。

杉本雄太郎先生 この四月本校にお出で下され専ら事務を御とりになられます。

石井芦先生 先生にはかつて本校の先生として御教へを賜はつた事も御座いましたしばらく御退職のところがこの九月木下先生の御後任として再び御迎へする事が出来ましておなつかしく存じます。

海老澤悦先生 此の十月裁縫の先生として御迎へいたしました、裁縫手工を御熱心に御教へ下さいます又舍監として寄宿舎の御世話もして頂きます。

木下春雄先生 大藪先生の御後任としてこの十月御迎へいたしました、國語漢文を御教へ下さいます。

楡木ナツ先生 この十一月御迎へいたしました數學を御受持ちなされ併せて舍監として寄宿舎の御世話をして頂きます。

話をして頂きます。

式 會

大正九年 午前九時より講堂に於て新年拜賀式舉行。

一月八日 第三學期始業式舉行授業開始。

一月廿日 午後より平和條約發布に關し小島學校長並に川口教諭の訓話あり

二月十一日 紀元節祝賀式を講堂に行ふ。式後正午より校友會主催祝賀會を食堂に開く。

二月廿五日 午前八時より菅公講演會開催、和田史料編纂官、小島學校長、大藪教諭の講演あり。

三月一日 關田教諭の告別式を行ふ。

三月二十日 午後一時より大正八年度内に於ける死亡生徒弔祭式を講堂に行ふ。

三月二十四日 午後一時より体操教室に於て卒業式を行ふ、午後六時より校友會主催卒業生送別會を食堂に開く。

四月八日 第一學期始業式舉行、並びに市原、吉村小笠原各教諭、細田訓導、杉本書記の新任式を行ふ。

九月二十八日 石井教師の新任式を行ふ。

十月二日 第三回埼玉縣女教師會本校主催の下に開催、十月四日終了。

十月十三日 戊申詔書捧讀式舉行、海老澤教諭新任式を行ふ。

十月十五日 皇后陛下 大宮町氷川神社御參拜の爲行啓あらせらる。職員生徒一同大宮町にて奉迎し奉る。

十月二十三日 木下教諭の新任式を行ふ。

十月二十四日 運動會、午前八時より附屬小學校校庭にて舉行盛會裡に午後三時半終る。

十月三十日 教育勅語下賜三十年記念日につき、記念式を講堂にて舉ぐ、小島學校長、川口、吉田教諭の講話あり、式後東京高等女子師範學校教授下田次郎先生の講演あり。

十月三十一日 天長節祝日、祝賀式を講堂に舉行す午後五時半より校友會主催、天長節祝賀會を寄宿舎食堂に開く。

十一月一日 明治神宮御鎮座式につき遙拜式を行ふ小島學校長の講話あり。

ふ。午後一時より新入學生の入學式を舉ぐ。

四月九日 高田、寺尾兩教諭、中原訓導の告別式を行ふ。

四月十四日 渡邊教師の新任式を行ふ。

四月十五日 開校記念日、記念式を行ふ。式後校友會主催小談話會を開く。

六月十日 午後より時に関する講話會を開き、小島學校長、川口、市原各教諭の講話あり。

六月十二日 午後より校友會主催第一回生徒談話會を開く。

六月二十五日 皇后陛下御誕辰祝賀式を講堂に舉行す。式後校友會主催祝賀會を寄宿舎食堂に開く。

七月十四日 放課後、縣屬森山伊之吉氏の國勢調査に關する講話あり、

七月十八日 國民新聞者菱沼右一氏の尼港事件に關する講演あり。

學校記事

十一月二日 卒業生講習を開く、十一月二十日終る  
十一月二十日 午後一時より校友會主催音楽部大會  
を開く、東京音楽學校より立松ふさ子氏、竹井は  
る子氏來浦並に浦和高等女學校諏訪教諭協賛、  
盛況裡に午後四時半閉會。

十一月二十二日 楡木教諭の新任式を行ふ。  
十二月四日 校友會主催第二回生徒談話會を開く。  
十二月十五日 霜田教諭の告別式を行ふ。

旅行

四月十三日 本科四年、二年、三年、講習科二年生  
徒、小島學校長、市原、竹内、霜田、辻村、小笠  
原、田北、山崎各職員引率の下に川越に遠足、喜  
多院、東照宮、計量展覽會、巡覽して午後五時歸  
校。本科二年、一年、講習科一年生徒、齋藤、大藪  
吉村、園部、野口、木下教諭引率の下に安行村に  
遠足午後四時半歸校。

五月十二日 本科四年、本科二年生徒、市原、竹  
内、霜田教諭引率の下に關西旅行に出發、同十九  
日無事歸校。

(七四)

五月十三日 本科三年、同二年、講習二年生徒、齋  
藤、大藪、辻村、山崎教諭引率の下に日光方面旅  
行の途に上る、同十四日歸校。

五月十八日 本科一年、講習一年生徒、吉田、吉村  
園部、野口教諭引率の下に稻毛に赴き、即日歸校  
十一月九日 職員生徒一同上京、明治神宮參拜。帝  
國美術院美術展覽會參觀、即日歸校。

十一月十三日 本科三年生徒、齋藤、吉村兩教諭の  
引率の下に秩父見學旅行に出發、翌十四日(日曜  
日)歸校。

音楽部報

我が音楽部に於きましては園部先生の御熱心なる  
御指導により益々發展しつつある事は誠に喜ばしい  
事であります。毎年一回づつの音楽會に、非常な努  
力と熱力を以つて平素から練習して居つた技術を  
發表致します。大正九年度に於きましては十一月二  
十日に此の會が催されました、其のプログラムは左  
の通りでございます。

第一會の辭

- 二 上高音獨唱……………立松ふさ子女史  
歌劇「樺姫」中の長恨(伊語)……………グエルテイ氏作曲  
三 ビアノ獨彈……………竹井はる子女史  
狂想のロンド……………ベートーヴェン氏作曲  
四 上高音獨唱……………立松ふさ子女史  
子守歌……………ブラームス氏作曲  
子守歌……………クレチヤニノフ氏作曲  
五 ビアノ獨彈……………竹井はる子女史  
即興曲……………シヨパン氏作曲  
六 合 唱……………講習科一年全体  
木の葉……………月下懷郷  
七 合 唱……………附屬小學校一年生  
ホチミタマ  
私の學校  
八 合 唱……………本科一年全体  
達磨さん  
海樓眺望……………グエルテイ氏作曲  
九 合 唱……………附屬小學校尋常科二年生  
赤さんば  
一〇 獨 唱……………本科二年 松澤 ツヤ  
親睦會  
一一 合 唱……………附屬小學校尋常科三年生  
學校記事

- 一 一 オルガン獨奏……………本科二年 熊谷 信  
ワルツ  
一三 合 唱……………本科二年全体  
革 狩……………獨國民謡  
一四 合 唱……………附屬小學校尋常科四年生  
燈 台  
山 彦  
一五 合 唱……………附屬小學校高等科一二年生  
濱千鳥  
一六 合 唱……………本科四年 奥平 倫子  
唱……………本科三年 中島 倫子  
……………持田 鈴子  
……………持田 鈴子  
一七 合 唱……………本科二年全体  
恩愛の歌……………メンデルゾーン氏作曲  
他郷の月  
一八 合 唱……………附屬小學校尋常科五年生女  
山のあなた  
一九 オルガン獨奏……………本年四年 中村 志津  
ウエルカム、マイティ キング……………マリー氏作曲  
二〇 合 唱……………本科三年全体  
舊 都……………本科四年 鈴木 竹子  
別 離……………アプト氏作曲  
學校記事

(七五)

學校記事

- 二二 合唱 (三部).....本科三年全体  
静夜讀書 アプト氏作曲  
二三 合唱.....附屬小學校尋常科六年生  
白虎隊  
兒島高德  
二四 ビアノ獨彈.....本科四年 門多さき江  
ザ・ゴールデン・サエティンク マリイ氏作曲  
二五 合唱 (二部).....本科二年全体  
夜の御社 クロイツアー氏作曲  
二六 獨唱.....本科四年 岡田 ふく  
たゆたふ小舟 ナイト氏作  
二七 合唱 (二部).....本科四年學生  
秋思 メンデルゾーン氏作曲  
二八 獨唱.....本科四年 鈴木 竹子  
ニナ ヘルゴローゼ氏作曲  
二九 合唱.....附屬小學校尋常科五年男  
護國の歌  
三〇 合唱 (二部).....本科四年 岡田 ふく  
旅の夜 ルビンスタイン氏作曲  
三一 合唱 (三部).....本科四年 全体  
.....本科二年 本科三年有志  
晚鐘  
三二 高音獨唱.....諏訪光子氏  
モツアルト氏作曲  
ファイガロ

(七六)

三三 閉會の辭  
此のプログラムによりまして少しばかり感想を申し上げます。

第一部に御紹介致しました通り園部先生の非常なお骨折によりまして、一流の音楽家立松竹井兩女史の演奏を拜聴致す事の出来ましたのは私等一同に取りまして喜ばしい次第でございます。私等は去年に勝る良い影響を受けた様に思はれます。

御覽の通り生徒演奏の合間に附屬兒童の無邪氣な唱歌が入つて其の興を深くしました。

尋一の「ボチと玉」、「私の學校」無邪氣な兒童の無邪氣な唱歌には聴衆も笑はれました。四年の「燈臺」元氣な男兒にふさはしい歌でございました。三人の小人數でしたが、少しもおくせず唱つた事には感心致しました。高一采澤シンさんの「濱千鳥」此の兒の歌ひ方は聲の出し方と云ひ其の音程と云ひ本校生徒にも劣らぬ位と思はれましたほんとに磨けば上達する聲だと思ひます。

本校生徒本四門多さんのピアノ獨彈には今少し練習がはしうございました。

終りました。

終りに、諏訪光子先生の高音獨唱「ファイガロ」「夜の調べ」には今まで未熟な生徒のを聞いて居りましたあげく、先生の美しいお聲を聞いてほんとにうつとりしてしまひました。

此の盛大な音楽會を催しましたのに七拾七圓六拾六錢を費しました。此の僅かの費用で私等一同益した事にはどんなに多かつたでせう。此れ皆諸先生方のお骨折による事と深く感謝致して居ります。

大正八年度校友會費決算

収入

|            |            |
|------------|------------|
| 一金百四拾八圓拾錢  | 前年度越       |
| 一金四百六拾圓九拾錢 | 會費         |
| 一金參拾六圓     | 職員寄附       |
| 一金四拾四圓拾五錢  | 寄附         |
| 一金五圓四拾四錢   | 預金         |
| 一金拾四圓四拾九錢  | 金利         |
| 計金七百九圓八錢   | 生産品及不用品賣拂代 |

支出

|            |     |
|------------|-----|
| 一金貳拾八圓七拾五錢 | 講演部 |
|------------|-----|

(七七)

學校記事

本四中村さん二部熊谷さんのオルガン獨奏、何れも立派なお出来でした。獨唱二年の松澤さんの「親睦會」非常に良いお聲でしたが、欲を云へば今少し大きなお聲がほしうございました。場所馴れぬ爲にもございませうが。

四年の岡田さんの「たゆたふ小舟」練習をおそく初めなさつたのにもかゝはらずよくお出来になりました。本四鈴木竹子さんの獨唱「別離」「ニナ」何れもほんとに御立派なお出来になりました。

合唱の主なもの「恩愛の歌」「旅の夜」何れも此の様な事は今年初めてしたとしては可成よく出来たと思ひました。

本二の「他郷の月」ほんとによい曲でしたが、おし事にはソプラノの方が少し上つた様に思はれました。本三の「舊都」「静夜の讀書」二部の「夜の御社」何れも其の特殊な處がよく現はれて居りました。

四年の「秋想」常に心配しつつ練習して居りましたが、當日は豫想以外の上出来で嬉しゅうございました。「晚鐘」練習の時は何時もよく出来まして安心して居りましたのかゝはらず、當日は以外の失敗に

一金五拾壹圓八拾六錢  
一金七圓九錢  
一金拾四圓拾錢  
一金六圓八拾參錢  
一金百八拾七圓貳拾錢五厘  
一金百九拾四圓八拾五錢  
一金貳百拾七圓貳拾九錢五厘  
一金貳拾九錢  
計金七百九圓八錢

音 樂 部  
圖 藝 部  
テ ニ ス 部  
ビ ン ボ ン 部  
雜 技 部  
雜 誌 部  
庶 務 部  
整 年 度 計 部  
整 年 度 越 高 部

一金參拾四圓  
一金百貳圓參拾錢  
一金拾五圓七拾五錢  
一金百五拾壹圓六拾錢  
一金貳百四拾圓四錢  
計金八百四拾貳圓六拾錢

圖 藝 部  
テ ニ ス 部  
ビ ン ボ ン 部  
雜 技 部  
雜 誌 部  
庶 務 部  
整 年 度 計 部

大正九年度校友會費豫算

收 入

一金七百七拾四圓四拾錢  
一金六拾圓  
一參圓  
一金五圓  
一金貳拾九錢  
計金八百四拾貳圓六拾九錢

支 出

一金六拾圓  
一金參拾六圓  
一金七拾壹圓  
一金百參拾貳圓

會 員 寄 附 費  
職 員 利 子  
預 金 利 子  
生 產 物 賣 拂 代  
前 年 度 越 高  
講 演 部  
技 藝 部  
音 樂 部  
雜 誌 部

大正九年度卒業生及修了生ヨリ運動會要具トシテ  
左記ノ品ヲ寄付セラレタリ  
一、紅白柱 五十本  
一、唐松柱 五十本  
一、段 簀 三十三枚

大田垣蓮月  
宿かきぬ人のつらさを情けにて朧月夜の花の下ふし  
はら／＼とおつる木の葉にまじり來て栗のみひかり土に聲あり  
山里は松の聲のみきゝなれて風ふかぬ日はさびしかりけり  
冬畑の大根のくきに霜さえて朝戸出さむしをかざきの里  
朝風に露さちりくる一聲はかたる端山のやまほさゝぎす

急 告 (會費追徴ノ件)

一金拾圓也、從來會費五圓(卒業後十五ヶ年間ノ會報代)ナリシヲ大正九年十月二日總會ニ於テ拾圓ト改正セラレシ爲ナホ五圓追徴ス

一、數年來ノ物價騰貴ノ爲會報代ノ騰貴

一、會ノ事業擴張ノ爲、殊ニ表彰ニ關スル件

從來ノ五ヶ年勤續表彰ヲ廢シ、七年、十年、十五年トシ十五年以上ハ五ヶ年毎ニ表彰スルコトニ改正シタル爲、向後毎年右三種以上ノ被表彰者連續ス、故ニ表彰ニ關スル費用一時ニ増加シナホ連續ス

右ノ理由ニ基キ十月二日總會ニ決議サレシモノニ候ヘバ、從來ノ規則ニヨリ既ニ御完納(五圓)ノ方モ追徴致候ニ付十分御了解ノ上御納入下サレ度右急告仕候、ナホ集金方法其他會計事項ニ就テハ本文記事御參照下サレ度候

同窓會員諸姉御中

同 窓 會 幹 事



## 同窓會記事

### 同窓會幹事

大正九年三月廿二日午後四時から新に出来上がった習字圖書教室で新卒業生の入會懇談會を開きました。新入會員は總計で九拾五名でこれを舊會員の八百六十四名に加へますと合計で九百五十九名の會員となりました。この日には會長の小島先生から顧問の川口、齋藤、寺尾の三名の先生にも御出席下さいまして種々御話がありました。それに幹事からは念入れに會の旨趣を説明いたしまして、新會員一同も十分本會に對する理解を得られて五時過に會を閉じました。

五月廿九日母校の圖書室で幹事會を開いて役員の改正やら夏期休業中の講習のことについて協議いたしました。それに本年も縣下の女教師會を催開せらるゝ様にと母校に希望申し述べました。

同窓會記事

六月一日役員會を開きまして、講習會開催について詳細な相談いたしました。即ち開會期日科目講師などに關係したことを定めました。なほ會員の希望によつては見學旅行もしようといふ相談も纏りました。それに女教師會は十月になつて二日三日の土曜日に開く様な豫定もつきまつたので女教師會を期しての同窓會總會勤續者表彰といふこともきまりました。

六月十四日幹事は講習會準備のために集つてまづ時間割を作つて通知書に付添へて印刷する様いたしました。印刷を急がせていよいよ十七日は皆様の御手許へ發送いたしましたわけです。

七月十二日、講習會出席者の豫定がつきましたので講習の場所や會員の宿泊のことそれに幹事の役割分担などを定めました。

八月二日限が進んで明日から開講の運となつたので、萬事不都合ない様にと幹事一同は休暇中でがらみの母校舎に寄り合ひまして受講者の番號札を作るやら宿泊の場所作りやらで大騒ぎしました。何しろ休み中に寄宿舍の修繕をするので宿泊所も作法室と

裁縫室とに宛てたのでここに電燈の設備から蚊帳をつる支度からするので、そうかうしてゐる時に明日から講習される一戸先生は下見分だというて學校へこられました。

八月二日第一部受講者七十七名、第二部受講者四十五名、計百貳拾貳名内宿泊者七十九名といふ盛況で第一部は園部先生の音楽と一戸先生のお料理調理とで午前の八時から午後の三時迄第二部は園部先生の音楽と川口先生の歴史とでこれも亦午後の三時まで先生も講習員も熱心に一日を過しました、第二日第三日と送つて第四日目の八月五日には第一部の方では二戸先生のお料理調理を了へて檜崎先生の兒童心理に關する講習を受けましたこの日には客員の先生方も数名御聴講なさいました午後からは同窓會の臨時小會を開きました會長先生の御話やお互の談話に時を過しました六日この日には第一部の講習は終了の日です百四名終了者の總代として矢島あいさんが證書をお受けになり御挨拶がありました。

八月七日兼ねて計畫いたしました見學旅行隊は組立てが出来まして、早朝成田を経由して犬吠岬の燈

臺を見る目的で出立いたしました、總勢二十三人成澤幹事と田北先生とで引率するといふことになり一夜海岸に泊ることを一行は大よろこびしてをりました、この旅行も無事に終り、一方第二部の歴史も八日に四十三名終了となつたのでこれで講習の方も終りを告げたことになりました。

九月十四日役員會を開いて表彰のこと總會のことを相談しました、表彰を受けられる方は本年は十年十四名、五年五十三名の多數の方で御祝の品も一同が大に奮發して考へて注文にとりかかりました總會の議事としては表彰者の勤続年限について相談するといふことでした。

十月三日第三回縣下女教師會の第二日目では前回の第一回より二回、三回と進歩して來ました、本縣下に於ける女教員の元氣をこゝに示すものも多々ありました同窓會ではこの席上をかりて總會を開きました、表彰の年限のことこれは大体現今までの五年は廢し七年、十年、十五年として後五年ごとに表彰すること、改めました但し從來五年の表彰を受けたものは七年は受けないもの又十五年を經過してま

だ表彰を受けなかつたものは明年までめて表彰すること、定めました、會費は從來一年壹圓づゝ入會の年から五年に納入するのですが、改めて一年に貳圓づゝとして五ヶ年間に納入する様に決定いたしました、これは入會後五年を經過して完納になつたものも現に五年以内のもので前に五圓の機定められてあつたときから納め始めたものも皆一人拾圓だけづゝは出金する様定めました、支部のことですがまだ設立のない郡では出來るだけ早くつくることゝいふことで會を開き夜は在校生徒から會員一同は歡迎されまして寄宿舎の食堂で一夜たのしく過しましたもとの先生の高橋謙次郎先生や吉村(改姓波多野)はま先生も來會でございまして昔なつかしくも思はれました。

## 會員ノ皆様へ御願

會計係より

去る十月二日の同窓會總會の折に會則中二三箇所の變更がありました。その中會計に關係いたしましたのは從來五圓で皆納になりましたこの會費は卒業後向十五ヶ年間の雜誌代にあてゝありましたが、數年來

の物價騰貴のため雜誌代の騰貴並に年を追て會の事業も盛になつてまゐりました結果、會費の不足を生じましたので會員協議の上會費を拾圓といたしました次第でございます、總會に御出席なさらなかつた方々には特に御承知置きを願ひます。次に會費拂込み方法につきまして一言申上て置きます、從來集金郵便を發送いたすのは年末のことになつて居りますが會計係の手少なのため一學期に學期の二期に分けて取扱ひたいと思ひます、それも御承知置き下さい、もし集金にまゐりました節御都合がおわるいければ十日以内の中に何日に集金にくるやう御命じ下さつてよろしいのでございます。又其の節支拂を拒絶なさるのでしたら理由を一寸御記入下さいますやう願ひます。次に集金郵便は未納者へのみの督促かのやう思召しの方もあるやう聞及びましたが決してそんなわけではありませんので一寸御注意までに申上ます此度の會費及寄附者報告欄に誤や報告もれがありましたら御遠慮なく御訪合を願ひます出來るだけ取調べて御答へいたします。

同窓會記事

寄附者報告

自大正八年一月一日起至大正八年十二月三十一日

|                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 一金貳圓 (結婚) 松永 ヒデ | 一金貳圓 (結婚) 下山 マツ |
| 一金參圓 (客員ノ木村清松)  | 一金壹圓 (出産) 富田 しげ |
| 一金貳圓 (結婚) 齊藤 竹  | 一金貳圓 (結婚) 大澤 増子 |
| 一金參圓 (結婚) 藤波 ます | 一金貳圓 (結婚) 大川 ふみ |
| 一金貳圓 (結婚) 中里 いち | 一金貳圓 (結婚) 齊藤 八重 |
| 一金拾五圓四拾九錢       | 總會ノ折會員ヨリ        |
| 一金五圓參拾九錢        | 夏季講習會員ヨリ        |

大正八年度同窓會々計報告

自大正八年一月一日起至大正八年十二月三十一日

收入之部

|                 |        |
|-----------------|--------|
| 一金四百六拾貳圓八拾八錢    | 內 譯    |
| 一金四百貳拾壹圓也       | 寄 會    |
| 一金四拾壹圓八拾八錢也     | 附 費    |
| 支 出 之 部         |        |
| 一金千六百六拾六圓拾九錢五厘也 | 十三號雜誌代 |
| 內 譯             | 十四號雜誌代 |
| 一金百八拾圓九拾錢       |        |
| 一金二百拾圓          |        |

|               |            |
|---------------|------------|
| 一金五圓          | 一金參拾九圓六拾錢  |
| 一金五圓五拾錢       | 一金五圓       |
| 一金壹圓四拾錢       | 一金拾壹圓四拾錢   |
| 一金拾壹圓九拾錢      | 一金拾貳圓參拾五錢  |
| 一金五百七拾圓       | 一金五拾五圓     |
| 一金貳圓參拾錢       | 一金壹圓       |
| 一金貳拾貳圓五拾錢     | 一金拾四圓      |
| 一金五圓          | 一金五圓       |
| 一金五圓          | 一金四圓七拾四錢五厘 |
| 一金拾圓          | 差 引        |
| 一金七百〇貳圓參拾壹錢五厘 | 前年度繰越金差引   |
| 一金九拾圓六拾八錢五厘   |            |

|            |             |
|------------|-------------|
| 同窓會寫真代     | 五ヶ年勤續者記念品代  |
| 十ヶ年勤續者記念品代 | 十ヶ年勤續職員記念品代 |
| 出産祝品代      | 同窓會總會補助     |
| 女教師會補助     | 百圓債券六枚      |
| 同窓會夏季講習補助  | 同窓會印 二個     |
| 會費超過返金     | 葉書代 千五百枚    |
| 切手代        | 紙類          |
| 封筒         | 幹事會費 三回     |
| 雜          | 新會員入會菓子代    |
| 不足         |             |
| 不足         |             |

同窓會費領收者氏名

自大正八年一月一日起至大正八年十二月三十一日

|       |        |      |        |      |        |      |        |
|-------|--------|------|--------|------|--------|------|--------|
| 一金參圓  | ○大竹 ハル | 一金壹圓 | ○田中 キミ | 一金壹圓 | ○瀧澤 ふじ | 一金壹圓 | ○關口 もと |
| 一金壹圓  | ○田中 マサ | 一金貳圓 | ○武田 いさ | 同    | ○關根 ひさ | 同    | ○青木 幸枝 |
| 同     | ○天方 マサ | 同    | ○宮崎 あさ | 同    | ○水谷 ふみ | 同    | ○富久長小衣 |
| 同     | ○川口 トク | 同    | ○落合 美代 | 同    | ○杉山 てる | 同    | ○竹内 久代 |
| 同     | ○清水 フサ | 一金壹圓 | ○松本 ナヨ | 同    | ○田中 よし | 同    | ○松本 千代 |
| 同     | ○塚田 千代 | 同    | ○江田 きく | 同    | ○西東きく江 | 同    | ○河田 さだ |
| 同     | ○細田 いち | 同    | ○久保 つれ | 同    | ○向山 さし | 同    | ○豊田 かう |
| 同     | ○園田 よさ | 同    | ○松原 フク | 同    | ○新藤 よし | 同    | ○壺 喜代  |
| 同     | ○林 のぶ  | 同    | ○立野 タケ | 同    | ○山内 はつ | 同    | ○足立 易  |
| 同     | ○澁谷 ふじ | 同    | ○長澤 富美 | 同    | ○小川 きく | 同    | ○新井 まん |
| 同     | ○萩原 つる | 同    | ○細井 セイ | 同    | ○鈴木 きち | 同    | ○橋本 さく |
| 同     | ○吉田 てい | 同    | ○清津 のぶ | 同    | ○持田 みち | 同    | ○萩原 孝  |
| 同     | ○山田とも代 | 同    | ○鈴木 つれ | 同    | ○徳世 さく | 同    | ○江森 すみ |
| 同     | ○松尾 その | 同    | ○石井 しげ | 同    | ○山田 静江 | 同    | ○佐々木きよ |
| 同     | ○堀江 むめ | 同    | ○田畑 ふじ | 同    | ○宮田 むめ | 同    | ○瀨山 しづ |
| 同     | ○桑田 かつ | 同    | ○岡安 みよ | 同    | ○湯具 ゆき | 同    | ○高橋 ヒデ |
| 同     | ○野原 花  | 一金參圓 | ○田ヶ谷たか | 同    | ○小林 たき | 同    | ○松本 ギン |
| 同     | ○高橋 さよ | 一金壹圓 | ○市川 はつ | 同    | ○泊谷 こよ | 同    | ○齊藤 榮子 |
| 同     | ○氏家 静代 | 同    | ○横山 はつ | 同    | ○野中 さみ | 同    | ○大室 きよ |
| 同     | ○秋山 晴  | 同    | ○岡本 ささ | 同    | ○小野 やす | 同    | ○加藤 當子 |
| 同窓會記事 |        |      |        | 同    | ○吉田 操  | 同    | ○矢内シヅト |
|       |        |      |        | 同    | ○新藤 なな | 同    | ○中西 マサ |
|       |        |      |        | 同    | ○設楽 つれ | 同    | ○林 たけ  |
|       |        |      |        | 同    | ○高柳 ふさ | 同    | ○川邊 ひさ |

(八三)

同窓會記事

|      |         |      |         |      |         |      |         |
|------|---------|------|---------|------|---------|------|---------|
| 一金壹圓 | ○田島 梅子  | 一金壹圓 | ○粕谷 きね  | 一金壹圓 | ○北元 テル  | 一金壹圓 | ○坂根 邦子  |
| 同    | ○小野田 つれ | 同    | ○島根 はつ  | 同    | ○井田 リウ  | 同    | ○浅見 さわ  |
| 同    | ○新井 たね  | 同    | ○山下 コノ  | 同    | ○松尾 静枝  | 同    | ○大越 マリア |
| 同    | ○岡田 たき  | 同    | ○星野 セキ  | 同    | ○北村 愛子  | 同    | ○栗原 マヨエ |
| 同    | ○秋山 ふみ  | 同    | ○川口 さく  | 同    | ○澁谷 まさ  | 同    | ○大崎 かれ  |
| 同    | ○新井 さら  | 同    | ○西 さよ   | 同    | ○齋藤 富貴  | 同    | ○峯岸 きん  |
| 同    | ○倉林 まさ  | 同    | ○柚木 トク  | 同    | ○浅野 静子  | 同    | ○水越 はる  |
| 同    | ○大澤 美佐登 | 同    | ○中島 タメ  | 同    | ○長井 なか  | 同    | ○新海 静子  |
| 同    | ○浅野 澄江  | 同    | ○諸 よう   | 同    | ○筑井 ひで  | 同    | ○島山 より  |
| 同    | ○石田 千代  | 同    | ○大崎 はな  | 同    | ○太田 すま  | 同    | ○今井 てい  |
| 同    | ○大澤 ヒサ  | 同    | ○清水 たか  | 同    | ○北村 ふく  | 同    | ○山口 まん  |
| 同    | ○新井 京   | 同    | ○鈴木 チヨ  | 同    | ○金井 塚さく | 同    | ○保泉 さく  |
| 同    | ○白川 榮   | 同    | ○栗原 綾子  | 同    | ○鈴木 トミノ | 同    | ○清水 ふさ  |
| 同    | ○齋藤 かう  | 同    | ○宮本 茂子  | 同    | ○島田 キクノ | 同    | ○阿部 榮   |
| 同    | ○長谷川 よれ | 同    | ○松信 きぬ  | 同    | ○加治 房子  | 同    | ○赤羽 さき  |
| 同    | ○阿部 セイ  | 同    | ○伊佐山 ふじ | 同    | ○田中 さし  | 同    | ○飯高 龜尾  |
| 同    | ○小泉 キヨ  | 同    | ○酒井 琴   | 同    | ○加藤 ふく  | 同    | ○萩原 かつ  |
| 同    | ○小笠原 松  | 同    | ○笠原 恵智  | 同    | ○松本 べん  | 同    | ○新 さか   |
| 同    | ○飯島 はな  | 同    | ○山口 キヨ  | 同    | ○田中小千代  | 同    | ○遠藤 榮   |
| 同    | ○磯部 信   | 同    | ○伊藤 よし  | 同    | ○清水 やす  | 同    | ○大越 もん  |
| 同    | ○本橋 梅   | 同    | ○大塚 美佐保 | 同    | ○柴崎 やす  | 同    | ○高木 いれ  |
| 同    | ○岡村 満壽  | 同    | ○武笠 ハギノ | 同    | ○黒澤 はる  | 同    | ○朝比奈 ふみ |
| 同    | ○高田 すみ  | 同    | ○野口 つや  | 同    | ○中村 常   | 同    | ○井上 千代  |
| 同    | ○阿佐 美ムツ | 同    | ○大熊 すみ  | 同    | ○諸 いち   | 同    | ○多田 嘉津  |

同窓會記事

|      |         |      |         |      |         |      |         |
|------|---------|------|---------|------|---------|------|---------|
| 一金壹圓 | ○藤本 磨   | 一金壹圓 | ○峰巢 たれ  | 一金壹圓 | ○野尻 つや  | 一金壹圓 | ○中山 八重  |
| 同    | ○瀧澤 みつ  | 同    | ○田中 きん  | 同    | ○牧野 よし  | 同    | ○佐藤 捨   |
| 同    | ○加藤 ろく  | 同    | ○江野 さめ  | 同    | ○坂本 郁子  | 同    | ○林 たけ   |
| 同    | ○小林 まつ  | 同    | ○石井 芳   | 同    | ○渡邊 よみ  | 同    | ○保坂 たか  |
| 同    | ○星野 せい  | 同    | ○今淵 正武  | 同    | ○藪内 貞子  | 同    | ○島村 千恵  |
| 同    | ○森田 まち  | 同    | ○小坂 コハギ | 同    | ○山口 智恵  | 同    | ○見當 さく  |
| 同    | ○中山 きん  | 同    | ○大木 雪   | 同    | ○太田 むめ  | 同    | ○田中 さく  |
| 同    | ○星野 らく  | 同    | ○石川 つる  | 同    | ○杉山 京   | 同    | ○川田 さだ  |
| 同    | ○小島 千代  | 同    | ○久保田 さし | 同    | ○長谷川 もん | 同    | ○萩原 いさ  |
| 同    | ○渡邊 はつ  | 同    | ○木島 ひさ  | 同    | ○高田 静枝  | 同    | ○平田 妙子  |
| 同    | ○中島 美枝  | 同    | ○村賀 芳   | 同    | ○大塚 つる  | 同    | ○村田 たま  |
| 同    | ○吉田 はま  | 同    | ○水谷 かん  | 同    | ○中澤 らく  | 同    | ○高師 ふみ  |
| 同    | ○米山 たみ  | 同    | ○鈴木 フク  | 同    | ○大澤 増子  | 同    | ○島田 ハナ  |
| 同    | ○大森 よれ  | 同    | ○箱田 ひで  | 同    | ○諸 よう   | 同    | ○林 いち   |
| 同    | ○萩原 かつ  | 同    | ○加藤 重   | 同    | ○江田 幾久  | 同    | ○瀧澤 ふじ  |
| 同    | ○松野 だい  | 同    | ○田畑 千代  | 同    | ○堀 菊枝   | 同    | ○高田 すみ  |
| 同    | ○小沼 愛   | 同    | ○北島 よし  | 同    | ○藤野 ハル  | 同    | ○原口 のぶ  |
| 同    | ○池田 やす  | 同    | ○池田 きよ  | 同    | ○奥山 谷子  | 同    | ○目崎 たま  |
| 同    | ○高橋 菊代  | 同    | ○島崎 きん  | 同    | ○飯田 たけ  | 同    | ○針ヶ谷 ヨシ |
| 同    | ○志村 しん  | 同    | ○折原 さう  | 同    | ○志村 セイ  | 同    | ○遠井 はる  |
| 同    | ○堀越 ふみ  | 同    | ○田中 たか  | 同    | ○大河 よし  | 同    | ○野口 しん  |
| 同    | ○長谷川 さみ | 同    | ○松井 やす  | 同    | ○竹内 不器  | 同    | ○福田 てい  |
| 同    | ○金子 ふく  | 同    | ○水谷 さき  | 同    | ○會田 きみ  | 同    | ○中村 さい  |
| 同    | ○小野島 やす | 同    | ○高田 好   | 同    | ○井上 茂能  | 同    | ○増田 すい  |

|      |         |      |        |
|------|---------|------|--------|
| 一金五圓 | ○川島 ます  | 一金貳圓 | ○黒須 いち |
| 一金壹圓 | ○島田 菊野  | 一金四圓 | ○古橋 さよ |
| 一金貳圓 | ○田島 ナカ  | 一金參圓 | ○松本 ヨシ |
| 一金壹圓 | ○笠原 たつ  | 一金四圓 | ○中村 さよ |
| 一金參圓 | ○内田 八重  | 一金參圓 | ○齋藤 八重 |
| 同    | ○石川 めい  | 一金五圓 | ○小菅 君代 |
| 一金四圓 | ○龍崎 せい  | 同    | ○小峯 なか |
| 一金壹圓 | ○豊田 かう  | 一金貳圓 | ○吉岡 香  |
| 同    | ○瀬山 静子  | 同    | ○岡野 美屋 |
| 同    | ○島崎 きん  | 一金壹圓 | ○久住 ひさ |
| 同    | ○加藤 峯   | 同    | ○伊藤 くめ |
| 一金貳圓 | ○細井 和可  | 同    | ○福田 けい |
| 一金壹圓 | ○田島 奈加  | 同    | ○及川 はつ |
| 一金貳圓 | ○榎本 千代  | 同    | ○松永 ひで |
| 一金壹圓 | ○田中 まき  | 同    | ○星野 らく |
| 同    | ○吉岡 すけ  | 同    | ○平野 きく |
| 同    | ○加藤 せき  | 同    | ○柳澤 さよ |
| 一金參圓 | ○新 さか   | 一金參圓 | ○黒澤 きら |
| 一金貳圓 | ○小野島 やす |      |        |

大正八年度帛紗贈呈

平野 八重 藤野 はる 川島 ます  
豊田 かう 林 いち 小笠原 まつ

加藤 いと 高柳 ふみ 磯部 信子  
萩原 カツジ 北郷 りう 中島 ため  
坂部 かつ 瀧澤 ふじ 武正 きよ  
足立 易 中村 常 中島 てる  
日野原 こと 濱野 たき 大崎 はな  
市川 いち  
以上二十二入

死亡見舞贈呈者 (ローソク)

武井 さく 島田 とき

天の海に雲の浪立ち月の船星の林に漕ぎかくる見ゆ

柿本人麿

東の野に陽炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

同

白かれも黄金も玉も何せむに勝れる寶子にしかめやも

山上憶良

會員名簿

○客員名簿

一、現在職員

(本校)

|          |          |    |
|----------|----------|----|
| 受持學科     | 校長       | 氏名 |
| 修身       | 小島政吉     |    |
| 教育、歴史    | 川口登雄     |    |
| 修身、教育、博物 | 齋藤文      |    |
| 數學、物理、化學 | 市原正三     |    |
| 國語、漢文    | 木下春雄     |    |
| 修身、教育    | 吉田政一     |    |
| 地理、博物    | 吉村勝敏     |    |
| 習字       | 木村増二     |    |
| 修身、博物、家事 | 兼舎監 竹内久代 |    |
| 數學、物理、化學 | 兼舎監 橋本ナツ |    |
| 音樂       | 兼舎監 園部千代 |    |
| 裁縫、手工    | 兼舎監 海老澤悦 |    |
| 裁縫、手工    | 兼舎監 野口スミ |    |
| 體操       | 小笠原文次郎   |    |
| 國語、漢文、歴史 | 石井 芳     |    |
| 裁縫       | 山崎さい     |    |
| 會計係      | 田北欣哉     |    |
| 庶務係      | 鯉沼隆太郎    |    |
| 同        | 杉本雄太郎    |    |

會員名簿

學校醫

(附屬小學校)

尾上三郎  
黒澤政次  
中里勝平  
成澤さん

鈴木泰壽

二、舊職員

住所

埼玉縣北埼玉郡不動岡村  
東京府澁谷下澁谷一七四四  
東京市小石川區小日向臺町二九  
石川縣石川郡上金石町  
東京市小石川區林町七〇  
埼玉縣北足立郡浦和町裁判官舎  
三重縣女子師範學校  
香川縣師範學校  
埼玉縣北埼玉郡忍町實科高等女學校  
埼玉縣入間郡豊岡町  
埼玉縣立熊谷高等女學校  
埼玉縣北足立郡浦和町  
東京府下高田町大原一五六九磯松方  
青森縣弘前市川端町三十五番戸  
栃木縣佐野中學校

(舊吉村)

(舊内田)

(八七)

氏名  
石田道三郎  
高橋謙次郎  
大久保介壽  
直江俊三  
澁谷徳三郎  
波多野はま  
堀田要三郎  
佐々木金久  
飯尾たつ  
古谷喜十郎  
高柳悦三郎  
坂本勝藏  
東 かせ  
工藤 長  
武井文藏

八八

中島志づ  
水谷庄五郎  
寺尾菊  
辻村みちよ  
大藏虎亮  
木下ふさを  
高田六郎  
關田貢  
中原英壽  
霜田利平  
吉川由五郎  
坂巻徹郎  
鈴木こく  
大熊友吉

◎  
伊藤静枝  
驚田きく  
馬場きよ  
矢澤きく  
早野うら  
井本たけ  
山田みよ

(舊今泉)  
(舊飯田)  
(舊大木)  
(舊鴨田)  
(舊細井)  
(舊北村)

名簿

○卒業生及修了生名簿

第一回

第二回

(明治三十八年三月卒業)

茨城縣土浦町七番地  
 東京市京橋區北紺屋町一番地東洋タイムス(舊乾)  
 北足立郡三室小學校  
 入間郡堀糸村  
 北足立郡川口小學校  
 兒玉郡金屋村  
 入間郡南古屋小學校  
 北葛飾郡松伏尋常小學校  
 北埼玉郡加須小學校  
 東京  
 北埼玉郡南河原小學校  
 大里郡本畠小學校  
 入間郡  
 米國ワォーナッツアロア  
 南埼玉郡柏壁實科高等女學校  
 茨城縣水戸市  
 東京府下  
 北埼玉郡志多見村  
 不明  
 北海道膽振國白鶴川村  
 東京市  
 北埼玉郡大桑小學校

(舊柳川) 今井 ほか  
 (舊矢島) 深尾 のぶ  
 (舊界) 鈴木 まつ  
 (舊齋藤) 松島 しげ  
 (舊藤野) 淺見 は那  
 (舊松崎) 小谷 野なつ  
 ◎ 朝比奈 きん  
 ◎ 野本 よし  
 ◎ 吉村 さく  
 (舊今村) 内田 うめ  
 (舊吉岡) 吉田 操  
 (舊金森) 水村 ふみ  
 戸ヶ崎 はる  
 村社 たけ  
 ◎ 岸田 春生  
 ◎ 小林 千代  
 ◎ 鎌田 よし  
 ◎ 高松 させ  
 ◎ 相島 浩子  
 (舊白石) 仁木 かね  
 ◎ 遠藤 くめ  
 ◎ 矢島 アイ

埼玉縣南埼玉郡黒濱村  
 埼玉縣北足立郡大宮町櫻木町  
 東京府下巢鴨  
 埼玉縣入間郡山田小學校  
 東京市日本橋區龜島町一〇七三  
 東京市麻布區市兵衛町一ノ一八  
 不明  
 朝鮮釜山高等女學校  
 埼玉縣浦和町  
 兵庫縣多紀郡篠山町池富方  
 埼玉縣北足立郡大貫村  
 埼玉縣北足立郡浦和町  
 東京市深川區西町二十八  
 埼玉縣北埼玉郡禮羽村  
 埼玉縣北埼玉郡忍町  
 入間郡川越町  
 埼玉縣北足立郡川田谷小學校  
 埼玉縣大里郡藤澤小學校  
 東京府下中遊谷二四  
 埼玉縣北埼玉郡忍町  
 埼玉縣入間郡柳瀬小學校  
 埼玉縣入間郡藤澤村

(舊中村) 黒須 千代  
 (舊中村) 梅澤 はる  
 (舊中村) 岡田 きん  
 (舊河野) 中野 千代  
 (舊河野) 田中 こう  
 (舊河野) 尾本 ふみ  
 (舊中島) 伊井 きん  
 (舊根岸) 齋藤 美禾  
 (舊中川) 志村 いつ  
 (舊牧野) 狩野 はる  
 (舊淺井) 榎本 ますみ  
 (舊須永) 高木 長  
 (舊石井) 德澤 ヒロ  
 ◎ 北郷 弘  
 ◎ 新井 百  
 (舊安野) 大谷 さめ  
 (舊菅沼) 若守 さみ  
 (舊島田) 小室 みよ  
 (舊飯島) 澤田 てう

會員名簿

(八九)



會員名簿

大里郡奈良小學校  
秩父郡兩神村  
北埼玉郡忍進修館小學校  
北足立郡大宮町  
東京市本所區横川小學校  
東京市下谷區谷中清水町五番地益田横橋方  
大里郡横澤村小學校  
入間郡川越北尋常小學校  
秩父郡寄居小學校  
北足立郡笹目村  
神戶市水木九七七ノ二  
群馬縣高崎市高等女學校  
東京市三輪田高等女學校  
不明  
埼玉縣浦和町  
不明  
大里郡熊谷町女子小學校  
米國  
入間郡所澤町田島茂橋方

第六回

(明治四十二年三月卒業)

(舊町田) 石川 つる  
(最淺見) 守屋 よし  
(舊水谷) 松岡 よし  
◎ (舊森木) 古山 妙歌  
(舊關川) 間宮 さり  
◎ (舊黒澤) 根岸 さく  
(舊山口) 久保田 さし  
(舊松村) 木島 ひさ  
(舊祖土) 秋山 さだ  
(舊清水) 坂本 つね  
◎ (舊堤) 杉浦 林  
(舊内田) 村賀 芳  
(舊田島) 鈴木 さく  
◎ (舊岡島) 片村 けい  
(舊橋本) 田村 京  
(舊堀川) 水谷 かん  
(舊岡本) 岡島 たま

東京市芝區南橋小學校  
入間郡川越尋常高等小學校  
北埼玉郡羽生町  
大里郡鉢形村  
入間郡川越尋常高等小學校  
安東縣鮮銀社内  
大里郡市田村津田新田  
入間郡宮寺小學校  
北葛飾郡栗橋町  
入間郡太田小學校  
秋田市龜ノ町  
北足立郡土合小學校  
北埼玉郡太田村大字藤間  
北足立郡大宮町  
米國  
新潟縣  
神奈川縣  
死亡  
北足立郡大宮町小學校  
秩父郡野上村  
大里郡小原村小學校  
死亡

(九三)  
(舊土屋) 加藤 壽々  
(舊上原) 宮原 しげ  
(舊大熊) 入江 まさ  
(舊倉林) 保泉 りう  
(舊林) 町田 かく  
(舊龍前) 山口 伊勢  
◎ (舊大越) 長島 かれ  
(舊山田) 栗原 さく  
(舊寺澤) 荒木 たか  
◎ (舊境) 秋庭 かく  
(舊木村) 水原 たま  
(舊小池) 清水 ふさ  
(舊淺瀬) 黒澤 はる  
(舊赤坂) 福田 ハナ  
(舊齊藤) 朝比奈 ふみ

北足立郡浦和町  
兵庫縣神戸市  
神奈川縣横濱市根岸  
秩父郡横瀬村小學校  
北足立郡戸塚村小學校

第七回

(明治四十四年三月卒業)

北足立郡神根村小學校  
東京市下谷區猿樂小學校  
石川縣金澤高等女學校  
兒玉郡  
秩父郡樋口村  
朝鮮  
入間郡所澤小學校  
南埼玉郡柏壁小學校  
北足立郡志木町  
死亡  
入間郡元狹山村小學校  
東京府下瀧ノ川  
東京  
朝鮮  
大里郡石原小學校  
同 郡長野村小學校  
北足立郡小室村小學校

(舊岸野) 池上 金  
(舊關川) 吉崎 岸  
(舊平井) 坪井 多都  
(舊瀬山) 守屋 ヤイ  
(舊石井) 島根 登志  
(舊日倉) 白倉 はな  
(舊吉川) 松川 めい  
(舊原) 木原 みね  
(舊清水) 染野 みさ  
(舊稻村) 横田 かめ  
(舊多田) 山内 あや  
(舊加藤) 中島 喜見  
(舊新井) 細田 よく  
(舊木村) 廣瀬 英信  
◎ (舊田島) 廣瀬 英  
◎ (舊北郷) 田島 なみ  
(舊坂部) 五月女 かつ  
齋藤 いな

北葛飾郡八木郷村小學校  
北葛飾郡松伏鎮村  
北足立郡浦和小學校  
大里郡横澤小學校  
秩父郡高篠村  
東京中村高等女學校  
東京  
Daigo Koshi. But Palat R. E. No1. Johore.  
北足立郡大宮町庚申公園通り  
死亡  
秩父郡尾田村小學校  
大里郡熊谷町女子小學校  
北足立郡大宮小學校  
愛知縣碧海郡高濱町大字吉濱  
北埼玉郡忍町  
東京市牛込區天神町二二  
北足立郡木崎小學校  
東京市小石川區  
大里郡男妾小學校

第八回

(明治四十五年三月卒業)

(舊岸野) 戸張 きく  
(舊淺井) 渡邊 たか  
(舊高橋) 飯野 八重穂  
◎ (舊中村) 古谷 常  
(舊本橋) 小池 かつ  
(舊品田) 逸見 義江  
◎ (舊瀧) 中川 文英子  
(舊坂本) 國分 君子  
(舊早川) 根本 喜久  
(舊柴道) 小林 まつ

會員名簿

(九三)

會員名簿

北足立郡土合小學校  
北足立郡尾間木村  
東京市淺草區  
秩父郡大宮町  
不明  
入間郡入間川小學校  
入間郡  
死亡  
東京  
大里郡熊谷町女子小學校  
比企郡今宿小學校  
同 野本小學校  
秩父郡大宮小學校  
東京  
大里郡深谷小學校  
不明  
不明  
北埼玉郡行田  
南埼玉郡河合小學校  
同 久喜町  
東京  
南埼玉郡久喜町中島方  
秩父郡大宮小學校

(舊小林) 平野 谷代  
(舊岩林) 星野 勢以  
松本 美子  
秦 豐子  
(舊鈴木) 大川 ふみ  
石野 ケン  
(舊齋藤) 栗原 サダ  
發智 多津  
(舊利根川) 元田 花  
本澤 なつ  
(舊藤倉) 加藤 みれ  
石井 てい  
(舊安部) 江野 さめ  
諸 いち  
境野 保志子  
野口 すい  
(舊太田) 吉田 きぬ  
岡田 ふく  
高木 のぶ  
勝田 まさ  
(舊岡安) 熊倉 靜  
新井 感子  
(舊中島) 小森 谷春中  
(舊堀部) 米村 富子  
北葛飾郡豐田小學校  
新潟市旭町水道通り五二三九  
東京市兩國元町一二  
東京市淺草區三筋町  
福島縣宮城郡平町田町  
滿州長春東十一區百六號  
和歌山縣師範學校  
神奈川縣鎌倉小町  
死亡

第九回

(大正二年三月卒業)

(舊加藤) 中島 美枝  
(舊山口) 齊藤 せい  
關 せい  
(舊久住) 柳澤 はな  
富田 しげ  
(舊平井) 今淵 正武  
谷井 あき  
(舊茂木) 岩田 りん  
増田 まつ  
會田 きみ  
石塚 づき  
(舊高田) 渡邊 みち  
遠井 はる  
(舊河田) 堀 陽ふみ  
針谷 よし  
(舊竹内) 多田 か津  
關口 嘉子  
山本 さよ  
鈴木 カツ子  
(舊萩原) 若林 カツ子  
(舊山中) 茂木 あき  
(舊秋山) 牧 恩とし  
(舊福島) 徳 橋 石  
今泉 ふく  
根本 しづ  
辻田 靜枝  
淺野 かな江  
吉野 エイ  
小久保 君  
岡部 うれ  
(舊馬場) 土岐 いせ  
加藤 しん  
(舊藤野) 粕谷 たみ  
岡野 美屋  
國府 みき  
米山 たみ  
(舊吉田) 吉田 悦  
小暮 もと  
久保 よし  
大島 なみ  
大貫 かみ  
龍前 せい  
關根 さか  
(舊相良) 中村 きく  
(舊服部) 須賀 なみ

(九四)

秩父郡大柵小學校  
同 吉田小學校  
不明  
東京市本郷區  
不明  
比企郡玉川小學校  
同 大河村腰越  
栃木縣上都賀郡  
東京芝區御田小學校  
栃木縣上都賀郡  
北足立郡浦和小學校  
同 大宮町  
死亡  
南埼玉郡岩槻町  
入間郡所澤町  
死亡  
東京市麹町高等女學校  
臺灣  
朝鮮  
死亡  
東京府下巢鴨町宮下  
北葛飾郡成小學校

第十回

(大正三年三月卒業)

戸口 みな  
新井 たま  
日野原 こさ  
(舊野澤) 小林 高い  
井上 千代  
松本 まさ  
(舊大木) 岡本 雪子  
小山 雅子  
種村 しげ  
大川 よし  
(舊今泉) 竹内 不器  
竹内 不器  
(舊坂本) 西原 錦子  
西原 錦子  
(舊水谷) 鈴木 巳代  
鈴木 巳代  
(舊山崎) 中原 きよ  
中原 きよ  
(舊中村) 島崎 きよ  
島崎 きよ  
(舊齋藤) 新井 きん  
新井 きん  
金子 きぬ  
(舊高柳) 山田 ふみ  
山田 ふみ  
(舊台) 奥澤 シホ  
奥澤 シホ  
櫻井 まさ  
目崎 瑞子  
(舊額田) 原口 のぶ  
朝鮮大邱東雲町三〇六  
臺灣臺北府中街  
北足立郡尾間木小學校  
同 川口町小學校  
同 大宮町小學校  
東京澁谷  
東京  
同 高麗村小學校  
秩父郡尾田時小學校  
長野縣丸子町  
東京府下成蹊實務學校  
大間郡豐岡村  
東京  
死亡  
比企郡小川村小學校  
北足立郡浦和町小學校  
東京  
大里郡岡部村  
東京小石川區青柳小學校  
北足立郡大宮町  
同 成田村小學校  
東京車坂小學校  
北埼玉郡羽生町小學校  
同 騎西小學校

會員名簿

(九五)

(九六)

會員名簿

(大正六年三月卒業)

千代田 いと

1

鈴木  
水  
トシ  
シ

(九七)

八九

三月卒業

◎ 市川 初  
保泉 喜久子  
星野 せき  
川口 徳  
粕谷 こよ  
横山 ハツ  
吉川 レン  
高橋 さよ  
田中 まさ  
霜田 きよ  
土屋 きし  
長澤 富美  
大室 ミチ  
金子 はな  
下山 マツ  
松岡 たか  
小林 たき  
新井 万  
阿佐美 ムツ  
浅見 さわ  
佐藤 トシ

(舊大崎)  
(舊押田)  
◎

(舊武正)

鈴木 茂子

(大正八年三月卒業)

大森 山口 山口 戴内 福田 新井 浅野 佐藤 志村 渡谷 清水 齊藤 北元 島村 自在 持田 野口 坪井  
知恵 知恵 貞子 貞子 キヤク 澄江 拾 七イ まさ たか テル 千恵 美福 みち さん 茂龍

小室 中野 小久保 矢島  
ゆき 理子 なか サト

年三月卒業)

(大正九年三月卒業)

會員名簿

(九九)

會員名簿

北足立郡石戸尋常高等小學校  
北葛飾郡寶珠花尋常高等小學校  
北葛飾郡行田尋常高等小學校  
北葛飾郡豊岡尋常小學校  
東京音楽學校  
兒玉郡青柳尋常高等小學校  
比企郡高坂尋常高等小學校  
大里郡深谷尋常高等小學校  
東京女子高等師範學校  
入間郡川越尋常高等小學校  
北埼玉郡大桑尋常高等小學校  
北足立郡小谷尋常高等小學校  
兒玉郡渡瀬尋常小學校  
北埼玉郡加須尋常高等小學校  
秩父郡原谷尋常高等小學校  
東京女子高等師範學校  
北足立郡宮原尋常高等小學校  
北足立郡宮原尋常高等小學校  
入間郡越生尋常高等小學校  
入間郡三ヶ島尋常高等小學校  
秩父郡白川尋常高等小學校  
北葛飾郡高野尋常高等小學校  
大里郡岡部尋常高等小學校  
大里郡深谷尋常高等小學校

大崎さめ  
新井しづ江  
柴田さき  
尾島しづ  
關根彌生  
金田ゆき  
高田幾  
田中孝  
永井ミサチ  
川崎梅  
野本喜代  
小池まつ子  
矢島あつ  
高橋領子  
淺見マサ  
柿崎包子  
高野トキ  
松村都志  
平山保津  
新藤ハマ  
諸部越子  
服部越子  
佐山ゆき  
德澤與利

北足立郡新倉尋常高等小學校  
北葛飾郡幸松尋常高等小學校  
北葛飾郡金屋尋常高等小學校

○本科第二部卒業生

第一回 (大正三年三月卒業)

◎富久長小衣  
關川不二子  
杉山福  
大澤つれ  
掛原てる  
島田さく  
石田貞  
加賀野千代  
中島緒留  
田所よし  
古橋さ代  
落合美代  
町田つれ  
高橋ヒヲ  
白川榮  
佐藤美代  
高柳フサ

第二回

(大正四年三月卒業)

同 川越北尋常高等小學校  
北足立郡原市尋常高等小學校  
神奈川縣川崎町久根崎  
入間郡川越町  
茨城縣  
入間郡南古谷小學校  
大里郡深谷女子小學校  
秩父郡野上村  
不明  
休職  
大里郡熊ヶ谷男子小學校  
南埼玉郡  
北海道  
東京  
東京  
東京小石川  
千葉縣  
長野縣  
不明  
東京府下

(舊石井)

(舊野尻)

◎

(舊市川)

(舊田口)

松本系子  
黒須いち  
森フミ  
塚田千代  
橋本つや  
深谷輝  
渡邊はつ  
木村ツル  
松本さき  
上村てる  
松本ムメ  
木島喜  
橋本恵子  
中村悟  
中原初恵  
伊從愛子  
林サダ  
粕谷きぬ  
田村あつみ  
山下清子  
塚本たま  
齋藤エミ

第三回

(大正五年三月卒業)

北葛飾郡吉田第一小學校  
北足立郡浦和町  
死亡  
入間郡霞ヶ関小學校  
同所澤小學校  
不明  
不明  
入間郡川越新田町  
大里郡三ヶ尻小學校  
死亡  
大里郡八基尋常小學校  
死亡  
米國  
北足立郡箕田小學校  
大里郡熊谷女子小學校  
北埼玉郡成田尋常高等小學校  
大里郡石原小學校  
南埼玉郡大山村  
東京市區役所内  
入間郡田面澤小學校  
北足立郡川口小學校  
同 郡安行小學校

(舊榎本)

園田ふさの  
加藤よれ  
小泉リイ  
長谷川つる  
山口りつ  
松井彌壽子  
佐藤サク  
矢島美津  
吉野富美  
丹波芳子  
針ヶ谷多嘉  
小松原政  
瀬山トリ  
瀧澤光  
折原さう  
水谷ささ  
島崎きん  
荒井美智  
時田こま  
小野島やす  
矢内シヅト  
長瀬さよ

會員名簿

(1010)

(1011)

|      |      |         |          |      |     |
|------|------|---------|----------|------|-----|
| 菅原登美 | 田中たか | 中西マサ    | 宇野はな     | 門倉ひで | 天野貞 |
| 不明   | 京京府  | 同郡玉井小學校 | 大里郡大幡小學校 | 入間郡  | 長野縣 |

(大正六年三月卒業)

|     |     |             |
|-----|-----|-------------|
| 北村  | フク  | 不明          |
| 杉山  | てる  | 大連市薩摩町㊦區二號地 |
| 星野  | らく  | 第五回         |
| 栗原  | ヤヨエ |             |
| 池田  | きよ  | 北足立郡大宮小學校   |
| 新海  | しづ子 | 東京          |
| 北島  | よじ  | 北足立大鵠ヶ谷小學校  |
| 久米  | しげ  | 同 郡大宮小學校    |
| 佐々木 | きよ  | 同 郡上尾小學校    |
| 大澤  | 増子  | 同 郡石戸小學校    |
| 堀   | きやう | 同 郡浦和小學校    |
| 伊藤  | くめ  | 秩父郡日野澤小學校   |
| 田畑  | ふじ  | 大里郡熊ヶ谷女子小學校 |
| 西   | トヨ  | 大里郡熊ヶ谷男子校   |
| 小菅  | 君代  | 同 郡同 女子校    |
| 彦久保 | トラ  | 同 郡御正小學校    |

(大正七年三月卒業)

中井田 すみ  
小沼 愛子  
野口 當  
加藤 富  
濱野 松枝  
田島 梅子  
松尾 曾能  
田中 よし  
新井 マヌ  
山田 さも代  
高柳 ちよ  
江森 すみ  
島山 より

(大正八年三月卒業)

|       |                |
|-------|----------------|
| 石田千代  | 大里郡本郷尋常高等小學校   |
| 萩原いさ  | 比企郡八保尋常高等小學校   |
| 田中きく  | 大里郡中瀬尋常高等小學校   |
| 杉山京   | 北足立郡南平柳尋常高等小學校 |
| 伊佐山フジ | 北埼玉郡須影尋常高等小學校  |
| 笠原恵知  | 北足立郡三橋尋常高等小學校  |
| 川田サカ  | 北足立郡大砂土尋常高等小學校 |
| 酒井琴   | 入間郡古谷尋常高等小學校   |
| 宮本茂子  | 北足立郡第一蔵尋常高等小學校 |

(大正九年三月卒業)

鈴砂森水岡田伊近森三深高  
木村貞谷本中藤藤上谷橋  
次富子靜光靜フミシ登  
枝士子枝榮榮ミシ野美

(1011)

會員名簿

北足立郡戸田尋常高等小學校  
比企郡大河尋常高等小學校  
大里郡御正尋常高等小學校  
北足立郡大宮尋常高等小學校  
南埼玉郡塚玉尋常高等小學校  
大里郡岡部尋常高等小學校  
入間郡入間尋常高等小學校  
北埼玉郡中條尋常高等小學校  
入間郡入間川尋常高等小學校  
南埼玉郡大相模尋常高等小學校  
大里郡東武尋常高等小學校  
秩父郡小栗尋常高等小學校  
大里郡奈奈尋常高等小學校  
南埼玉郡久喜尋常高等小學校  
北足立郡川口尋常高等小學校

講習科修了者

第一回

東京市本所區裏猿江町  
北足立郡鳩ヶ谷尋常小學校  
同 郡大和田小學校  
同 郡與野第二小學校

(舊小山) 武内清  
(舊鈴木) 井上かれ  
(舊石井) 金井奈美

森 仰き 同 郡春岡尋常高等小學校  
新井 なか 同 郡新郷尋常高等小學校  
小松 原けい 同 郡片柳小學校  
笠井 登代 同 郡第一與野尋常高等小學校  
佐藤 重子 東京  
山崎 金子 東京市四ツ谷區信濃町一六  
橋本 みちな 朝鮮  
木島 みつ 北埼玉郡成田村  
三芳 コッ 不明  
大澤 きん 比企郡南吉見小學校  
西垣 照子 大里郡熊谷町筑波町  
宮崎 やす 秩父郡横瀬小學校  
加藤 富子 北埼玉郡加須小學校  
中田 よし 兒玉郡共和尋常高等小學校  
小山 七 北足立郡大宮小學校  
野崎 富美 南埼玉郡越ヶ谷小學校  
同 郡栗山枝郷尋常小學校  
東京市神田區五軒町  
北葛飾郡八代第三小學校  
入間郡柳瀬小學校  
不明  
香港

(104)  
松本 じょう 同 郡坂本小學校  
加藤 重 小坂 コハギ  
森田 まち 小谷野 アサ  
荻野 一二三 荻野 一二三  
町田 ぜん 根岸 よし  
蜂須 子 牧野 よし  
根岸 よし 松本 下サ  
宮本 下サ 松本 下サ  
松本 下サ 松本 下サ  
横塚 りん 田中 きん  
田中 きん 平野 ミヤ  
松本 郁子 吉田 はま  
姪間 あさ 石塚 よし  
(舊服部) 石塚 よし  
(舊渡邊) 島田 よし  
(舊北澤) 小沼 喜勢  
長谷川 つり

秩父郡大瀧村大字三峰

不明

同

北埼玉郡駒西町

第二回

大正四年三月修了

(舊角田)

中山 きん 同 郡坂戸小學校  
大山 みれ 東京  
小川 久子 東京  
新井 阿種 入間郡高萩小學校  
齋藤 千代 兵庫縣武庫郡西郷町大石樽谷利右衛門方(舊吉田)

北足立郡宮原小學校  
同 郡浦和小學校  
同 春岡小學校  
同 郡安行小學校  
同 郡神根小學校  
同 郡大谷小學校  
同 郡上平小學校  
同 郡大宮小學校  
同 郡第二久保小學校  
同 郡大宮小學校  
同 郡大宮小學校  
同 郡青川小學校  
同 郡藤折小學校  
秩父郡大瀧小學校  
不明  
北足立郡浦和小學校  
南埼玉郡須加原小學校  
入間郡第一須加原小學校

會員名簿

(舊平野)

松本 へん 同 郡坂戸小學校  
田中 よし 東京  
中村 登代 入間郡高萩小學校  
柴道 よし 兵庫縣武庫郡西郷町大石樽谷利右衛門方(舊吉田)  
星野 らく 同 郡小原小學校  
吉田 はる 同 郡本島小學校  
箱田 ひで 北葛飾郡吉田町  
小島 千代 北足立郡芝小學校  
長谷川 トヨ 同 郡本崎小學校  
町田 淑 同 郡第一指扇小學校  
橋本 ちよ 同 郡加納小學校  
金子 ふく 不明  
橋本 よし 北足立郡藤折小學校  
彦久保 ちち 入間郡水谷小學校  
齋藤 八重 同 郡所澤小學校  
野口 たみ 同 郡所澤小學校  
井田 ふじ枝 同 郡所澤小學校

第三回

大正五年三月修了

同 郡坂戸小學校  
東京  
東京  
入間郡高萩小學校  
兵庫縣武庫郡西郷町大石樽谷利右衛門方(舊吉田)  
比企郡松山町  
同 郡明覺第一小學校  
北埼玉郡樋遣川小學校  
大里郡市田小學校  
同 郡丹庄小學校  
同 郡小原小學校  
同 郡本島小學校  
北葛飾郡吉田町  
北足立郡芝小學校  
同 郡本崎小學校  
同 郡第一指扇小學校  
同 郡加納小學校  
不明  
北足立郡藤折小學校  
入間郡水谷小學校  
同 郡所澤小學校  
同 郡所澤小學校

國府 たか 同 郡坂本小學校  
齊藤 ゆき 小坂 コハギ  
小峰 なか 小谷野 アサ  
馬橋 せん 荻野 一二三  
島田 もと 根岸 よし  
村田 ふく 松本 下サ  
増田 つれ 松本 下サ  
中條 榮子 松本 下サ  
松原 ちち 田中 きん  
内田 いち 平野 ミヤ  
矢島 ちつ 吉田 はま  
浦和 とし 姪間 あさ  
中村 壽代 石塚 よし  
石塚 きん 島田 よし  
佐藤 テツ 小沼 喜勢  
高橋 菊代 長谷川 つり  
安川 やす 齋藤 八重  
相田 マサ 野口 たみ  
鈴木 貞 井田 ふじ枝  
島崎 翠

(105)

會員名簿

同 郡吾妻小學校  
同 郡高橋小學校  
同 郡入間川小學校  
同 郡高麗川小學校  
比企郡西吉見小學校  
同 郡八和田小學校  
同 郡菅谷小學校  
秩父郡八幡小學校  
同 郡國神小學校  
郡久那小學校  
入間郡川越町  
兒玉郡七本木小學校  
同 郡那珂小學校  
大里郡玉井小學校  
同 郡大寄小學校  
同 郡御正小學校  
同 郡本島小學校  
北埼玉郡北河原小學校  
不明  
南埼玉郡櫻井小學校  
同 郡増林小學校  
北葛飾郡栗橋小學校  
北足立郡土合小學校

加藤 隆  
大澤 久仁  
河野 久し  
犬竹 ハル  
原 いれ  
菅原 奈美  
深田 茂三  
飯島 七五三  
吉田 さし  
入谷 モト  
田中 モト  
川部 もと  
瀧澤 ヒロ  
井田 ひろ  
小柴 めい  
松本 はつ  
野崎 シヅ  
山口 芳  
永井 よし  
増田 スイ  
福岡 あい  
池澤 政江

北足立郡芝草高等小學校  
退職  
北足立郡横管根小學校  
同 郡志木町  
同 郡川口小學校  
同 郡大和田第一小學校  
同 郡川口尋常高等小學校  
同 郡尾間木小學校  
入間郡幸野小學校  
同 郡第一飯能尋常高等小學校  
比企郡平小學校  
入間郡加治小學校  
二部入學  
同 郡第一飯能小學校  
比企郡西吉見小學校  
同 郡明覺第一小學校  
秩父郡影森村  
兒玉郡共和尋常高等小學校  
北埼玉郡玉井小學校  
南埼玉郡慈恩寺尋常高等小學校  
同 郡櫻井尋常高等小學校  
死亡

(舊吉田)

飯塚 直  
田口 きく  
大江 よし  
三上 さし  
須賀 むめ  
鈴木 加代  
杉山 美代  
齋藤 はな  
椎名 みき  
小澤 ささ  
武井 いさ  
平井 ふじ  
大野 はな  
篠原 純子  
長谷川 竹子  
宮崎 あさ  
新井 つる  
森 フミ  
古市 ヲメ  
飯田 たけ  
高橋 千代  
武井 さく

第五回

大正七年三月修了

南埼玉郡豊春尋常高等小學校  
死亡  
北葛飾郡上高野小學校  
同 郡田小學校  
同 郡八代第一小學校  
北足立郡戸田小學校  
同 郡新郷小學校  
同 郡鳩ヶ谷小學校  
同 郡川口小學校  
同 郡浦和町  
同 郡第一久保小學校  
秩父郡高橋小學校  
比企郡唐子小學校  
兒玉郡兒玉小學校  
千葉  
北埼玉郡志多見小學校  
北足立郡七里小學校  
北埼玉郡不動岡小學校  
同 郡大袋小學校  
大里郡大寄小學校  
北葛飾郡三輪野江小學校

(舊利根川)

奥山 谷子  
小林 よし  
川島 カツ  
針ヶ谷 茂野  
齋藤 龍子  
新井 静枝  
柳世 徳  
三ヶ上 さし  
田中 きみ  
中村 美和  
針ヶ谷 愛子  
大島 好  
久米 きさ  
根岸 しげ  
北條 美  
岡戸 つれ  
島村 八重  
秋元 ひさ  
早船 いん  
池田 玉  
山路 ゆき  
戸張 この

同 郡旭小學校  
同 郡芳川小學校  
入間郡日東小學校  
同 元加治小學校  
同 郡宗岡小學校  
同 郡山口小學校  
比企郡高坂小學校  
南埼玉郡黒濱小學校  
同 郡武里小學校  
同 郡黒濱小學校  
同 郡萩島尋常高等小學校  
同 郡櫻井尋常高等小學校  
同 郡八和田小學校  
大里郡深谷小學校  
入間郡東吾野小學校  
死亡  
北足立郡安行小學校  
北足立郡野田小學校  
入間郡小手指小學校  
入間郡高麗小學校  
入間郡川口小學校  
入間郡三ヶ島小學校

第六回

大正八年三月修了

細井 わか  
天方 まさ  
松本 さよ  
沖かほろ  
鈴木 みれ  
山口 しげ  
齋藤 いれ  
福田 いれ  
新堀 いれ  
齋藤 せつ  
吉田 俊  
小島 由江  
永谷 文衛  
内田 重枝  
大河原 智恵  
向山 さし  
山田 静江  
見富 さく  
栗原 綾子  
松野 だい  
浅野 静子  
鈴木 チヨ

(117)

會員名簿

南埼玉郡登春小學校  
兒玉郡那珂小學校  
兒玉郡青柳小學校  
兒玉郡本庄小學校  
兒玉郡長幡小學校  
第二部入學  
不明  
北埼玉郡笠原小學校  
北埼玉郡三俣小學校  
第二部入學  
死亡  
南埼玉郡河合小學校  
北足立郡上平小學校  
大里郡熊谷男子小學校  
南埼玉郡百間小學校  
南埼玉郡和土小學校  
北葛飾郡成小學校  
北葛飾郡杉戸小學校  
死亡  
北足立郡大石小學校  
第二部入學  
北足立郡加納小學校  
北足立郡石戸小學校  
比企郡伊草小學校

(舊高田)

岡田多喜  
大澤美佐登  
倉林マサ  
秋山ふみ  
新井トヲ  
林たけ  
丸山好  
岡崎つる  
梅澤貞  
新井静子  
大島エイコ  
長谷川よれ  
小川きく  
中山八重  
齋藤かう  
石井しづ  
岡村満壽  
小野田つね  
大熊すみ  
山内初子  
鈴木フク  
齋藤白シ  
西東きく江  
北村愛子

比企郡坂戸小學校  
北足立郡志木小學校  
南埼玉郡出羽小學校  
北足立郡馬宮小學校  
秩父郡國神村

第七回

(大正九年三月修了)

北埼玉郡水深尋常高等小學校  
秩父郡中川尋常高等小學校  
入間郡南古谷尋常高等小學校  
北葛飾郡櫻田尋常高等小學校  
兒玉郡大澤尋常高等小學校  
南埼玉郡篠津尋常高等小學校  
秩父郡小鹿野尋常高等小學校  
入間郡豐岡尋常高等小學校  
北足立郡第一久保尋常高等小學校  
南埼玉郡蓮田尋常高等小學校  
入間郡豐岡尋常高等小學校  
入間郡藤澤尋常高等小學校  
秩父郡太田尋常高等小學校  
秩父郡吉田尋常高等小學校  
南埼玉郡菩提尋常高等小學校  
本科第二部入學  
南埼玉郡八和田尋常高等小學校

伊藤與志  
久保田富子  
平田トヨ  
松本よし  
茂木みつ  
加藤キノ  
黒澤セイ  
今井利登  
清野きん  
岡野喜久代  
池田ヨシ  
鷹塚登美  
宇田川雅子  
秋元波奈  
松岡君子  
古川はる  
會田茂子  
荒船登久次  
吉川セシ  
齋藤ささ  
田中千賀  
柴田きみ

(100)

北埼玉郡井泉尋常高等小學校  
比企郡岩谷第二尋常小學校  
北足立郡青川尋常小學校  
北埼玉郡太田尋常小學校  
南埼玉郡武里尋常高等小學校  
本科第二部入學  
北埼玉郡元和尋常小學校  
北足立郡上平尋常高等小學校  
北足立郡野田尋常高等小學校  
北足立郡神根尋常高等小學校  
入間郡南古谷尋常高等小學校  
北葛飾郡富田尋常高等小學校  
入間郡入間川尋常高等小學校  
入間郡川越南尋常高等小學校  
入間郡川越南尋常高等小學校  
北葛飾郡吉田第二尋常小學校

中野ツ子  
齋藤琴  
前田孝子  
木崎ふい  
村田遊歌  
高遠屋ま  
近藤三津子  
岸本はな  
武笠幸  
遠藤やす  
井原つや  
横田あさ  
越中ささ  
渡邊金  
小川こう  
佐藤由エ

菅原道真

心だに誠の道にかなひなば祈らすとも神や守らん  
海ならずたゞよふ水の底までも清き心は月を照さん  
君が住む宿の櫓をゆくゆくもかくるゝ迄にかへり見しはや

校歌

橋本光秋先生作歌

これの學びの庭はそも  
明治十あまり一年の  
北の陸路の國々を  
みそなはします道すがら  
一夜御車よせまし、  
假の宮居のあさ、しる。  
かゝる譽れのみ光を  
永久に仰ける尊さは  
國廣しきも外にまた  
數ふる程もあらざらん  
此の幸はをみな子の  
我等が身にも餘るなり。  
今日よりいよ、益々に  
敬の御旨かじこみて  
忠と孝とを心にて  
恭と謙との道すぐに  
博愛兼れてつかの間も  
我等は忘れず守らまし。

編輯餘錄

△會報の体裁内容に就いては、いつも考へて居るころがありましたが、もとより本校友會雜誌が只の作文帳に傾いたり、或は只の報告書に過ぎなかつたりして無趣味なものに陥りがちなので御座います。勿論趣味を申しまして文學専門の雜誌でも御座いませう。寧ろ文學種一天張に陥らないやうにしたいと思ふ事が、緊切の事項なので御座いませう。それで、本誌は學說叢話なども豊富にしたいと存じました。又後進は先輩の御誘導を仰ぎたく、先輩の方々には後進の様なものを御知らせ致し度、かくて同窓生お互の連絡をさる機關雜誌として相當の効績を擧げたいと存じました。漸く版成りてこれに對しますと、勿々の際には申しながら力注ぐべかりし點に於て更に澤山の缺陷が御座いまして非常に慚愧たるものが御座います。

尙本誌の目的が右申しましたやうな譯で御座いますから、改良すべき點、或は御希望の點などが御座いましたならば、同窓會幹事宛なり雜誌部宛なり御話し願へば此の上もない幸と存じます。

△表紙は大分同じものが續きましたから、圖案をかへたいと存じましたが、時日が尠かつた爲やむを得ませんでした。表紙の文字は木村先生の御手になりましたもの、謹で御禮を申します。

△口繪は十月十五日 皇后陛下 大宮町氷川神社御參拜の際、台覽に供し奉つた生徒成績品の内畫をお裁縫で御座います。いづれもよい出来で面目を施しまして誠に光榮な事と存じます。職員一同

の寫眞は、この大正九年度は大部分移動が御座いまして新しい先生方も澤山お見えになりましたから一葉を寫して口繪を致しました會員名簿の客員の部に諸先生方の御擔任學科をも記入いたして置きましたから御覽下さい、何かの便宜にならうと存じます。

△埼玉縣第三回女教師會記事は齋藤先生の御手になり、全國女教師會記事は成澤先生の御手になったもの、御忙しい中を特に御寄稿下さいました兩先生の御好意を深謝いたします。又講演筆記は多くは生徒委員の速記したもので、其の他募集文の蒐集整理に随分熱心に努力されました。

△會員名簿は同窓會幹事の方の御手になったもの、先輩諸姉の御動靜もわかり、大變便利なものと存じます。遺漏誤謬などの點が御座いましたならばごうぞ御知らせ下され度御願ひ致します。「舊性」とある方が、◎印の方は御結婚なされた方々で御座います。

△内容を豊富にしたいと思ひました爲、活字をつめたかの感がないでも御座いませう、清水活版所は深き同情を本誌に寄せられ、紙價依然として高く工賃亦やすからざる折から、僅少の經費を以て印刷製本を請せられました、その厚意を一同に代つて深く感謝します。

△勤續者表彰の記事中「五年、十年、十五年」と御座いますのは「五年、十年」の誤で御座います。こゝに訂正いたします。

△では、皆様平和な新年をお迎へなさいませう。併せて皆様の御清福をお祈りいたします。(石生繪生記)

大正九年十二月十五日午後十一時

大正九年十二月十八日印刷

大正九年十二月廿三日發行

非賣品

編輯兼  
發行者  
埼玉縣女子師範學校內  
埼玉縣女子師範學校校友會

右代表者  
田 北 欣 哉

印刷人  
清 水 武 藏

印刷所  
清水活版所

埼玉縣北足立郡  
浦和町三八四五番地  
埼玉縣北足立郡  
浦和町三八四五番地



30068431

上  
子  
英  
文  
書  
庫

